

茨城県教育財団文化財調査報告第309集

堂ノ上遺跡

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道
新設事業地内埋蔵文化財調査報告書

下 卷

平成21年3月

国土交通省常総国道事務所
財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第309集

どう の うえ
堂 ノ 上 遺 跡

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道
新設事業地内埋蔵文化財調査報告書

下 卷

平成21年3月

国土交通省常総国道事務所
財団法人茨城県教育財団

目 次

-下 卷-

2 古墳時代の遺構と遺物	351
(2) 壁穴建物跡	351
(3) 土坑	366
3 平安時代の遺構と遺物	374
(1) 壁穴住居跡	374
(2) 土坑	377
4 中世の遺構と遺物	378
掘立柱建物跡	378
5 その他の遺構と遺物	379
(1) 溝跡	379
(2) 土坑	387
(3) 遺構外出土遺物	397
第4節 まとめ	399
付 章 堂ノ上遺跡の自然科学分析	417
写真図版	
抄 錄	

2 古墳時代の遺構と遺物

(2) 壁穴建物跡

第1号壁穴建物跡（第277・278図）

位置 調査区西部のD 2 c9区、標高19.2mの台地上に位置している。

重複関係 第18号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸6.98m、短軸6.84mの方形で、北西壁の北寄りが長軸2.28m、短軸0.96mの長方形に張り出している。主軸方向はN-32°Wである。壁高は48~71cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。張り出し部は平坦で、中央部の床面よりやや高い。

炉 北西部の張り出し部寄りに位置している。長径94cm、短径52cmの橢円形で、赤変している。南部で炭化粒子と粘土塊が確認でき、炉との関連が考えられる。

炉土層解説

1	暗褐色	燒土粒子・炭化粒子少量	ローム粒子	燒土粒子・炭化粒子微量	3	暗褐色	燒土粒子少量	ロームブロック・炭化粒子微量
		ロック微量			4	暗褐色	ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子少量	
2	暗褐色	ロームブロック少量	燒土粒子・炭化粒子微量		5	灰褐色	粘土ブロック多量	

竈 北東壁の東寄りに付設されている。煙道部しか確認できなかったため、規模は不明である。

竈土層解説

1	灰褐色	砂粒少量	ローム粒子	燒土粒子・炭化粒子微量	2	黒褐色	ローム粒子	燒土粒子・砂粒微量
---	-----	------	-------	-------------	---	-----	-------	-----------

ピット 4か所。P 1~P 4は深さ58~70cmで、規模と位置から主柱穴である。

貯蔵窓 東コーナー部に位置している。長軸103cm、短軸68cmの長方形で、深さは58cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。ブロック状の堆積状況から埋め戻されている。

貯蔵窓土層解説

1	暗褐色	燒土粒子・炭化粒子少量	ロームブロック微量	3	暗褐色	ロームブロック少量	燒土粒子・炭化粒子微量
2	暗褐色	燒土粒子少量	ロームブロック・炭化粒子微量				

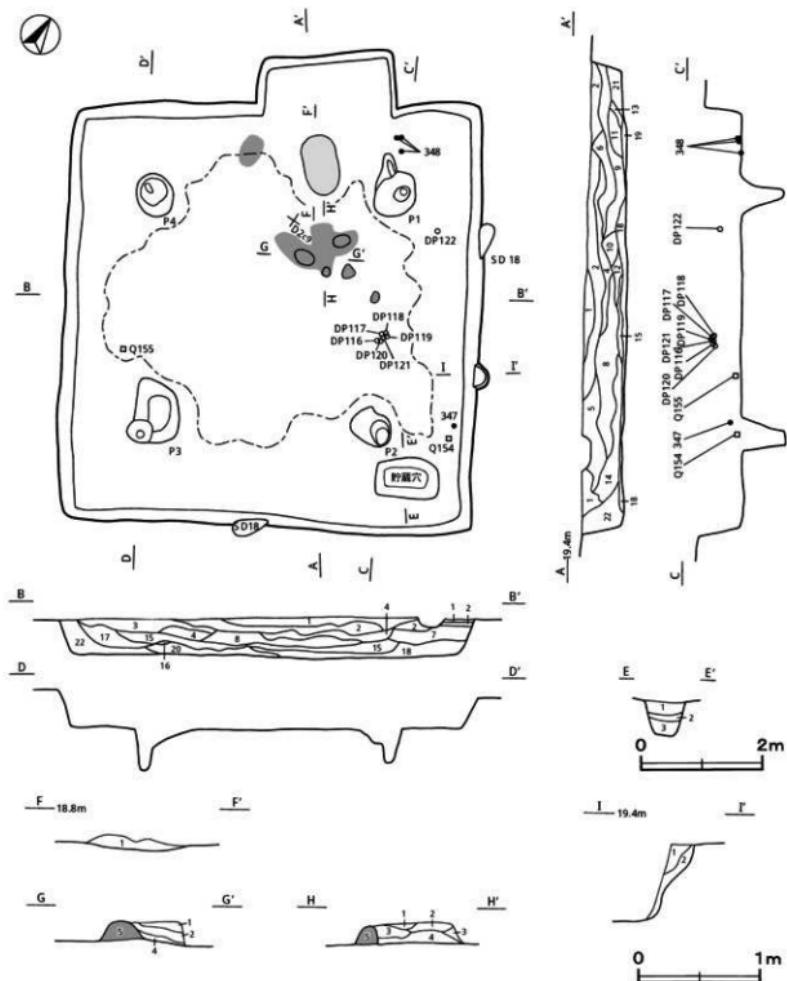
覆土 22層に分層できる。ブロック状の堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

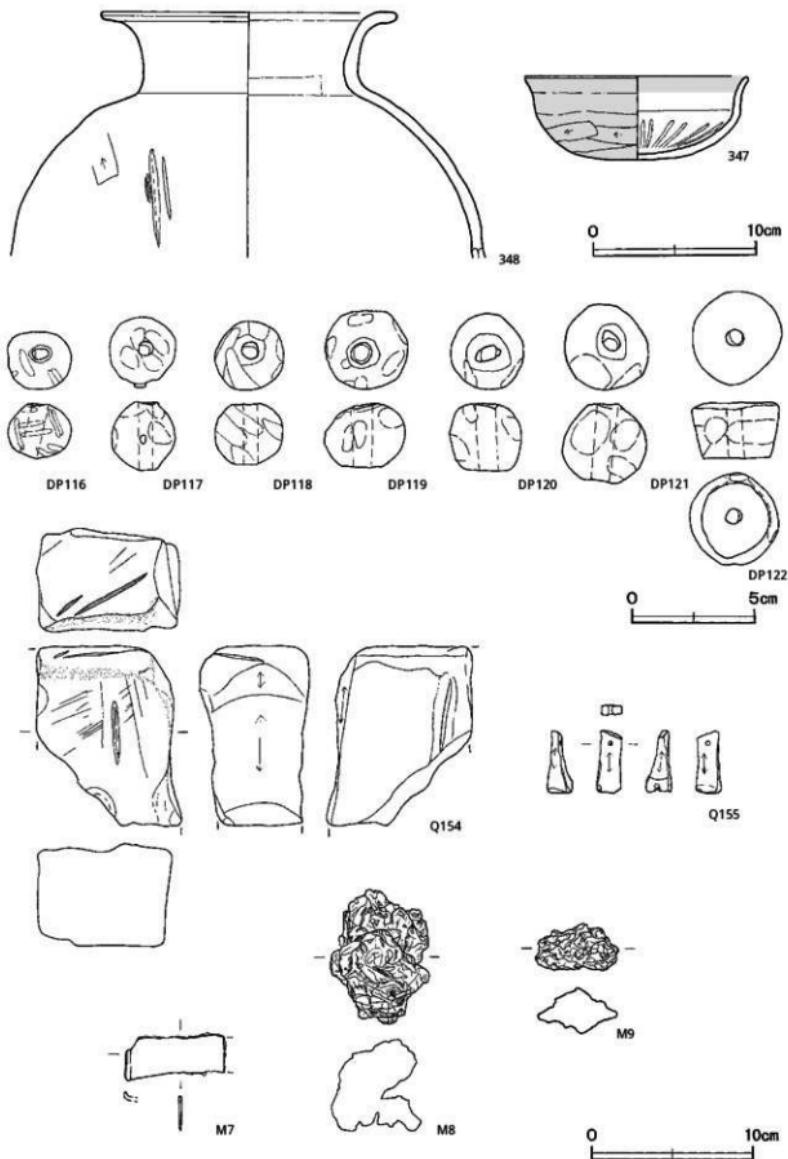
1	暗褐色	ロームブロック中量	燒土粒子・炭化粒子微量	11	暗褐色	ローム粒子中量	燒土粒子・炭化粒子微量
2	暗褐色	ロームブロック少量	燒土粒子・炭化粒子微量	12	暗褐色	ローム粒子中量	燒土粒子微量
3	暗褐色	ロームブロック・燒土粒子・炭化粒子・砂粒微量		13	暗褐色	ロームブロック少量	燒土粒子・炭化粒子微量
4	暗褐色	ローム粒子少量	燒土粒子・炭化粒子・砂粒微量	14	黒褐色	ロームブロック・燒土ブロック・炭化粒子微量	
				15	黒褐色	ロームブロック・燒土粒子微量	
5	暗褐色	ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子・砂粒微量		16	暗褐色	砂粒中量	ローム粒子少量
6	暗褐色	ロームブロック・燒土粒子少量	炭化粒子微量	17	暗褐色	ローム粒子多量	燒土粒子・炭化粒子少量
7	黒褐色	ロームブロック・燒土粒子・炭化粒子微量		18	黒褐色	ローム粒子少量	燒土粒子・炭化粒子微量
8	暗褐色	ロームブロック少量	燒土ブロック・炭化粒子微量	19	暗褐色	ロームブロック微量	炭化粒子微量
9	暗褐色	ロームブロック少量	炭化粒子微量	20	暗褐色	ローム粒子中量	炭化物・燒土粒子微量
10	黒褐色	燒土粒子・炭化粒子・砂粒少量	ロームブロック微量	21	暗褐色	ロームブロック中量	炭化物・燒土粒子微量
			砂粒微量	22	暗褐色	ロームブロック・炭化物微量	

遺物出土状況 土器片2067点（壺241・高杯24・鉢2・壺7・甕1747・櫃46）、須恵器片29点（壺6・蓋5・高杯2・壺3・甕13）、土製品85点（土玉72・管状土錐5・支脚8）、石器2点（砥石）、石製品4点（勅錘車1・双孔円板2・劍形模造品1）、鐵製品1点（鎌）、鐵滓10点（46.3g）、滑石片17点、褐鐵鉄10点が出土している。また、混入した埴輪土器片9点（深鉢）、土器片1点（壺）も出土している。遺物の大半は、全城の覆土中層から下層にかけて出土している。Q154は北東壁際、348は北部のそれぞれ床面、Q155は南西部、347は北西壁際の覆土下層、DP122は北東部、DP116~DP121は南東部のそれぞれ覆土中層、M7~M9は炉の周辺の覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀前葉と考えられる。形状や、炉の周辺から鐵滓が出土しているほか、砥石も出土していることから、鍛冶工房跡と考えられる。北西部の張り出し部は、近接して炉と炭化粒子や粘土塊が確認できることから、炉を使用するための作業場の可能性がある。竈の煙道部が遺存していることから、住居から工房へと建て替えられている。



第277図 第1号竪穴建物跡実測図



第278図 第1号竪穴建物跡出土遺物実測図

第1号竪穴建物跡出土遺物観察表(第278図)

番号	種別	基盤	口径	基高	底径	胎土	色調	構成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
347	土器	环	13.6	5.2	-	長石・雲母・ 酸化鉄粒子	褐	普通	外面へラ削り 内面磨き	覆土下部	80%
348	土器	環	18.2	(15.0)	-	長石・石英・雲母	褐	普通	外面へラ削り 磨ぎ痕 内面へラナデ	床面	30%

番号	種別	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴		出土位置	備考
DP116	土器	2.6	2.4	0.7	13.9	長石	磨き 一方向からの穿孔		覆土中層	PL78
DP117	土器	2.6	2.9	0.7	18.2	長石	指揮圧痕 一方向からの穿孔		覆土中層	PL78
DP118	土器	2.8	2.6	0.6	20.1	長石	磨き 一方向からの穿孔		覆土中層	PL78
DP119	土器	3.4	2.7	0.8	25.0	長石・酸化鉄粒子	指揮圧痕 一方向からの穿孔		覆土中層	PL78
DP120	土器	3.0	2.8	0.8	26.1	長石・石英	指揮圧痕 一方向からの穿孔		覆土中層	PL78
DP121	土器	3.5	3.3	0.7	35.5	長石	指揮圧痕 一方向からの穿孔		覆土中層	PL78
DP122	指揮輪	3.7	2.4	0.7	34.8	長石	指揮圧痕 一方向からの穿孔		覆土中層	PL79

番号	種別	長さ	幅	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q154	磁石	(11.2)	(8.9)	6.3	-	(819.3)	砂岩	節状石 細面4面	床面	PL80
Q155	磁石	3.8	1.5	1.6	0.3	10.8	凝灰岩	内面紙石 細面4面	覆土下部	PL81

番号	種別	長さ	幅	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 7	鍼	(6.2)	2.4	0.2	(10.9)	-	鉄	先端部欠損のため形状不明 片側縫折返し	覆土中	
M 8	鉄滓	8.2	6.1	5.6	95.3	-	鉄	着磁性なし	覆土中	PL82
M 9	鉄滓	2.9	5.2	2.8	21.9	-	鉄	着磁性なし	覆土中	PL82

第2号竪穴建物跡(第279~282図)

位置 調査区西部のC 2 c8区、標高18.7mの台地上に位置している。

重複関係 南東部を第20号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸8.35m、短軸6.60mの長方形で、主軸方向はN-45°-Wである。壁高は27~37cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。壁溝が東コーナー部を除いて確認できた。北西部で焼土塊と炭化材が確認できた。

炉 中央部のやや北寄りに付設された地床炉である。長径120cm、短径112cmの不整円形で、床面から16cm掘り込まれている。

炉土層解説

- 1 赤褐色 焼土ブロック多量
- 2 黒 色 ロームブロック少量

3 赤褐色 焼土ブロック多量、炭化粒子微量

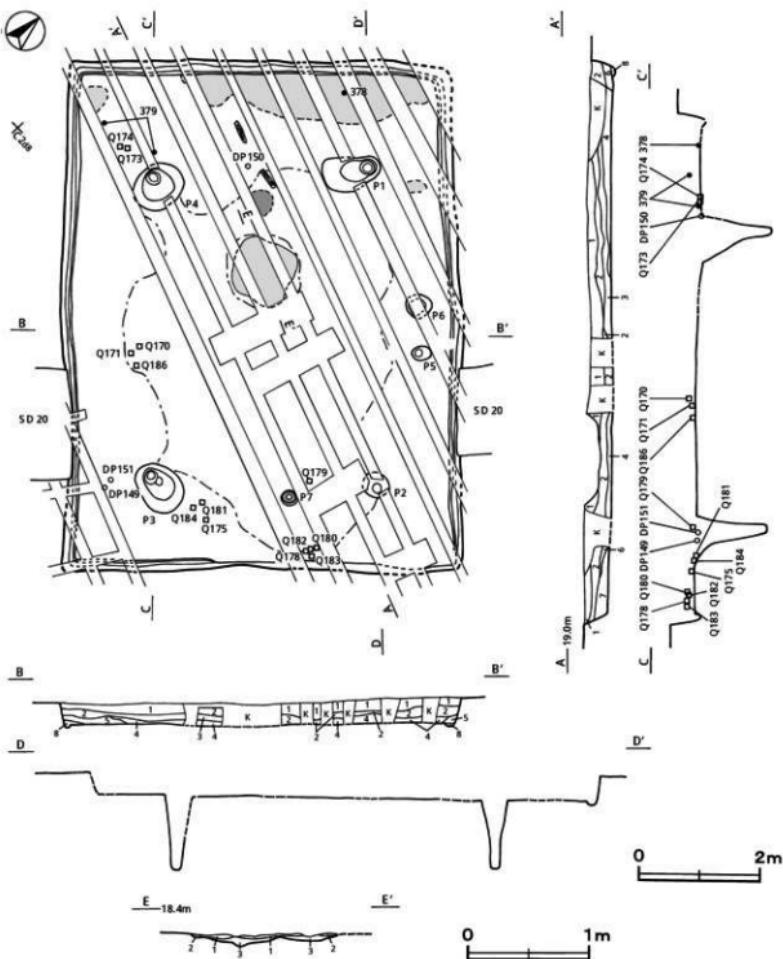
ピット 7か所。P 1~P 4は深さ114~123cmで、規模と位置から主柱穴である。P 5~P 6は深さ12cm・20cmで、北東壁際の中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 7は南東壁際的位置し、深さ12cmで、壁に粘土ブロックが貼られていることから、ロクロピットの可能性がある。

覆土 8層に分層できる。ロームブロックを含む堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

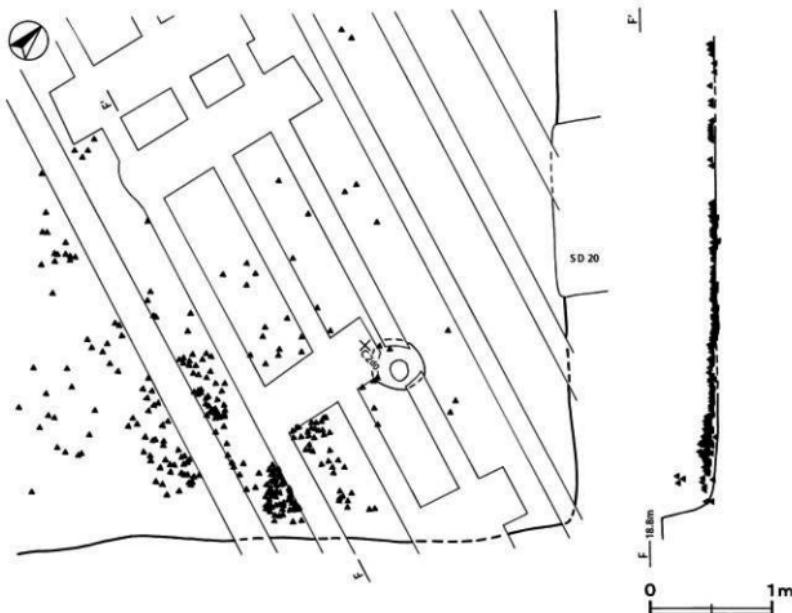
- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|-----------------------|
| 1 赤褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 赤褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 |
| 2 赤褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量 |
| 3 赤褐色 | ロームブロック・炭化物・焼土粒子少量 | 7 赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 4 赤褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 8 赤褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 土器片1243点(环151・腕5・高杯13・壺26・甕1019・瓶29)、須恵器片22点(环6・蓋4・



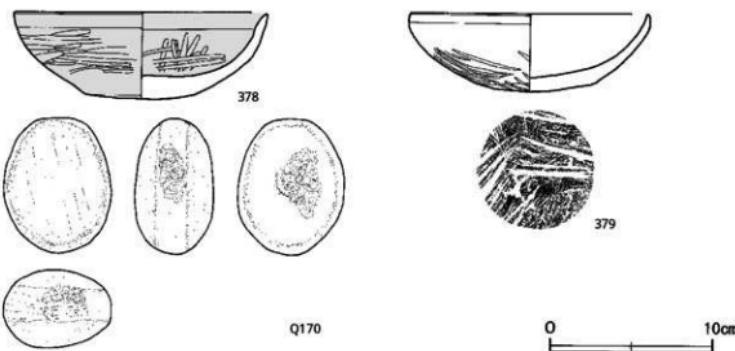
第279図 第2号竪穴建物跡実測図

高坏1・庭5・甕6), 土製品33点(土玉21・管状土錐1・支柱11), 石器1点(敲石), 石製品16点(白玉), 鉄滓1点(13.2 g), 滑石片1373点(336.3 g)が出土している。また、混入した繩文土器片5点(深鉢), 弥生土器片8点(壺), 土師器片1点(器台), 土師質土器片1点(内耳鍋)も出土している。遺物の大半は、全域の覆土中から出土している。378・DP150は北西部, Q173・Q174は西部, DP149・DP151・Q175・Q181・Q184は南部, Q179は南東部, Q171・Q186は南西部のそれぞれ床面, 379は西部の覆土下層から床面にかけて, Q178・Q180・Q182・Q183は南東部のそれぞれ覆土下層から出土している。滑石片は、中央部から東コーナー部付近の覆土下層から床面にかけて出土している。

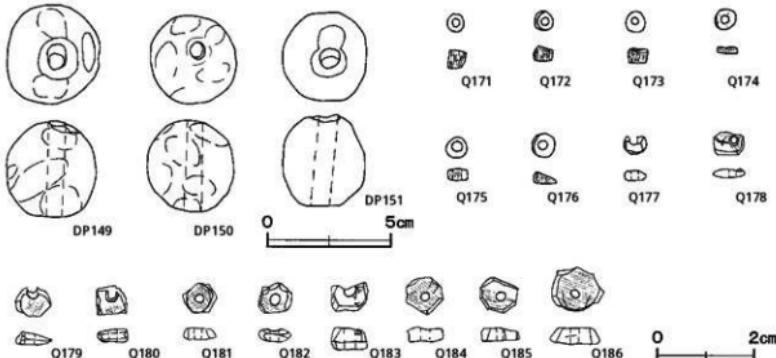


第280図 第2号竪穴建物跡滑石片出土状況図

所見 時期は、出土土器から5世紀末葉と考えられる。滑石片の出土状況から、中央部から東コーナー一部に向かって荒削・形割作業が行われていたと推測される。また、大量の剥片に混じて臼玉の未成品や完成品などが出土していることから、主に臼玉の製作を行っていたと考えられる。北西壁際で焼土塊と炭化材が確認できたことから、焼失した可能性がある。



第281図 第2号竪穴建物跡出土遺物実測図(1)



第282図 第2号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

第2号竪穴建物跡出土遺物観察表(第281・282図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
378	土器	桶	15.7	5.3	6.6	長石・雲母	橙	黄透	内・外表面磨き	床面	90% PL76
379	土器	桶	14.7	4.9	7.4	長石・中継	にぶい赤褐	良好	外表面磨き 紙袋	床面 覆土下層	60% PL76

番号	種別	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP149	土玉	3.7	3.9	0.7	53.4	長石	指鍛压痕 一方向からの穿孔	床面	
DP150	土玉	3.5	3.9	0.7	53.4	長石・石英・雲母	指鍛压痕 一方向からの穿孔	床面	
DP151	土玉	3.4	3.7	0.8	43.0	長石・石英・雲母	一方向から穿孔	床面	

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q170	敲石	8.3	6.7	4.8	421.4	安山岩	敲打痕 3か所	覆土下層	

番号	種別	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q171	臼玉	0.4	0.4	0.2	0.1	滑石	全面研磨 一方向からの穿孔	床面	
Q172	臼玉	0.4	0.4	0.2	0.1	滑石	全面研磨 一方向からの穿孔	覆土中	
Q173	臼玉	0.4	0.3	0.2	0.1	滑石	全面研磨 一方向からの穿孔	床面	
Q174	臼玉	0.4	0.2	0.2	0.1	滑石	全面研磨 一方向からの穿孔	床面	
Q175	臼玉	0.4	0.2	0.2	0.1	滑石	全面研磨 一方向からの穿孔	床面	
Q176	臼玉	0.5	0.3	0.2	0.1	滑石	全面研磨 一方向からの穿孔	覆土中	
Q177	臼玉	0.5	0.2	0.2	0.1	滑石	未成品 全面研磨 一方向からの穿孔	覆土中	
Q178	臼玉	0.6	0.2	0.2	0.1	滑石	未成品 全面研磨 一方向からの穿孔	覆土下層	
Q179	臼玉	0.7	0.2	0.2	0.1	滑石	未成品 全面研磨 一方向からの穿孔	床面	
Q180	臼玉	0.6	0.3	0.2	0.1	滑石	未成品 全面研磨 一方向からの穿孔	覆土下層	
Q181	臼玉	0.7	0.2	0.2	0.1	滑石	未成品 全面研磨 一方向からの穿孔	床面	
Q182	臼玉	0.7	0.2	0.2	0.1	滑石	未成品 全面研磨 一方向からの穿孔	覆土下層	
Q183	臼玉	0.8	0.5	0.2	0.2	滑石	未成品 全面研磨 一方向からの穿孔	覆土下層	
Q184	臼玉	0.7	0.3	0.2	0.2	滑石	未成品 全面研磨 一方向からの穿孔	床面	
Q185	臼玉	0.8	0.3	0.2	0.2	滑石	未成品 全面研磨 一方向からの穿孔	覆土中	
Q186	臼玉	1.0	0.3	0.2	0.4	滑石	未成品 全面研磨 一方向からの穿孔	床面	

第3号竪穴建物跡（第283・284図）

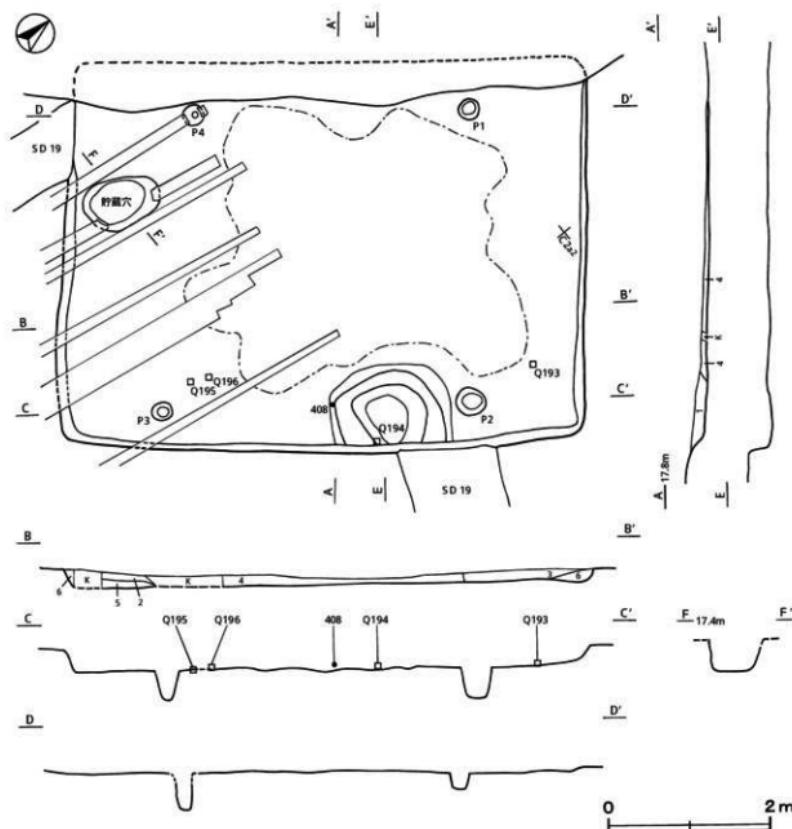
位置 調査区西部のC 2 a1, 標高17.6mの緩斜面部に位置している。

重複関係 南東部を第19号溝に掘り込まれている。

規模と形状 北東・南西軸は6.46mで、緩斜面部に位置しているため、北西・南東軸は4.28mしか確認できなかった。形状は、ピットの位置から長方形と推測される。長軸方向はN-38°-Eである。壁高は27cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。南東壁際に馬蹄形の高まりがあり、出入り口施設に伴うものと考えられる。

ピット 4か所。P 1～P 4は深さ20～45cmで、規模と位置から主柱穴である。



第283図 第3号竪穴建物跡実測図

貯蔵穴 南西壁際の西寄りに位置している。長径97cm、短径66cmの梢円形で、深さは42cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

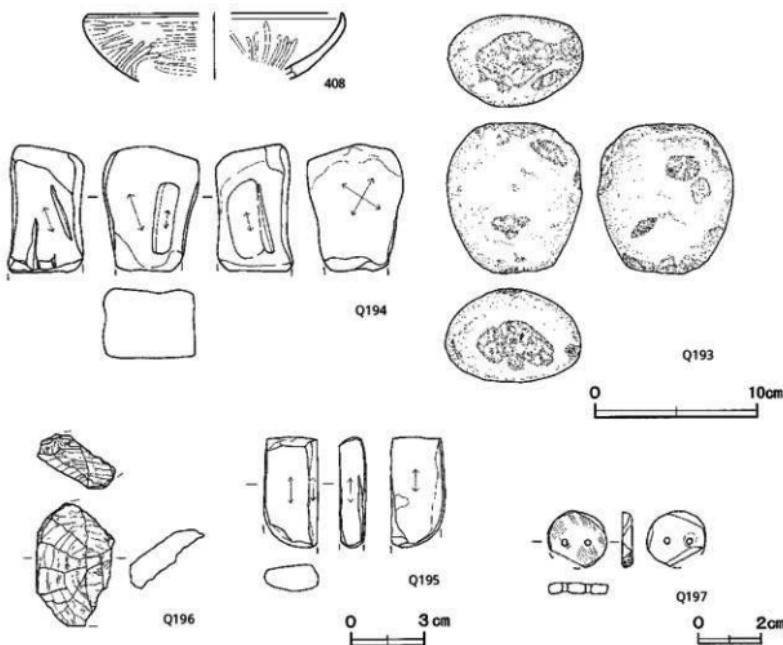
覆土 6層に分層できる。ブロック状の堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子少量	4 白褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、粘土ブロック・炭化粒子微量
2 白褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	5 白褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
3 白褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量	6 白褐色	ロームブロック少量

遺物出土状況 土器片184点(杯45・甕139)、須恵器片1点(甕)、土製品5点(土玉)、石器3点(敲石1・砥石2)、石製品2点(紡錘車・双孔円板)が出土している。また、混入した繩文土器片1点(鉢)、鉄製品1点(不明)も出土している。遺物の大半は、北西部の覆土中層から下層にかけて出土している。408は南東部、Q193は東部、Q194～Q196は南東部のそれぞれ床面、Q197は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀末葉と考えられる。遺構の形状や、紡錘車の未完成品、敲石、砥石が出土していることから、石製品の製作工房跡と考えられる。



第284図 第3号竪穴建物跡出土遺物実測図

第3号竪穴建物跡出土遺物観察表(第284図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
408	土器片	杯	[158]	(40)	-	長石・雲母	白	普通	内・外表面磨き	床面	10%

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考	
Q193	敲石	9.3	8.3	5.7	626.5	安山岩	敲打痕4面	床面		
Q194	砥石	(7.8)	5.9	4.8	(3142)	砂岩	磨耗石 砥面4面 下半欠損	床面		
Q195	砥石	(6.9)	3.3	1.6	(69.1)	粘板岩	平砥石 砥面3面	床面		
番号	種別	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考	
Q196	鍛錬窯	(5.1)	2.2	-	(23.0)	滑石	未完成品 欠損 形崩陥隙	床面	PL81	
番号	種別	長さ	幅	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q197	双孔円板	1.7	1.9	0.3	0.2	(2.0)	滑石	全面研磨 一方向からの穿孔	覆土中	PL85

第4号竪穴建物跡（第285図）

位置 調査区東部のE 5 14区、標高18.9mの台地上に位置している。

重複関係 東コーナー部を第10号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.04m、短軸2.71mの方形で、長軸方向はN-33°-Wである。壁高は16cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、踏み固められていない。

覆土 2層に分層できる。ロームブロックを含む堆積状況から埋め戻されている。

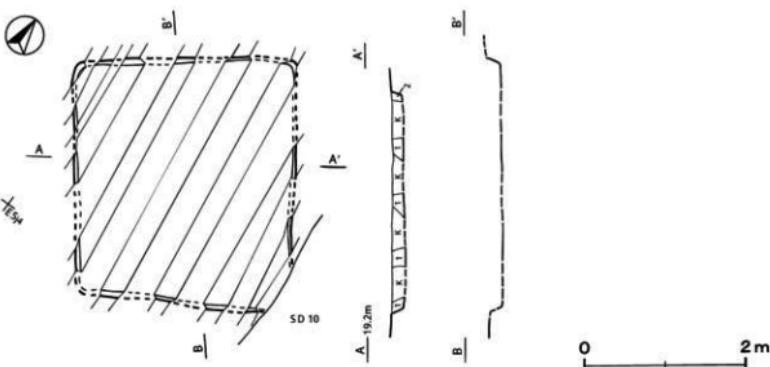
土層解説

1 細褐色 ロームブロック少量

2 細褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片108点（杯14・甕93・瓶1）、須恵器片3点（杯2・甕1）、土製品1点（支脚）、鉄滓2点（0.1g）が出土している。また、混入した弥生土器片1点（壺）も出土している。出土土器は細片のため図示できない。

所見 時期は、出土土器から6世紀代と考えられる。炉、竈、柱穴が確認できず、床面が踏み固められていないことから、住居の付属施設と考えられる。



第285図 第4号竪穴建物跡実測図

第5号竪穴建物跡（第286・287図）

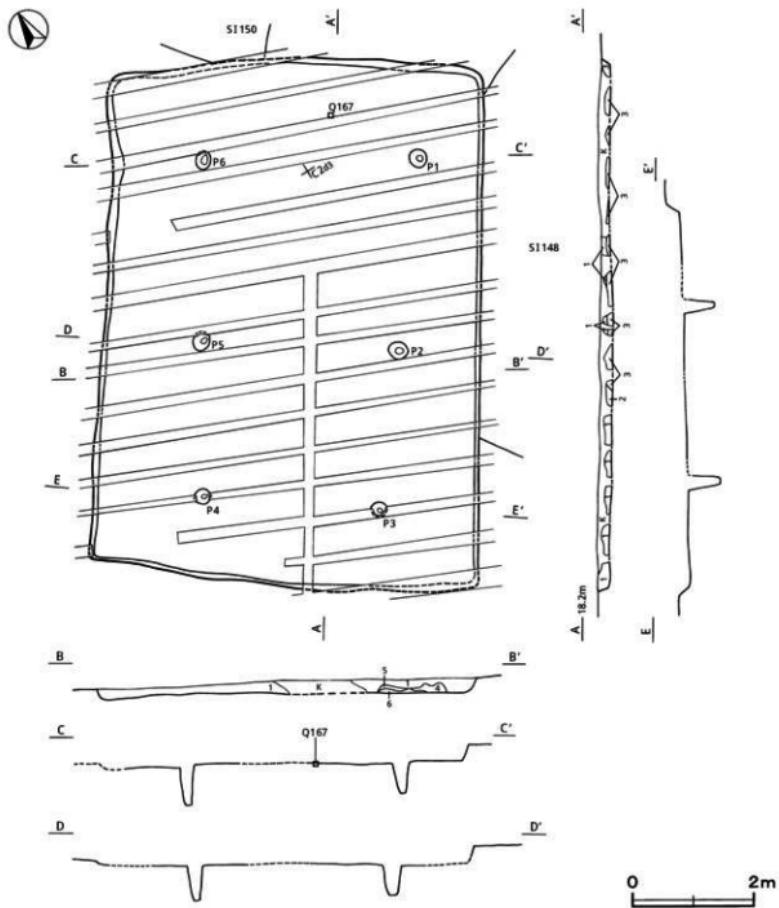
位置 調査区西部のC 2 d2区、標高18.0mの台地上に位置している。

重複関係 第148・150号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸8.73m、短軸6.13mの長方形で、主軸方向はN-37°-Eである。壁高は15~25cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦な貼床で、踏み固められていない。

ピット 6か所。P1~P6は深さ47~65cmで、規模と位置から主柱穴である。



第286図 第5号竪穴建物跡実測図

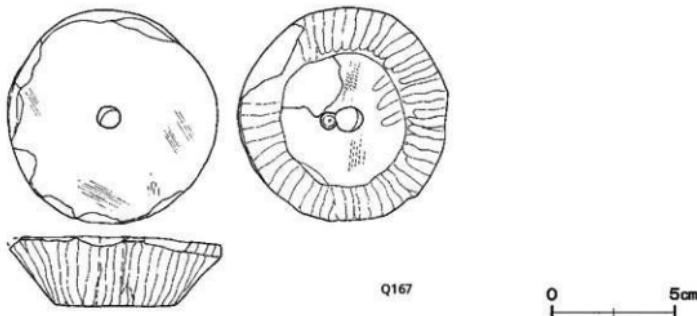
覆土 6層に分層できる。ブロック状の堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

1	褐	褐色	ロームブロック中量	4	褐	褐色	ロームブロック少量
2	褐	褐色	ローム粒子・炭化粒子少量	5	褐	褐色	炭化粒子少量、ロームブロック微量
3	褐	褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	6	褐	褐色	ローム粒子少量

遺物出土状況 土器片283点（壺35・高杯5・甕241・瓶1・ミニチュア1）、須恵器片6点（壺）、土製品2点（土玉）、石製品1点（紡錘車）、鐵滓1点（0.4g）が出土している。また、混入した繩文土器片3点（深鉢）、鐵製品1点（不明）も出土している。遺物の大半は、全域の覆土中から出土している。出土土器は細片のため図示できない。Q167は北東壁際の床面から出土している。

所見 時期は、出土遺物や重複関係から6世紀後葉と考えられる。形状が長方形で、主柱穴が6か所であること、炉・竈を有していないこと、床面が踏み固められていないこと、大形の紡錘車が出土していることから、工房跡あるいは作業場跡の可能性が考えられる。



第287図 第5号竪穴建物跡出土遺物実測図

第5号竪穴建物跡出土遺物観察表（第287図）

番号	種別	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q167	紡錘車	8.8	2.8	1.0	(296.5)	滑石	全面研磨 二方向からの穿孔 下面中心部の脇に穿孔痕	床面	PL82

第6号竪穴建物跡（第288・289図）

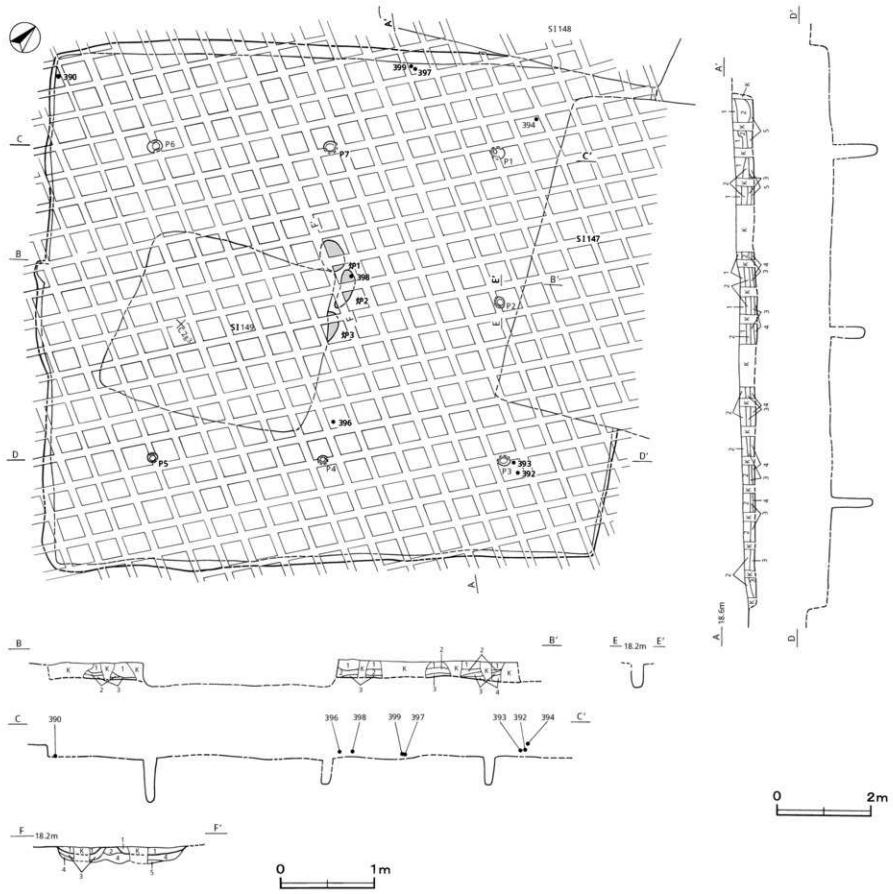
位置 調査区西部のC244区、標高18.5mの台地上に位置している。

重複関係 南部を第149号住居、北東部を第147号住居、北部を第148号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸12.00m、短軸10.63mの長方形で、主軸方向はN-45°-Wである。壁高は26~42cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦な貼床で、踏み固められていない。

炉 3か所。中央部のやや南西寄りに付設された地床炉である。炉1は、長径68cmで、短径は搅乱のため30cmしか確認できなかった。形状は不整円形で、床面から17cm掘り込まれている。炉2は、長径84cm、短径28cmの不整梢円形で、床面から14cm掘り込まれている。炉3は、重複と搅乱のため、長径は66cmで、短径は22cmしか確認できなかった。形状は梢円形と推測される。



第288図 第6号竪穴建物実測図

伊1・2 土層解説

- | | |
|--------------------------------|-----------------------------|
| 1 赤褐色 地上土ブロック中量、炭化粒子少量、ローム粒子微量 | 4 黄褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 赤褐色 地上土粒子少量、ロームブロック・炭化粒子微量 | 5 黄赤褐色 烧土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量 |
| 3 黄褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量 | |

ピット 7か所。P1~P7は深さ61~96cmで、規模と位置から主柱穴である。

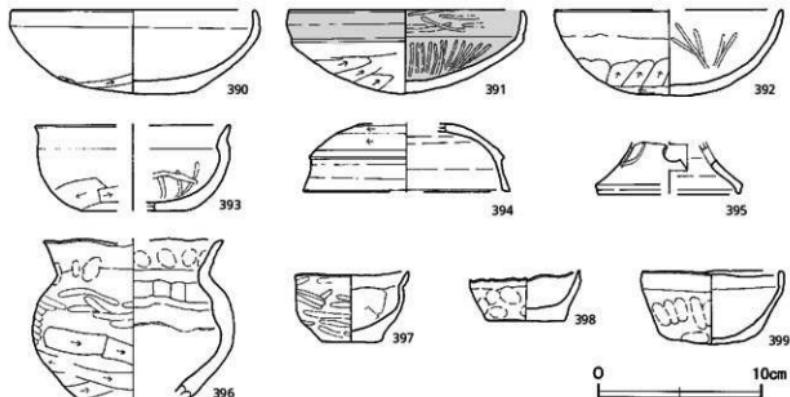
覆土 5層に分層できる。ブロック状の堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|-----------------------------|-----------------------------|
| 1 黒褐色 炭化粒子少量、ロームブロック・焼土粒子微量 | 4 黄褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黄褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量 | 5 黑褐色 炭化粒子少量、ロームブロック微量 |
| 3 黄褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量 | |

遺物出土状況 土師器片1069点(坏197・碗5・高杯6・壺8・甕845・瓶2・ミニチュア6), 須恵器片21点(坏6・蓋10・高杯1・甕4), 土製品18点(土玉17・管状土錐1), 石製品1点(臼玉), 滑石片6点が出土している。また、混入した繩文土器片12点(深鉢), 土製品1点(土器片円板)も出土している。遺物の大半は、全城の覆土中から出土している。390は西コーナー部の床面, 391・395は覆土中, 394は北部の覆土上層, 392・393は東部, 396は南東部, 398は中央部, 397・399は北西部のそれぞれ覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器や重複関係から5世紀末葉と考えられる。遺構の形状から工房跡の可能性がある。



第289図 第6号竪穴建物跡出土遺物実測図

第6号竪穴建物跡出土遺物観察表(第289図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
390	土師器	坏	149	52	-	長石・雲母	明赤褐	普通	底部外側ヘラ削り	床面	70% PL75
391	土師器	坏	144	52	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	外側ヘラ削り・内面磨き	覆土中	60% PL75
392	土師器	壺	[140]	53	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	底部外側ヘラ削り・内面磨き	覆土下層	40%
393	土師器	壺	[118]	53	[62]	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	外側底部ヘラ削り・内面磨き	覆土下層	40% PL75
394	須恵器	蓋	-	(43)	[12.8]	長石・石英	灰赤褐	良好	天井部凹輪ヘラ削り	覆土上層	PL75
395	須恵器	高環	-	(32)	[8.8]	長石	灰	普通	4方向の透かし丸 三日月状の線刻	覆土中	10% PL75
396	土師器	小形壺	[11.0]	(99)	-	長石・雲母	にぶい橙	良好	外側ヘラ削り後・磨き 指捺圧痕	覆土下層	60%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
397	土師器	ミニチュア	6.9	43	3.3	長石	胡赤褐色	普通	外表面磨き 内面ヘラナダ	覆土下層	95% PL76
398	土師器	ミニチュア	6.7	32	4.8	長石・雲母	にぶい黄褐色	普通	指揮圧痕	覆土下層	95% PL76
399	土師器	ミニチュア	8.6	45	-	長石	橙	普通	指揮圧痕	覆土下層	80% PL76

表4 古墳時代堅穴建物跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平 面 形	規模 (m) 長径×短径	深度 (cm)	床面	壁構 古 新 六 八 口 ビ ト 火 炉	内部施設		覆土	主な出土遺物	時 期	重複関係 (古→新)
								北東 北 東 壁 上 下 部 火 炉	火 炉 上 部 火 炉				
1	D 2 c9	N-32°-W	方形	6.96×6.84	48-71	平坦	-	4	-	1	土師器、須恵器、土玉、範石、結緋繩、双刃円板、鏡、銅鏡等	6世紀前葉	本跡-SD18
2	C 2 c8	N-45°-W	長方形	8.35×6.60	27-37	平坦一部	4	2	1	1	土師器、須恵器、土玉、範石、鏡等	5世紀末葉	本跡-SD20
3	C 2 a1	N-36°-E	長方形	6.46×(4.28)	27	平坦	-	4	-	1	土師器、須恵器、土玉、範石、結緋繩、双刃円板	6世紀末葉	本跡-SD19
4	E 5 14	N-35°-W	方形	3.04×2.71	16	平坦	-	-	-	1	土師器、須恵器、土玉、範石、鏡等	6世紀代	本跡-SD10
5	C 2 d2	N-37°-E	長方形	8.73×6.13	15-25	平坦	-	6	-	-	土師器、須恵器、土玉、範石、結緋繩、鏡等	6世紀後葉	S1148-150-本跡
6	C 2 f4	N-45°-W	長方形	12.00×10.63	26-42	平坦	-	7	-	1	土師器、須恵器、土玉、鏡等	5世紀末葉	本跡-S1147-148-149

(3) 土坑

第37号土坑（第290図）

位置 調査区中央部のD 4 a2区、標高19.3mの台地上に位置している。

重複関係 第111号住居跡の覆土を掘り込んでいる。

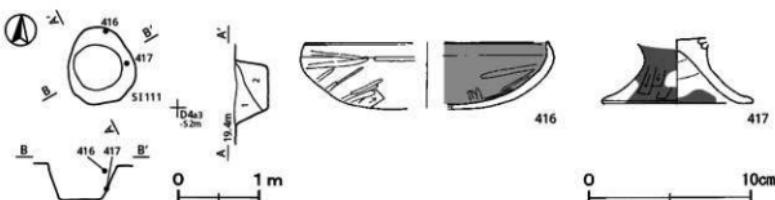
規模と形状 長径0.96m、短径0.84mの楕円形で、長径方向はN-5°-Wである。深さは42cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層できる。第1層は層厚4~32cm、第2層は層厚4~42cmで、いずれも泥貝土層である。貝を廃棄した後、埋め戻されている。

土層解説

1 黒 褐 色 貝中量、ローム粒子少量

2 黒 褐 色 ローム粒子、貝少量



第290図 第37号土坑・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片11点（杯3・高杯1・甕7）、須恵器片1点（甕）、貝242個体（ヤマトシジミ238・アカニシ2・オキアサリ1・アリソガイカ1）が出土している。417は覆土下層から出土している。416は覆土上層から出土しており混入した可能性がある。

所見 時期は、出土土器から6世紀前葉と考えられる。貝が出土していることから、廃棄土坑と考えられる。

第37号土坑出土遺物観察表（第290図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
416	土師器	杯	[15.0]	(41)	-	長石	明赤褐色	良好	外面ヘラ削り後、磨き 内面磨き	覆土上層	20%
417	土師器	高杯	-	(41)	9.5	長石・石英・ 炭化鉄粒子	橙	良好	外面ヘラ削り 内面ヘラナダ	覆土中層	45%

第38号土坑（第291図）

位置 調査区東部のD4戸0区、標高18.8mの台地上に位置している。

重複関係 第35号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.60m、短径1.20mの梢円形で、長径方向はN-37°-Eである。深さは108cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 3層に分層できる。ロームブロックを含む堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

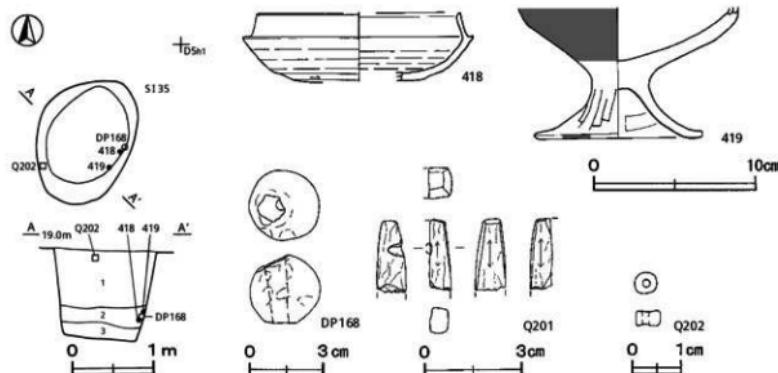
1 細 褐 色 ロームブロック少量

2 細 褐 色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

3 黒 褐 色 ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片142点（杯8・碗3・高杯4・鉢1・甕126）、須恵器片4点（甕2・甕2）、土製品1点（土玉）、石器1点（砥石）、石製品1点（臼臼）が出土している。419は標際の覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器や重複関係から6世紀前葉と考えられる。規模や遺物出土状況から、廃棄土坑の可能性がある。



第291図 第38号土坑・出土遺物実測図

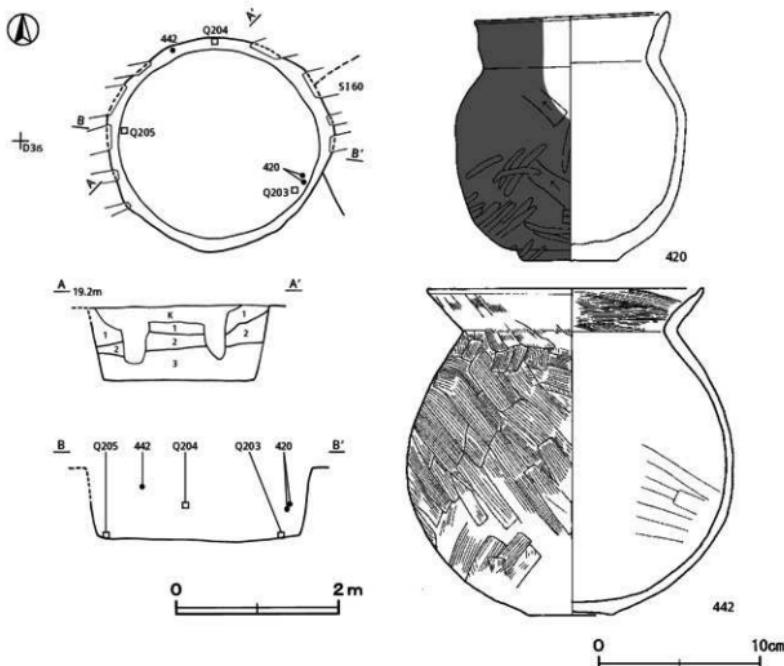
第38号土坑出土遺物観察表 (第291図)

番号	種別	基盤	口径	基高	底径	胎土	色調	構成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
418	須恵器	环	[12.6]	(4.2)	-	長石・中礫	灰	良好	体部約1/3に回転ヘラ削り 肩部内傾	覆土下層	25%
419	土師器	高環	-	(8.0)	9.6	長石・石英	橙	良好	輪削外側ヘラ削り 内面ヘラナダ 环部内面剥離のため 脱型不規	覆土下層	45%
DP108	土玉	30	28	1.1	18.8	長石			指錐圧痕 一方向からの穿孔	覆土下層	
Q201	磁石	(22)	(6.7)	0.8	0.4	(2.6)	磁灰岩		底面3面 空孔未貫通 左半分・下半欠損	覆土中	
Q202	白玉	05	0.4	0.2	0.2	滑石			全面研磨 一方向からの穿孔	覆土上層	

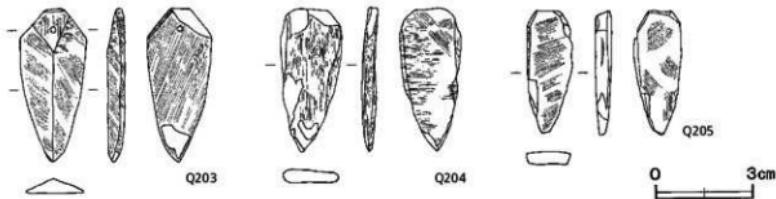
第43号土坑 (第292・293図)

位置 調査区中央部のD 3 15区、標高19.0mの台地上に位置している。

重複関係 第60号住居跡を掘り込んでいる。



第292図 第43号土坑・出土遺物実測図



第293図 第43号土坑出土遺物実測図

規模と形状 長径2.73m、短径2.58mの円形である。深さは90cmで、底面は平坦である。壁はほぼ直立して立ち上がっている。

覆土 3層に分層できる。ロームブロックを含む堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|-----------------------------|-----------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 3 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、燒土粒子微量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量 | |

遺物出土状況 土師器片34点(杯11・壺1・甕22)、石製品4点(単孔円板1・剣形模造品3)、滑石片2点が出土している。Q203・Q205は底面、420・442・Q204は覆土中層から出土している。

所見 時期は、出土遺物や重複関係から6世紀末葉と考えられる。遺物出土状況から、廃棄土坑の可能性もある。

第43号土坑出土遺物観察表(第292・293図)

番号	種別	基種	口径	基高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
420	土師器	小形瓶	12.0	15.3	5.7	長石・石英	褐灰	普通	外側へラ削り後、磨き	覆土中層	B59 PL76
442	土師器	瓶	17.0	20.8	5.2	長石・石英	橙	普通	口縁部外側ハケ目調整後、ナデ 内面ハケ目調整 体部 外側ハケ目調整 内面へラ削り	覆土中層	4D PL76

番号	種別	長さ	幅	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q203	剣形模造品	47	2.0	0.5	0.2	(5.7)	滑石	全面研磨 一方向からの穿孔	底面	PL84
Q204	剣形模造品	44	1.9	0.4	-	6.0	滑石	未成品 全面研磨 未穿孔	覆土中層	PL84
Q205	剣形模造品	39	1.4	0.5	-	4.2	滑石	未成品 全面研磨 未穿孔	底面	PL84

第53号土坑(第294図)

位置 調査区中央部のD 3 e8区、標高19.1mの台地上に位置している。

重複関係 第117号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸は3.10mで、短軸は搅乱のため1.74mしか確認できなかった。形状は長方形である。長軸方向はN-26°-Wである。深さは14cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

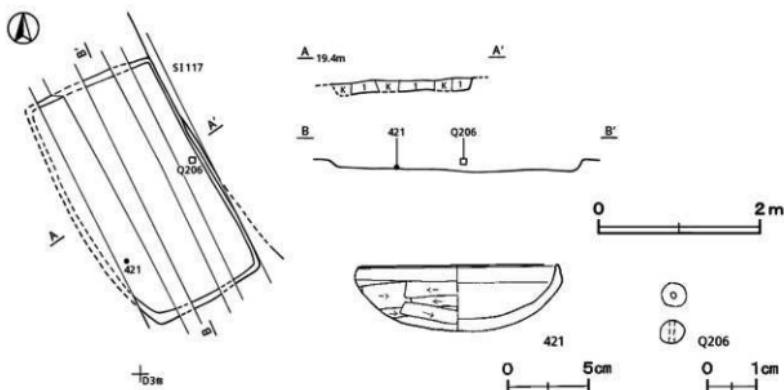
覆土 単一層である。ロームブロックを含む堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、燒土粒子微量

遺物出土状況 土師器片36点（甕1・甌35）、石製品1点（小玉）が出土している。421は南側の底面、Q206は覆土上層から出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀末葉と考えられる。形状や出土遺物から、墓坑の可能性がある。



第294図 第53号土坑・出土遺物実測図

第53号土坑出土遺物観察表（第294図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
421	土師器	甕	12.2	40	-	長石・石英	褐	素面	外側へラ削り	底面	100% PL76

番号	種別	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q206	小玉	0.5	0.5	0.1	0.2	水晶カ	全面研磨 二方向からの穿孔	覆土上層	

第55号土坑（第295図）

位置 調査区中央部のE 4 a1区、標高18.9mの台地上に位置している。

重複関係 第95号住居に掘り込まれている。

規模と形状 重複のため、長径2.19m、短径1.60mしか確認できなかった。形状は梢円形と推測される。長径方向はN-42°-Eと推測される。深さは30cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層できる。ロームブロックを含む堆積状況から、埋め戻されている。

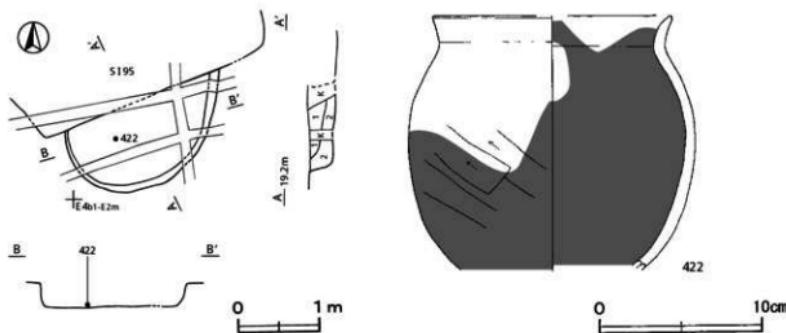
土層解説

1 黒 褐 色 ローム粒子中量、燒土粒子少量

2 白 褐 色 ロームブロック中量、燒土粒子少量

遺物出土状況 土師器片118点（甕11・甌107）が出土している。422は南部の底面から出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀前半と考えられる。遺物出土状況から、廃棄土坑の可能性がある。



第295図 第55号土坑・出土遺物実測図

第55号土坑出土遺物観察表（第295図）

番号	種別	器種	口径	盤高	底径	施土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
422	土師器	小形罐	[140]	(15)	-	瓦石・石英・ 陶化鉄粉子	にぶい緑	普通	外面へラ削り	底面	40%

第64号土坑（第296図）

位置 調査区中央部のC 3 f6区、標高19.1mの台地上に位置している。

重複関係 北部を第121号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸は2.08mで、短軸は重複のため1.12mしか確認できなかった。形状は隅丸長方形と推測される。長軸方向はN-54°-Eである。深さは40cmで、底面は皿状である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 4層に分層できる。ロームブロックを含む堆積状況から、埋め戻されている。

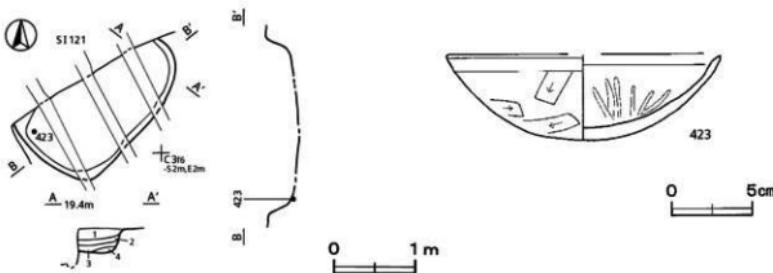
土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子微量

3 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量

2 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

4 黒褐色 ロームブロック少量



第296図 第64号土坑・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片64点（杯8・碗1・壺6・甕49）が出土している。また、混入した縄文土器片2点（深鉢）も出土している。423は壁際の底面から正位で出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀末葉と考えられる。形状や遺物出土状況から、墓坑の可能性もある。

第64号土坑出土遺物観察表（第296図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
423	土師器	杯	[158]	5.2	-	長石・石英	橙	普通	外面ヘラ削り 内面磨き	底面	85%

第67号土坑（第297図）

位置 調査区中央部のD-3 g8区、標高19.1mの台地上に位置している。

重複関係 東部を第104号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸は2.20mで、短軸は重複のため2.10mしか確認できなかった。形状は隅丸方形で、長軸方向はN-21°-Wである。深さは12cmで、底面は平坦である。壁は緩斜して立ち上がっている。

覆土 3層に分層できる。ブロック状の堆積状況から埋め戻されている。

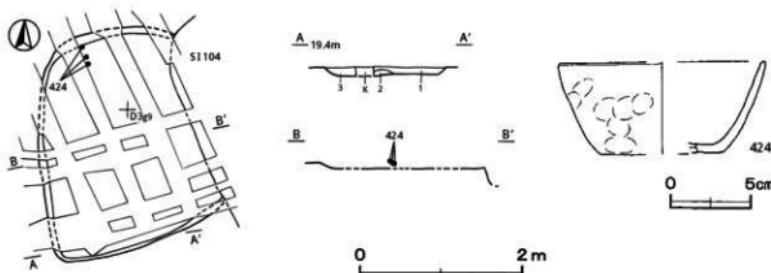
土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量
2 白褐色 ローム粒子少量

3 白褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片41点（碗1・甕38・櫃2）、須恵器片1点（蓋）、土製品1点（土玉）、鉄滓1点（2.9g）が出土している。また、混入した縄文土器片4点、弥生土器片1点（壺）も出土している。424は壁際の覆土上層から出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀中葉と考えられる。遺構の形状や遺物出土状況から、墓坑の可能性もある。



第297図 第67号土坑・出土遺物実測図

第67号土坑出土遺物観察表（第297図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
424	土師器	杯	[12.6]	5.6	[7.2]	長石・石英	橙	普通	外面削痕压痕	覆土上層	40% PL.7

第71号土坑（第298図）

位置 調査区中央部のD 3 b6区、標高19.1mの台地上に位置している。

重複関係 第106・139号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径2.53m、短径2.50mの円形である。深さは66cmで、底面は皿状である。壁は直立して立ち上がりっている。

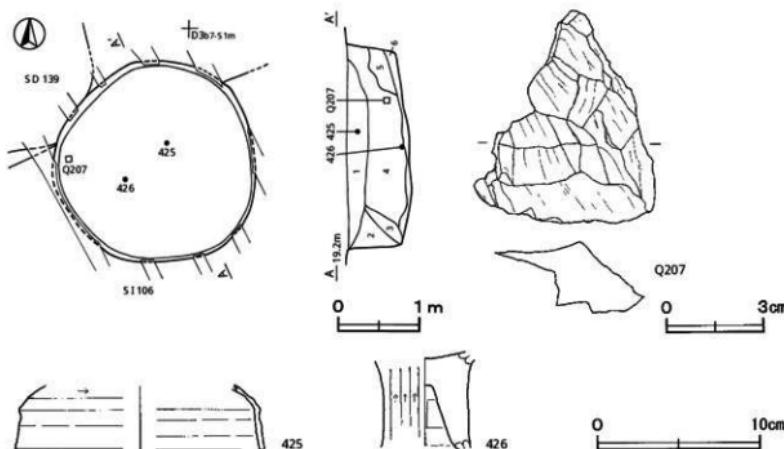
覆土 6層に分層できる。ブロック状の堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

1	粘 褐 色	ロームブロック少量	4	粘 褐 色	ローム粒子少量、焼土粒子微量
2	褐 色	ローム粒子中量	5	粘 褐 色	ロームブロック中量、炭化粒子少量
3	粘 褐 色	ローム粒子少量	6	粘 褐 色	ロームブロック少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片46点（环4・高杯6・甕35・ミニチュア1）、須恵器片2点（蓋・甕）、土製品1点（土玉）、滑石片2点が出土している。425は覆土上層、426は覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀前葉と考えられる。遺物出土状況から、廃棄土坑の可能性がある。



第298図 第71号土坑・出土遺物実測図

第71号土坑出土遺物観察表（第298図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
425	須恵器	蓋	[15.3]	(40)	-	長石	灰白	普通	天井部上半回転ヘラ削り	覆土上層	5%
426	土師器	高環	-	(6.1)	-	長石・石英・ 炭化鉄粒子	にぶい黄	普通	外側ヘラ削り 内面ヘラナデ	覆土下層	15%

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q207	原石	66	5.4	2.2	66.5	滑石	丸削り面 剥離面	覆土下層	

表5 古墳時代土坑一覧表

番号	位置	長軸(径)方向	平面形	規 模 (m)		深さ (cm)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	時期	監視関係 (古→新)
				長軸	短軸							
37	D 4 a2	N- 5°- W	楕円形	0.94	0.84	42	外傾	平坦	人為	土師器、須恵器、瓦	6世紀前葉	S1111→本跡
38	D 4 h0	N- 37°- E	楕円形	1.60	1.20	108	外傾	平坦	人為	土師器、須恵器、土玉、 磁石、白玉	6世紀前葉	S125→本跡
43	D 3 i5	-	円形	2.73	2.58	90	直立	平坦	人為	土師器、穿孔円板、削形環 埴輪、滑石片	6世紀末葉	S106→本跡
53	D 3 e8	N- 26°- W	長方形	3.10	(1.74)	14	外傾	平坦	人為	土師器、小玉	6世紀末葉	S1117→本跡
55	E 4 a1	[N- 42°- E]	[楕円形]	(2.19)	(1.60)	30	外傾	平坦	人為	土師器	5世紀前半	本跡→S195
64	C 3 f6	N- 54°- E [楕丸 長方形]	2.08	(1.12)	40	外傾	圓状	人為	土師器	5世紀末葉	本跡→S1121	
67	D 3 g8	N- 21°- W	楕丸形方	2.20	(2.10)	12	緩斜	平坦	人為	土師器、須恵器、土玉、 磁石、白玉	5世紀中葉	本跡→S1104
71	D 3 b6	-	円形	2.53	2.50	66	直立	圓状	人為	土師器、須恵器、土玉、 滑石片	6世紀前葉	S1106-139→本跡

3 平安時代の遺構と遺物

当時代の遺構として、堅穴住居跡2軒、土坑1基が確認できた。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 堅穴住居跡

第53号住居跡（第299図）

位置 調査区東部のE 3 d9区、標高18.8mの台地上に位置している。

重複関係 第51号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸3.74m、短軸3.72mの不整形で、主軸方向はN-20°-Wである。壁高は22~37cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで62cm、燃焼部幅24cmである。袖部はロームブロックと砂粒を主体とした褐色土で構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さで、やや赤変している。煙道部は壁外に15cm掘り込まれている。

竈土層解説

1 焰赤褐色 ロームブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量 2 焰赤褐色 燃土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量

ピット 4か所。P 1~P 3は深さ7~12cmで、位置から主柱穴である。P 4は深さ10cmで、西壁際に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 5層に分層できる。ブロック状の堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

1 焰褐色 ロームブロック中量

4 焰褐色 ロームブロック少量

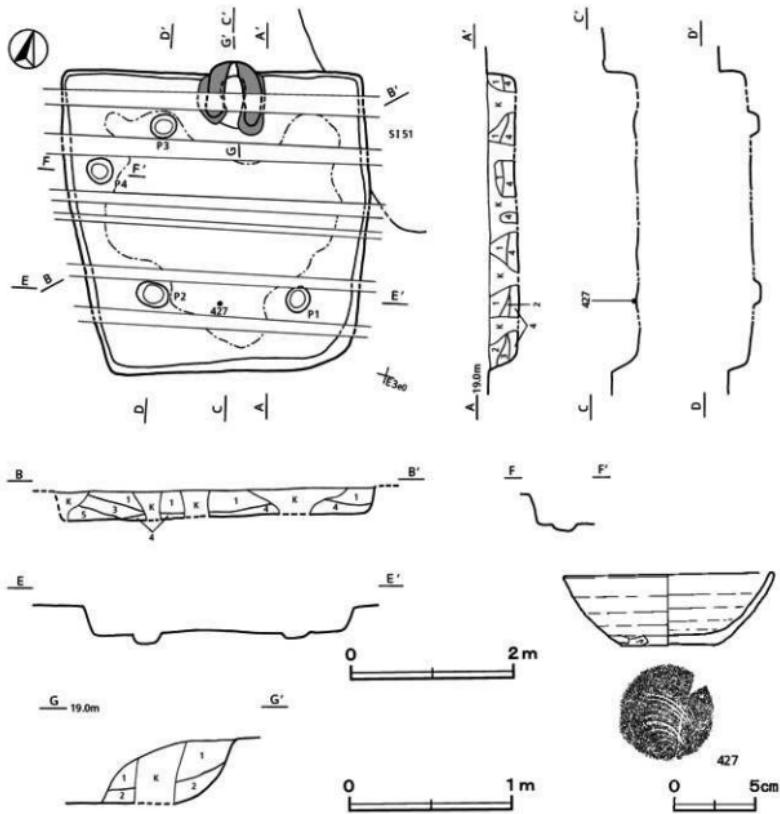
2 焰褐色 ローム粒子少量

5 焰褐色 ローム粒子微量

3 焰褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片393点（环35・高台付杯1・甕348・瓶9）、須恵器片11点（环2・蓋8・甕1）が出土している。また、混入した弥生土器片5点（壺）、土師器片1点（壺）、土製品2点（土玉・管状土錐）、石器2点（砥石）、鉄製品1点（不明）、鉄滓1点（2.4g）も出土している。遺物の大半は、全域の覆土中から出土している。427は中央部南寄りの床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀後葉と考えられる。



第299図 第53号住居跡・出土遺物実測図

第53号住居跡出土遺物観察表（第299図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
427	土鍋器	环	12.8	4.4	5.8	長石・石英・酸化鉄粒子	橙	普通	外表面下端手持ちヘラ削り 内面無調整	床面	95% PL.77

第68号住居跡（第300図）

位置 調査区東部のD 4 g9区、標高19.0mの台地上に位置している。

重複関係 第39・64号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 南北軸は2.82mで、東西軸は東部が調査区域外に延びているため2.24mしか確認できなかった。

形状は、方形もしくは長方形と推測される。主軸方向はN-50°-Wである。壁高は10~15cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦な貼床で、床質は軟弱である。

竈 北西壁に付設されている。調査区域外に延びているため、左袖部と燃焼部の一部しか確認できなかった。規模等は不明である。

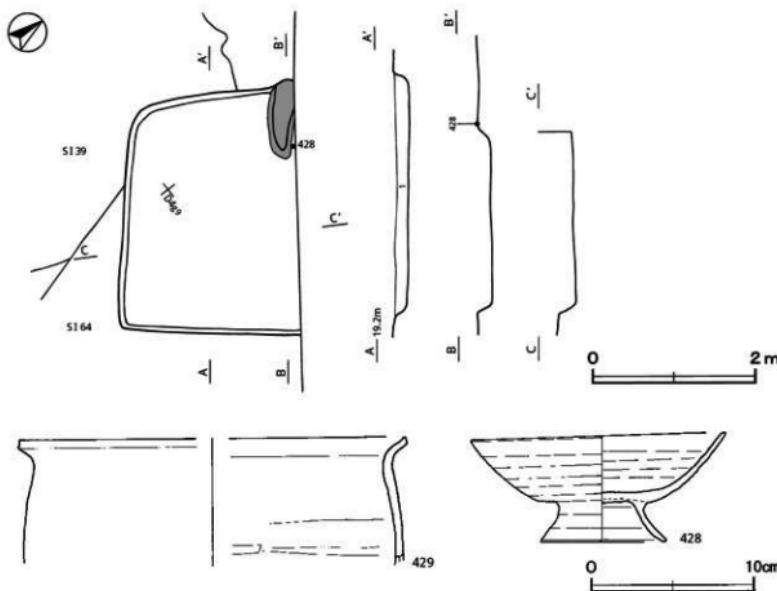
覆土 単一層である。ロームブロックを含む堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

1 赤褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片380点（坏11・高台付坏3・甕366）、須恵器片3点（甕）が出土している。また、混入した繩文土器片2点（深鉢）、弥生土器片1点（壺）、土師器片27点（坏23・椀1・高坏1・甕2）、土製品1点（土玉）、滑石片4点、瑪瑙1点も出土している。遺物の大半は、全域の覆土中から出土している。428は調査区域際の覆土上層、429は竈の燃焼部からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から10世紀後半と考えられる。



第300図 第68号住居跡・出土遺物実測図

第68号住居跡出土遺物観察表（第300図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
428	土師器	高台付坏	15.7	6.7	7.7	兔石・石英・ 陶化鉄粒子	浅黄褐	普通	内・外表面調整 高台貼付	覆土上層	95% PL.77
429	土師器	甕	[236]	(78)	-	石英・青母	褐	普通	内面ヘラナデ 口縁端部つまみ上げ	竈燃焼部	10%

表6 平安時代竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) 長軸×短軸	底高 (cm)	床面	壁構造	内部構造				主な出土遺物	時期	遺跡関係 (古・新)
								玄関	出入口	ピア	炉			
53	E 3 d9	N-20°-W	不整形	3.74×3.72	22-37	平坦	-	3	1	-	北端	-	人為 土師器、須恵器	9世紀後葉 S151→本跡
68	D 4 g9	N-50°-W	「方形・長方形」	2.82×(2.24)	10-15	平坦	-	-	-	-	北西端	-	人為 土師器、須恵器	10世紀後半 S139-64→本跡

(2) 土坑

第51号土坑（第301・302図）

位置 調査区東部のE 4 b0区、標高18.8mの台地上に位置している。

規模と形状 長径0.66m、短径0.56mの橢円形で、深さは10cmである。長軸方向はN-13°-Wである。底面は平坦で、壁は緩斜して立ち上がっている。

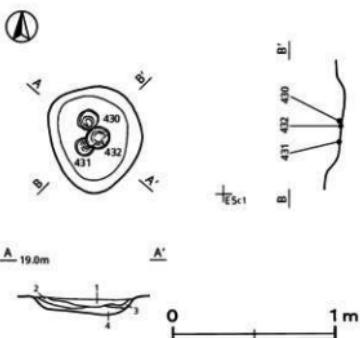
覆土 4層に分層できる。ロームブロックを含む堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 2 細褐色 ローム粒子少量
- 3 細褐色 ロームブロック少量
- 4 褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器3点（环2・高台付环1）が出土している。430～432は底面から正位に並べられた状態で出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀後葉と考えられる。規模や遺物出土状況から、祭祀に関連する可能性がある。



第301図 第51号土坑実測図



第302図 第51号土坑出土遺物実測図

第51号土坑出土遺物観察表（第302図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
430	土師器	环	12.8	39	8.2	長石・雲母	橙	普通	内面磨き 底部回転ヘラ削り	底面	100% PL77
431	土師器	环	13.0	39	6.5	長石・石英・雲母	にぶい橙	良好	外側底部下端回転ヘラ削り 内面磨き 底部回転ヘラ削り墨書き「万」	底面	100% PL77
432	土師器	高台付环	14.5	5.6	7.7	長石・雲母	浅黄褐	普通	内面磨き 底部回転ヘラ削り後、高台貼付	底面	100% PL77

4 中世の遺構と遺物

当時代の遺構として、掘立柱建物跡 1 棟が確認できた。以下、遺構と遺物について記述する。

掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡（第303図）

位置 調査区中央部のD 2 f0区、標高19.1mの台地上に位置している。

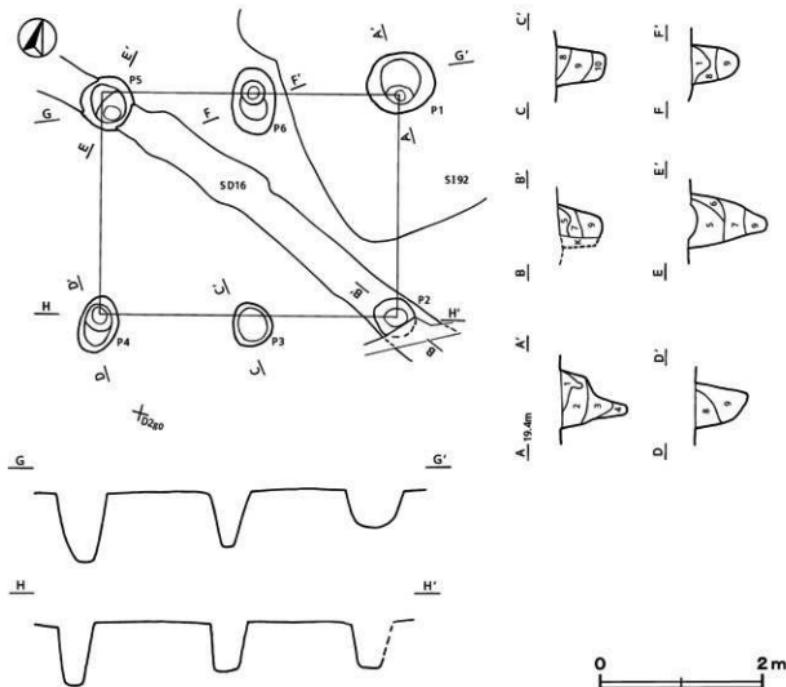
重複関係 第92号住居跡を掘り込み、P 2・P 5が第16号溝に掘り込まれている。

規模と構造 衍行 2 間、梁行 1 間の側柱建物跡で、衍行方向は N - 76° - E の東西棟である。規模は衍行 3.6m、梁行 2.7m で、面積は 9.72 m² である。柱間寸法は、衍行が 1.8m (6 尺)、梁行が 2.7m (9 尺) である。

柱穴 6か所。P 1～P 6 は深さ 62～94cm である。第 1～10 層は柱抜き取り後の覆土である。

土層解説

1 黒 褐 色 ローム粒子少量	6 褐 色 ロームブロック中量
2 赤 褐 色 ロームブロック中量	7 赤 褐 色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
3 赤 褐 色 ロームブロック中量、燒土粒子微量	8 赤 褐 色 ロームブロック・粘土ブロック少量
4 赤 褐 色 ロームブロック少量、炭化粒子微量	9 褐 色 ローム粒子中量
5 赤 褐 色 ローム粒子少量	10 赤 褐 色 ロームブロック少量



第303図 第1号掘立柱建物跡実測図

遺物出土状況 磁文土器片1点(深鉢), 土師器片32点(杯2・鉢1・甕29), 滑石片1点が出土している。出土土器はいずれも細片で、柱抜き取り後の覆土に混入したものと考えられる。

所見 時期は、規模や柱間寸法から中世と考えられる。

5 その他の遺構と遺物

遺物が出土していないことなどから、時期を明確にできない溝跡19条、土坑90基が確認された。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 溝跡

第1号溝跡 (第2・304図)

位置 調査区東部のE 5 18~F 5 d8区、標高19.0mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 北端が搅乱を受け、南側が調査区域外に延びているため確認された長さは15.00mで、北方向(N=8°)へ直線状に延びている。上幅0.80~1.29m、下幅0.19~0.40m、深さ30~35cmである。底面は全体的にはほぼ平坦で、高低差はみられない。断面形はU字状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層できる。レンズ状の堆積状況から自然堆積である。

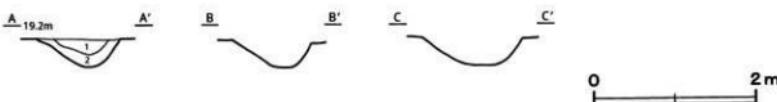
土層解説

1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

2 黒褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片1点(甕)が覆土中から出土しているが、細片のため図示することができない。

所見 時期は、伴う遺物が出土していないため不明である。また、性格も不明である。第3号溝跡と一連の溝跡の可能性もあるが、北端が搅乱を受けているため不明である。



第304図 第1号溝跡実測図

第2号溝跡 (第2・305図)

位置 調査区東部のE 6 12~E 6 14区、標高19.4mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長さは8.96mで、東方向(N=75°-E)へ直線状に延びている。上幅0.42~0.99m、下幅0.14~0.22m、深さ18cmである。底面は全体的にはほぼ平坦で、高低差はみられない。断面形はU字状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層できる。レンズ状の堆積状況から自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量

2 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量



第305図 第2号溝跡実測図

遺物出土状況 土器片1点(甕)が覆土中から出土しているが、細片のため図示することができない。

所見 時期は、重複している6世紀代の第1号住居跡より新しいが、伴う遺物が出土していないため不明である。また、性格も不明である。

第3号溝跡（第2・306図）

位置 調査区東部のE 5 g8～E 6 j13区、標高19.4mの台地平坦部に位置している。

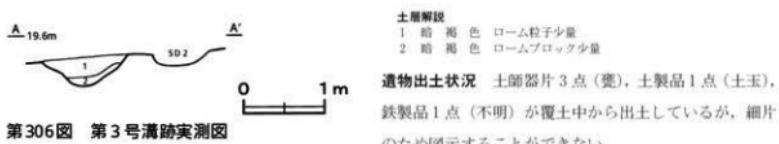
重複関係 第1号住居跡を掘り込み、第10号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長さは30.52mで、西方向へ直線状に伸び、E 5 j8区で北方向(N=0°)に屈曲して伸びている。

上幅0.44～1.30m、下幅0.10～0.38m、深さ37cmである。底面は全体的にはほぼ平坦で、高低差はみられない。

断面形は逆台形状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層できる。レンズ状の堆積状況から自然堆積である。



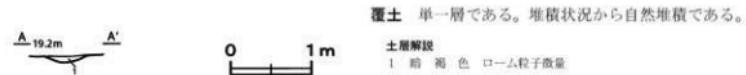
第306図 第3号溝跡実測図

所見 時期は、重複している6世紀代の第1号住居跡より新しいが、伴う遺物が出土していないため不明である。また、性格も不明である。

第4号溝跡（第2・307図）

位置 調査区東部のE 5 i9～E 5 j10区、標高19.1mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長さは5.55mで、西方向(N=80°-W)へ直線状に伸びている。上幅0.41～0.72m、下幅0.08～0.20m、深さ7cmである。底面は全体的にはほぼ平坦で、高低差はみられない。断面形はU字状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。



第307図 第4号溝跡実測図

所見 時期は、遺物が出土していないため不明である。また、性格も不明である。

第5号溝跡（第2・308図）

位置 調査区東部のE 4 j0～E 5 j2区、標高18.7mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第2・12号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長さは9.36mで、東方向(N=76°-E)へ直線状に伸びている。上幅0.78～1.10m、下幅0.36～0.74m、深さ12cmである。底面は全体的にはほぼ平坦で、高低差はみられない。断面形は逆台形状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層できる。レンズ状の堆積状況から自然堆積である。



第308図 第5号溝跡実測図

土層解説

- | | | | |
|---|---|---|-----------|
| 1 | 褐 | 色 | ロームブロック微量 |
| 2 | 褐 | 色 | ローム粒子微量 |

遺物出土状況 弥生土器片4点(壺), 土師器片50点(杯6, 壺44)が覆土中から出土しているが、細片のため図示することができない。

所見 時期は、重複している6世紀中葉の第2号住居跡より新しいが、伴う遺物が出土していないため不明である。また、性格も不明である。

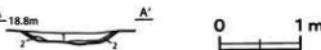
第6号溝跡 (第2・309図)

位置 調査区東部のF 4 a8~F 4 a9, 標高18.7mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第5号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 確認された長さは3.40mで、西側の調査区域外から東方向(N-80°-E)へ直線状に延びている。上幅1.10~1.28m, 下幅0.69~0.83m, 深さ15~27cmである。底面は全体的にはほぼ平坦で、高低差はみられない。断面形は逆台形状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層できる。レンズ状の堆積状況から自然堆積である。



第309図 第6号溝跡実測図

土層解説

- | | | | |
|---|---|---|-----------|
| 1 | 黒 | 色 | ロームブロック微量 |
| 2 | 褐 | 色 | ロームブロック微量 |

所見 時期は、重複している6世紀中葉の第5号住居跡より新しいが、遺物が出土していないため不明である。また、性格も不明である。

第7号溝跡 (第2・310図)

位置 調査区東部のE 4 j7~E 4 j9区, 標高18.6mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 西側が調査区域外に延びているため確認された長さは5.45mで、東方向(N-75°-E)へ直線状に延びている。上幅0.28~0.84m, 下幅0.12~0.58m, 深さ12~58cmである。底面は凹凸がみられるが、確認できた部分では高低差はみられない。断面形は逆台形状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層できる。レンズ状の堆積状況から自然堆積である。



第310図 第7号溝跡実測図

土層解説

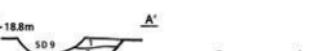
- | | | | |
|---|---|---|-----------|
| 1 | 黒 | 色 | ロームブロック微量 |
| 2 | 褐 | 色 | ロームブロック微量 |

所見 時期は、出土遺物がないため不明である。また、性格も不明である。

第8号溝跡 (第2・311図)

位置 調査区東部のE 4 g5~E 4 i6区, 標高18.6mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第9号住居跡を掘り込み、第9号溝に掘り込まれている。



第311図 第8号溝跡実測図

規模と形状 南側が調査区域外に延びているため確認された長さは9.56mで、北方向(N-17°-W)へ直線状に延びている。第9号溝と重複しているため確認された幅は、上幅0.40~0.74m、下幅0.14~0.48mだけで、深さは22~28cmである。底面は全体的に南側に向かって低くなっている。断面形はU字状と推測され、確認できた壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層できる。レンズ状の堆積状況から自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック微量

2 黒褐色 ローム粒子微量

遺物出土状況 磁文土器片1点(深鉢)、弥生土器片2点(壺)、土師器片148点(坏2、甕146)、須恵器片1点(甕)、土製品1点(土玉)、黒曜石片1点が覆土中から出土しているが、細片のため図示することができない。

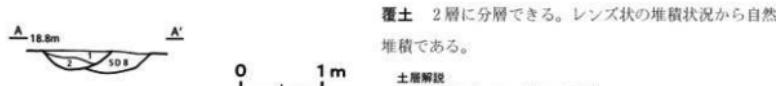
所見 時期は、重複している6世紀後葉の第9号住居跡より新しいが、伴う遺物が出土していないため不明である。また、性格も不明である。

第9号溝跡 (第2・312図)

位置 調査区東部のE 4 15~E 4 16区、標高18.6mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第9号住居跡、第8号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 南側が調査区域外に延びているため確認された長さは13.00mで、北方向(N-18°-W)へ直線状に延びている。上幅0.52~1.00m、下幅0.20~0.50m、深さ8~30cmである。底面は全体的に南側に向かって低くなっている。断面形はU字状で、壁は外傾して立ち上がっている。



第312図 第9号溝跡実測図

覆土 2層に分層できる。レンズ状の堆積状況から自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック微量
2 黒褐色 ローム粒子微量

遺物出土状況 土師器片2点(高坏、甕)、土製品1点(土玉)、貝片1点が覆土中から出土しているが、細片のため図示することができない。

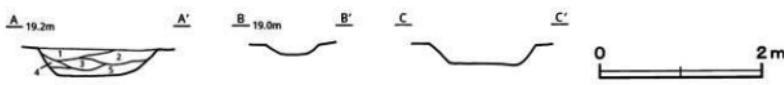
所見 時期は、重複している6世紀後葉の第9号住居跡より新しいが、伴う遺物が出土していないため不明である。また、性格も不明である。

第10号溝跡 (第2・313図)

位置 調査区東部のE 4 10~E 4 14区、標高18.8~19.0mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第2・30・43・44・62号住居跡、第4号堅穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長さは58.40mで、東方向へ直線状に延び、E 5 14区で北方向(N-6°-W)に屈曲して延びている。上幅0.80~1.80m、下幅0.60~1.12m、深さ12~32cmである。底面は全体的に南側に向かって低くなっている。断面形は逆V字形で、壁は外傾して立ち上がっている。



第313図 第10号溝跡実測図

覆土 5層に分層できる。レンズ状の堆積状況から自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子微量	4 褐色 ローム粒子少量
2 楊葉褐色 ローム粒子少量	5 褐色 ロームブロック少量
3 黒褐色 ロームブロック少量	

遺物出土状況 土師器片42点(斐), 須恵器片1点(斐), 土製品2点(土玉, 管状土錘), 石器1点(敲石)が覆土中から出土しているが, 細片のため図示することができない。

所見 重複している6世紀中葉の第43号住居跡より新しいが, 伴う遺物が出土していないため不明である。また, 性格も不明である。

第11号溝跡 (第2・314図)

位置 調査区東部のD 5 h1~E 5 g2区, 標高18.8mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第6・13・31・67A・67B・69号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 北側が調査区域外に延びているため確認された長さは36.90mで, 北方向(N-2°-W)へ直線状に延びている。上幅0.32~0.76m, 下幅0.04~0.56m, 深さ20~40cmである。底面は全体的に南側に向かって低くなっている。断面形は逆台形状で, 壁は外傾して立ち上がっている。

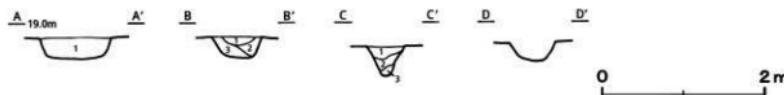
覆土 3層に分層できる。レンズ状の堆積状況から自然堆積である。

土層解説

1 楊葉褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	3 楊葉褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
2 黒褐色 ローム粒子中量	

遺物出土状況 繩文土器片1点(深鉢), 土師器片291点(杯7, 高台付杯1, 斐283), 土師質土器片3点(内耳鍋), 陶器片1点(不明), 磁器片1点(不明), 土製品2点(土玉), 滑石片1点, 鉄滓2点(42.7g)が覆土中から出土しているが, 細片のため図示することができない。

所見 時期は, 重複している6世紀前葉の第6住居跡より新しいが, 伴う遺物が出土していないため不明である。また, 性格も不明である。



第314図 第11号溝跡実測図

第12号溝跡 (第2・315図)

位置 調査区東部のE 4 f8~E 4 g9区, 標高18.7mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第10号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 北部は不明瞭なため, 確認された長さは5.91mで, 北方向(N-7°-W)へ直線状に延び, E 4 g9区で東方向に屈曲している。上幅0.38~0.77m,

下幅0.16~0.40m, 深さ6~31cmである。底面は全体的に

北側に向かって低くなっている。断面形は逆台形状で,

壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。



第315図 第12号溝跡実測図

覆土 2層に分層できる。レンズ状の堆積状況から自然堆積である。

土層解説

1 細 褐 色 ロームブロック微量

2 細 褐 色 ローム粒子少量

遺物出土状況 弥生土器片4点(壺), 土師器片54点(壺1, 高台付杯1, 壺52), 石器1点(砥石)が覆土中から出土しているが, 細片のため図示することができない。

所見 時期は, 重複している弥生時代後期の第10号住居跡より新しいが, 伴う遺物が出土していないため不明である。また, 性格も不明である。

第13号溝跡 (第2・316図)

位置 調査区東部のF 4 a9~F 4 a0区, 標高18.7mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第2号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 確認された長さは5.50mで, 西側の調査区域外から東方向(N-77°-E)へ直線状に延びている。上幅0.27~0.72m, 下幅0.19~0.67m, 深さ10cmである。底面は全体的にはほぼ平坦で, 高低差はみられない。断面形はU字状で, 壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 単一層である。堆積状況から自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック微量, 焼土粒子微量



第316図 第13号溝跡実測図

所見 時期は, 重複している6世紀中葉の第2号住居跡より新しいが, 伴う遺物が出土していないため不明である。また, 性格も不明である。

第14号溝跡 (第2・317図)

位置 調査区中央部のD 2 h0~D 3 j5区, 標高19.0mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第58・72・73号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 西側が調査区域外のため確認された長さは27.20mで, 北方向へ直線状に延び, D 3 g4区で西方向(N-83°-W)に屈曲して延びている。上幅0.84~1.36m, 下幅0.24~0.86m, 深さ36~50cmである。底面は全体的にはほぼ平坦で, 高低差はみられない。断面形は逆台形状で, 壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 4層に分層できる。レンズ状の堆積状況から自然堆積である。

土層解説

1 黒 褐 色 ローム粒子微量

2 細 褐 色 ロームブロック微量

3 細 褐 色 ローム粒子微量

4 細 褐 色 ローム粒子微量

遺物出土状況 繩文土器片3点(深鉢), 土師器片42点(壺21, 梶1, 壺16, 高杯3, ミニチュア1), 須恵器片12点(壺3, 盖8, 道1), 陶磁器片6点(不明), 石器1点(剥片), 石製品1点(剣形模造品), 鉄製品1点(不明), 滑石片1点が覆土中から出土しており, 細片のため図示することができない。

所見 時期は, 重複している6世紀前葉の第58・73号住居跡より新しいが, 伴う遺物が出土していないため不明である。また, 性格も不明である。



第317図 第14号溝跡実測図

第15号溝跡（第2・318図）

位置 調査区中央部のD 2 e8～D 2 e9区、標高19.1mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第49号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 西側が調査区域外のため確認された長さは6.81mで、東方向へ直線状に延び、D 2 e9区で北方向（N-10°-E）に屈曲して延びている。上幅0.45～0.95m、下幅0.15～0.40m、深さ15cmである。底面は全体的にはほぼ平坦で、高低差はみられない。断面形はU字状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層できる。レンズ状の堆積状況から自然堆積である。

土層解説

1	褐	色	ローム粒子中量
2	褐	色	ローム粒子少量



第318図 第15号溝跡実測図

遺物出土状況 土器片13点（甕）、土製品1点（土玉）、石製品1点（剣形模造品）が覆土中から出土しているが、細片のため図示することができない。

所見 時期は、重複している4世紀代の第49号住居跡より新しいが、伴う遺物が出土していないため不明である。また、性格も不明である。

第16号溝跡（第2・319図）

位置 調査区中央部のD 2 f9～D 2 f0区、標高19.1mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長さは6.60mで、北西方向（N-67°-W）へ直線状に延びている。上幅0.74～1.14m、下幅0.38～0.66m、深さ5～10cmである。底面は全体的にはほぼ平坦で、高低差はみられない。断面形は逆台形状で、緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層できる。レンズ状の堆積状況から自然堆積である。

土層解説

1	褐	色	ローム粒子少量
2	褐	色	ローム粒子中量



第319図 第16号溝跡実測図

遺物出土状況 土器片5点（甕）、滑石片3点が覆土中から出土しているが、細片のため図示することができない。

所見 時期は、重複している中世の第1号掘立柱建物跡より新しいが、伴う遺物が出土していないため不明である。また、性格も不明である。

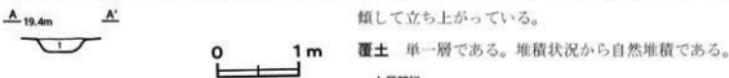
第18号溝跡（第2・320図）

位置 調査区中央部のD 2 b9～D 2 c9区、標高19.2mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長さは6.62mで、北方向(N-7°-E)へ直線状に延びている。上幅0.33~0.45m、下幅0.21~0.30m、深さ16cmである。底面は全体的には平坦で、高低差はみられない。断面形は逆台形状で、壁は外

傾して立ち上がっている。



第320図 第18号溝跡実測図

覆土 単一層である。堆積状況から自然堆積である。

土層解説
1 砂褐色 ロームブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量

所見 時期は、重複している6世紀前葉の第1号竪穴建物跡より新しいが、遺物が出土していないため不明である。また、性格も不明である。

第19号溝跡 (第2・321図)

位置 調査区西部のC 2 a2~C 1 e0区、標高17.7mの緩やかな斜面部に位置している。

重複関係 第3号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長さは25.62mで、北方向へ直線状に延び、C 1 a0区で東方向(N-70°-E)に屈曲して延びている。上幅0.80~1.98m、下幅0.34~0.88m、深さ10~60cmである。底面は全体的に北側に向かって低くなっている。断面形は逆台形状で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 4層に分層できる。レンズ状の堆積状況から自然堆積である。

土層解説

1 砂褐色 ローム粒子中量、燒土粒子・炭化粒子微量
2 極端褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

3 極端褐色 ローム粒子少量
4 砂褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 繩文土器片1点(深鉢)、土師器片90点(杯6、甌83、瓶1)、須恵器片3点(杯、蓋、甌)、陶磁器片5点(不明)、土製品2点(土玉)、石器2点(砥石)、鐵製品5点(鎌2、釘3)が覆土中から出土しているが、細部のため図示することができない。

所見 時期は、重複している6世紀末葉の第3号竪穴建物跡より新しいが、伴う遺物が出土していないため不明である。また、性格も不明である。



第321図 第19号溝跡実測図

第20号溝跡 (第2・322図)

位置 調査区西部のC 3 a1~C 2 h5区、標高18.6mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第158号住居跡、第2号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長さは39.00mで、北東方向(N-39°-E)へやや蛇行して延びている。上幅0.80~1.80m、下幅0.50~0.88m、深さ40cmである。底面は全体的には平坦で、高低差はみられない。断面形は逆台形状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 6層に分層できる。レンズ状の堆積状況から自然堆積である。

土層解説	
1	黒褐色
2	黒褐色
3	黒褐色
4	褐色
5	褐色
6	褐色

ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
ロームブロック少量化
ローム粒子微量
ローム粒子少量
ローム粒子中量
ロームブロック微量



第322図 第20号溝跡実測図

遺物出土状況 瓦文土器片1点(深鉢), 土師器片333点(环47, 楠2, 小形甕1, 甕283), 須恵器11点(蓋6, 甕5). 陶磁器片1点(不明), 土製品3点(土玉)が覆土中から出土しているが, 細片のため図示することができない。

所見 重複している6世紀後葉の第158号住居跡より新しいが, 伴う遺物が出土していないため不明である。また, 性格も不明である。

表7 時期不明溝跡一覧表

番号	位置	走行方向	形状	規格				覆土	新面形	主な出土遺物	重複關係 (古→新)
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)				
1	E 5j8~F 5d8	N~0°	(直線状)	(150.0)	0.80~1.29	0.19~0.40	30~35	自然	U字状	土師器	
2	E 6i2~E 6i4	N~75°~E	直線状	8.96	0.42~0.99	0.14~0.22	18	自然	U字状	土師器	S11→本跡
3	E 5g8~E 6i3	N~0°	屈曲	30.52	0.44~1.30	0.10~0.38	37	自然	逆台形状	土師器 土玉 不明鉄製品	S11→本跡→SK10
4	E 5i9~E 5i0	N~80°~W	直線状	5.55	0.41~0.72	0.08~0.20	7	自然	U字状		
5	E 4j0~E 5j2	N~76°~E	直線状	9.36	0.78~1.10	0.36~0.74	12	自然	逆台形状		S12~12→本跡
6	F 4a8~F 4a9	N~80°~E	(直線状)	(3.40)	1.10~1.28	0.69~0.83	15~27	自然	逆台形状		S15→本跡
7	E 4j7~E 4j9	N~75°~E	(直線状)	(5.46)	0.28~0.84	0.12~0.58	12~58	自然	逆台形状		
8	E 4g5~E 4i6	N~17°~W	(直線状)	(9.56)	0.40~0.74	0.14~0.48	22~28	自然	[U字形] 瓦文土器, 仰生土器, 土師器, 土玉, 銀鏡石	S19→本跡→SD9	
9	E 4f5~E 4i6	N~18°~W	(直線状)	(13.00)	0.52~1.00	0.20~0.50	8~30	自然	U字状	土師器 土玉 銀	S19, SD8→本跡
10	E 4j0~E 5a4	N~6°~W	屈曲	58.40	0.80~1.80	0.60~1.12	12~32	自然	逆台形状	土師器, 須恵器, 土玉, 銀石, 銀杖棒	S12~30~43~44~52~5X4→本跡
11	D 5h1~E 5g2	N~2°~W	(直線状)	(36.90)	0.32~0.76	0.04~0.56	20~40	自然	逆台形状	瓦文土器, 土師器, 土師質器, 土玉, 銀石	S16~13~31~67A~67B~69→本跡
12	E 4g8~E 4g9	N~7°~W	(屈曲)	(5.91)	0.38~0.77	0.16~0.40	6~31	自然	逆台形状	仰生土器, 土師器, 銀石	S10→本跡
13	F 4a9~F 4a0	N~77°~E	(直線状)	(5.50)	0.27~0.72	0.19~0.67	10	自然	U字状	土師器, 陶器	S12→本跡
14	D 2h0~D 3j5	N~83°~W	(屈曲)	(27.20)	0.84~1.36	0.24~0.86	36~50	自然	逆台形状	瓦文土器, 土師器, 土師質器, 刺鉗, 刺形模造品, 不明鉄製品, 銀石片	S15B~72~73→本跡
15	D 2e8~D 2e9	N~10°~E	(屈曲)	(6.81)	0.45~0.95	0.15~0.40	15	自然	U字状	土師器 土玉 刺形模造品	S149→本跡
16	D 2f9~D 2f0	N~67°~W	直線状	6.60	0.74~1.14	0.38~0.66	5~10	自然	逆台形状	土師器 清石片	S01→本跡
18	D 2b9~D 2c9	N~7°~E	直線状	6.62	0.33~0.45	0.21~0.30	16	自然	逆台形状		SX1→本跡
19	C 2a2~C 1e0	N~70°~E	屈曲	25.62	0.80~1.98	0.34~0.88	10~60	自然	逆台形状	瓦文土器, 土師器, 須恵器, 土玉, 銀石, 銀町	SX3→本跡
20	C 3a1~C 2h5	N~39°~E	蛇行	39.00	0.80~1.80	0.50~0.88	40	自然	逆台形状	瓦文土器, 土師器	S158, SX2→本跡

(2) 土坑(第323~327図)

時期・性格ともに不明な土坑90基について、規模・形状等について実測図と一覧表を掲載する。

第1号土坑土層解説

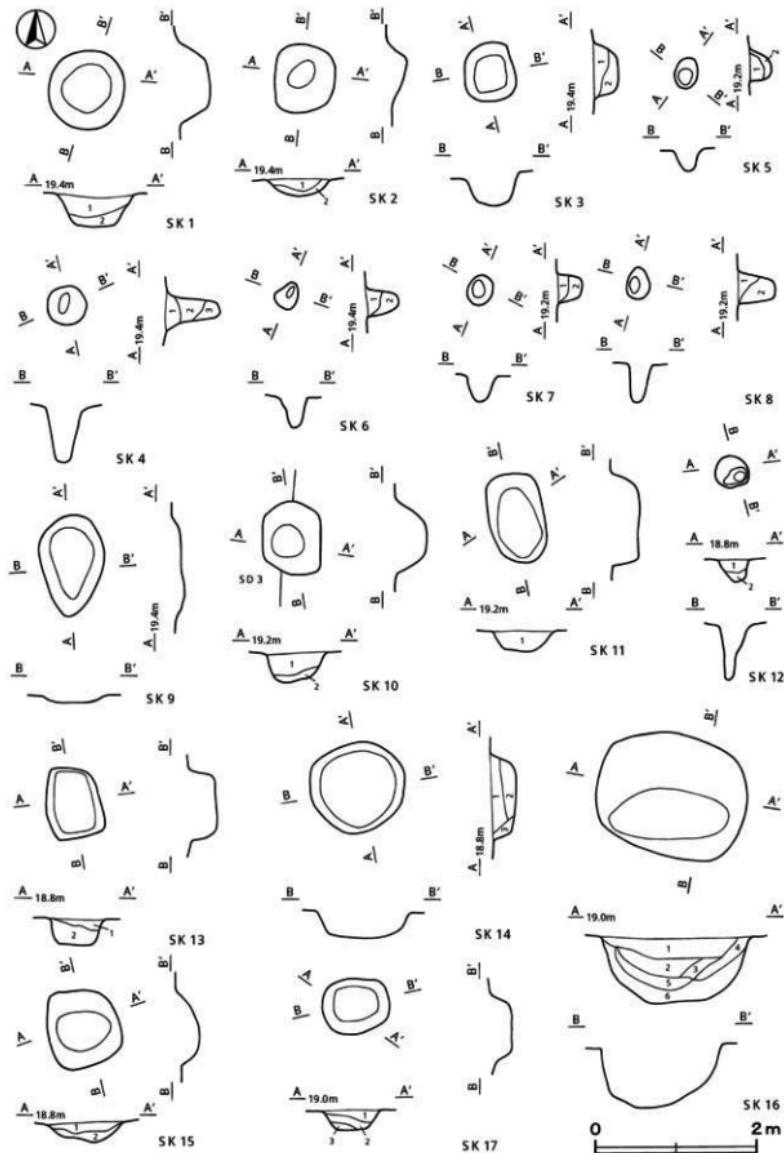
1 褐色 褐褐色 ロームブロック微量

2 褐色 褐褐色 ロームブロック少量化

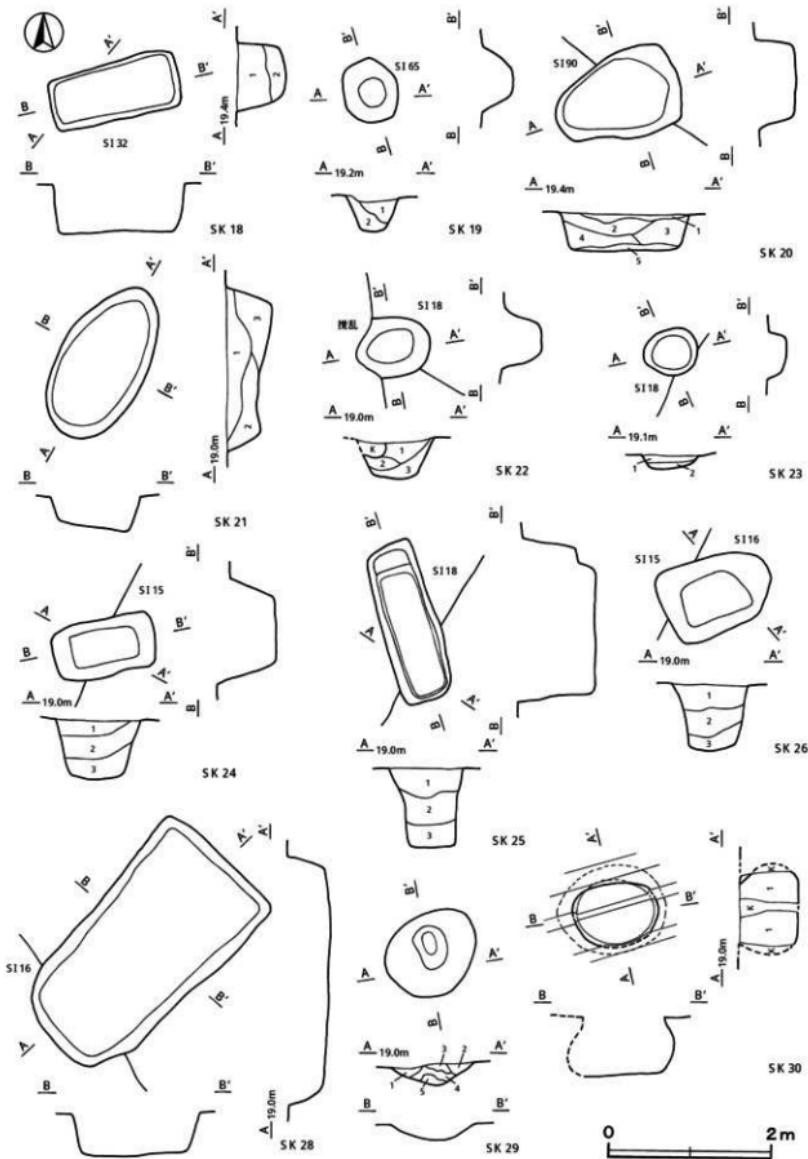
第2号土坑土層解説

1 褐色 褐褐色 ロームブロック少量化

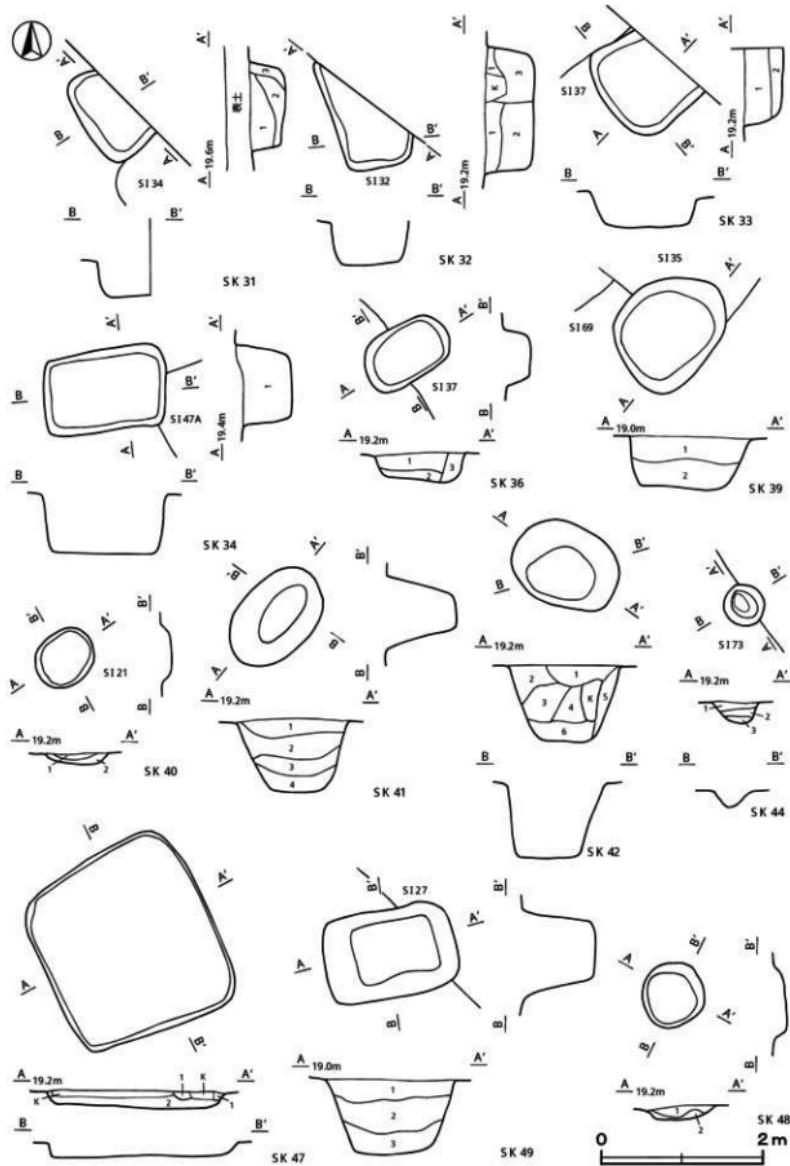
2 褐色 褐褐色 ロームブロック少量化



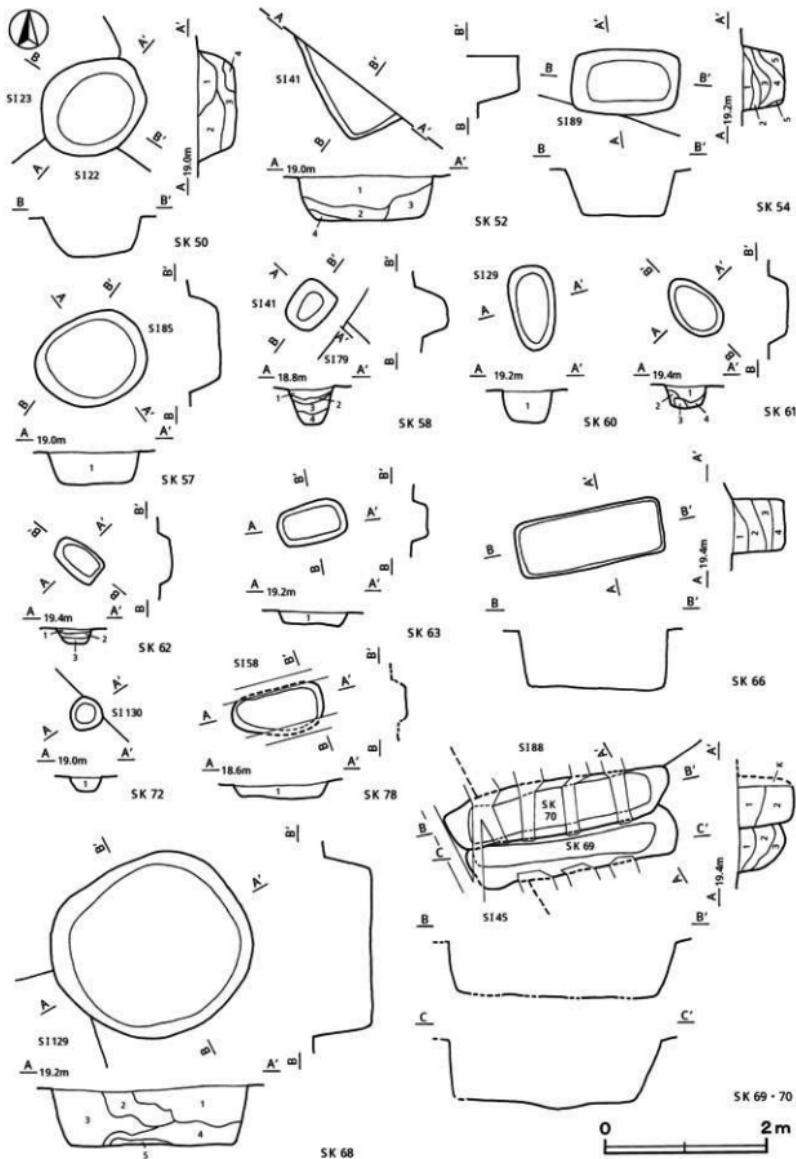
第323図 その他の土坑実測図(1)



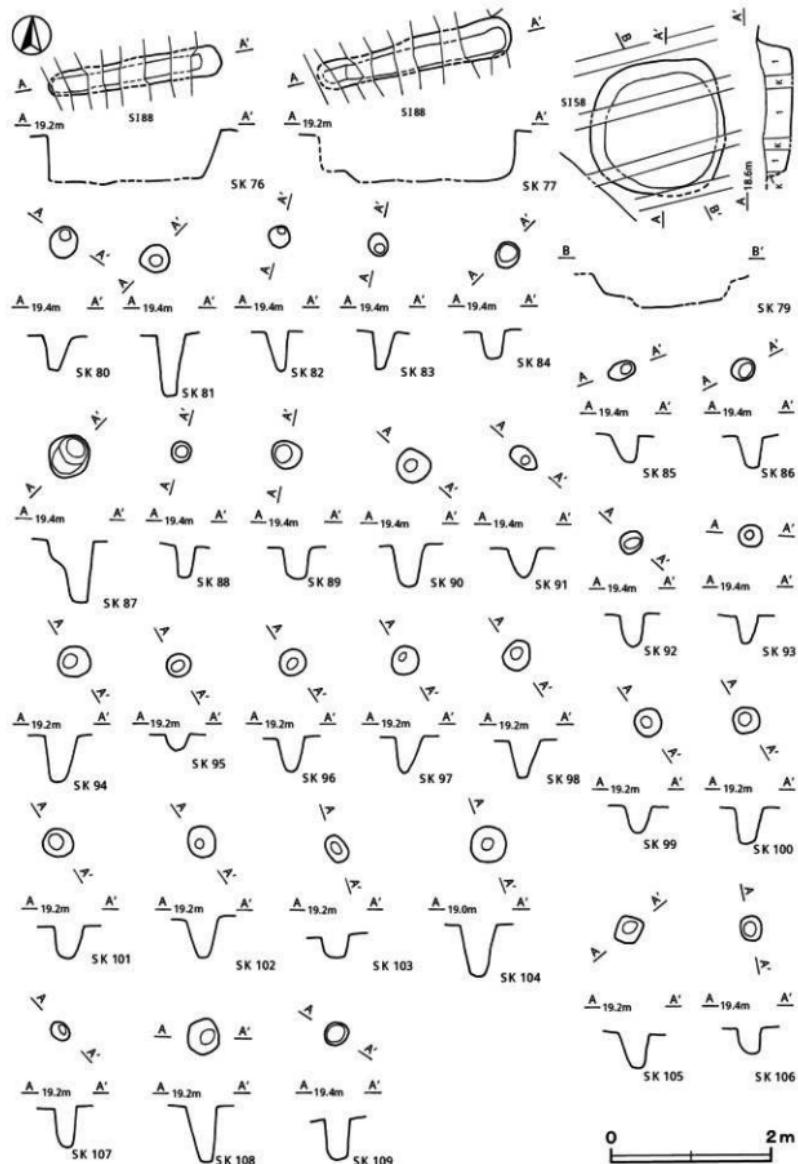
第324図 その他の土坑実測図(2)



第325図 その他の土坑実測図(3)



第326図 その他の土坑実測図(4)



第327図 その他の土坑実測図(5)

第3号土坑土層解説		
1 赤褐色 ロームブロック微量	2 黒褐色 ロームブロック少量	
第4号土坑土層解説		
1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量	3 赤褐色 ローム粒子少量	
2 赤褐色 ロームブロック・炭化粒子微量		
第5号土坑土層解説		
1 赤褐色 ロームブロック少量・炭化粒子微量	2 赤褐色 ローム粒子中量	
第6号土坑土層解説		
1 赤褐色 ローム粒子少量	2 赤褐色 ローム粒子中量	
第7号土坑土層解説		
1 黑褐色 ローム粒子少量・炭化粒子微量	2 赤褐色 ロームブロック少量・炭化物微量	
第8号土坑土層解説		
1 赤褐色 ローム粒子・炭化粒子微量	2 にぶい褐色 ローム粒子少量・炭化粒子微量	
第10号土坑土層解説		
1 黒褐色 ロームブロック微量	2 極赤褐色 ロームブロック少量	
第11号土坑土層解説		
1 赤褐色 ロームブロック微量		
第12号土坑土層解説		
1 赤褐色 ロームブロック微量	2 赤褐色 ロームブロック少量	
第13号土坑土層解説		
1 赤褐色 ロームブロック微量	2 赤褐色 ロームブロック少量	
第14号土坑土層解説		
1 赤褐色 ロームブロック・炭化粒子微量	3 赤褐色 ロームブロック微量	
2 黒褐色 ロームブロック微量		
第15号土坑土層解説		
1 赤褐色 ロームブロック微量	2 赤褐色 ローム粒子少量	
第16号土坑土層解説		
1 赤褐色 ローム粒子少量	4 赤褐色 ロームブロック微量	
2 赤褐色 ロームブロック微量	5 赤褐色 ロームブロック微量	
3 黒褐色 ロームブロック微量	6 明褐色 ローム粒子中量	
第17号土坑土層解説		
1 黑褐色 ロームブロック微量	3 赤褐色 ロームブロック少量	
2 黑褐色 ロームブロック少量・炭化粒子微量		
第18号土坑解説		
1 赤褐色 ロームブロック微量	2 赤褐色 ロームブロック中量	
第19号土坑土層解説		
1 黑褐色 ロームブロック・炭化粒子微量	2 極赤褐色 ロームブロック・燒土粒子・炭化粒子微量	
第20号土坑土層解説		
1 赤褐色 ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子微量	4 赤褐色 ローム粒子微量	
2 赤褐色 ローム粒子少量・炭化粒子微量	5 赤褐色 ロームブロック微量	
3 赤褐色 ロームブロック少量・炭化粒子微量		
第21号土坑土層解説		
1 にぶい褐色 ローム粒子少量	3 赤褐色 ロームブロック微量	
2 赤褐色 ロームブロック微量		
第22号土坑土層解説		
1 赤褐色 ロームブロック少量	3 赤褐色 ロームブロック少量	
2 赤褐色 ローム粒子少量		
第23号土坑土層解説		
1 赤褐色 ロームブロック少量	2 赤褐色 ロームブロック中量	
第24号土坑土層解説		
1 赤褐色 ローム粒子中量・炭化物微量	3 赤褐色 ローム粒子微量	
2 赤褐色 ロームブロック微量		
第25号土坑土層解説		
1 赤褐色 ロームブロック微量	3 赤褐色 ローム粒子微量	
2 赤褐色 ローム粒子少量		
第26号土坑土層解説		
1 赤褐色 ロームブロック微量	3 赤褐色 ロームブロック少量	
2 赤褐色 ローム粒子中量		

第29号土坑土層解説

- 1 灰褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
 2 赤褐色 烧土粒子中量
 3 赤褐色 烧土ブロック多量

- 4 赤褐色 烧土ブロック中量
 5 褐色 ローム粒子少量

第30号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

- 3 黑褐色 ローム粒子微量

第31号土坑土層解説

- 1 赤褐色 ローム粒子微量
 2 褐色 ローム粒子少量

- 3 赤褐色 ロームブロック少量

第32号土坑土層解説

- 1 黑褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
 2 黑褐色 ローム粒子少量

- 3 赤褐色 ロームブロック少量

第33号土坑土層解説

- 1 楔形褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

- 2 赤褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

第34号土坑土層解説

- 1 明褐色 ローム粒子少量

- 3 赤褐色 ロームブロック少量

第36号土坑土層解説

- 1 黑褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
 2 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

- 3 赤褐色 ロームブロック少量

第39号土坑土層解説

- 1 赤褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

- 2 赤褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

第40号土坑土層解説

- 1 黑褐色 調化物中量

- 2 赤褐色 ロームブロック少量

第41号土坑土層解説

- 1 にがい褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

- 3 赤褐色 ローム粒子少量

- 2 にがい褐色 ロームブロック微量

- 4 灰褐色 ローム粒子微量

第42号土坑土層解説

- 1 赤褐色 ローム粒子少量

- 4 にがい褐色 ロームブロック微量

- 2 赤褐色 ロームブロック少量

- 5 褐色 ローム粒子少量

- 3 にがい褐色 ローム粒子微量

- 6 灰褐色 ローム粒子微量

第44号土坑土層解説

- 1 赤褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

- 3 褐色 ローム粒子少量

- 2 褐色 ロームブロック少量

第47号土坑土層解説

- 1 赤褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

- 2 赤褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

第48号土坑土層解説

- 1 楔形褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

- 2 褐色 ロームブロック少量

第49号土坑土層解説

- 1 黑褐色 ロームブロック中量

- 3 赤褐色 ロームブロック少量

- 2 黑褐色 ロームブロック少量

第50号土坑土層解説

- 1 赤褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量

- 3 赤褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量

- 2 赤褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック微量

- 4 赤褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

第52号土坑土層解説

- 1 赤褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量

- 3 赤褐色 ロームブロック微量

- 2 赤褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

- 4 赤褐色 ローム粒子少量

第54号土坑土層解説

- 1 黑褐色 ローム粒子少量

- 4 黑褐色 ロームブロック少量

- 2 赤褐色 ローム粒子少量

- 5 赤褐色 ロームブロック少量

- 3 黑褐色 ローム粒子中量

第57号土坑土層解説

- 1 黑褐色 ローム粒子微量

第58号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

- 3 赤褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

- 2 赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

- 4 黑褐色 ローム粒子微量

第60号土坑土層解説

- 1 黑色 焼土ブロック中量、ロームブロック少量

第61号土坑土層解説

- 1 黑褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量

- 3 褐色 ロームブロック多量

- 2 赤褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量

- 4 褐色 ローム粒子中量

第62号土坑土層解説

1. 黒褐色 晩土粒子中量、ローム粒子少量
2. 黒褐色 ローム粒子中量
3. 褐色 ローム粒子少量

第63号土坑土層解説

1. 褐褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量

第66号土坑土層解説

1. 褐褐色 ローム粒子中量
2. 黒褐色 ローム粒子少量
3. 褐褐色 ローム粒子少量
4. 褐褐色 ロームブロック少量

第68号土坑土層解説

1. 褐褐色 ローム粒子少量、晩土粒子・炭化粒子微量
2. 褐褐色 ロームブロック少量、晩土粒子・炭化粒子微量
3. 褐褐色 ロームブロック中量
4. 褐褐色 ロームブロック中量、晩土粒子・炭化粒子微量
5. 黑褐色 ローム粒子中量

第69号土坑土層解説

1. 黑褐色 ロームブロック少量
2. 褐褐色 ロームブロック少量
3. 褐褐色 ローム粒子少量

第70号土坑土層解説

1. 褐褐色 ローム粒子少量
2. 黑褐色 ロームブロック少量

第72号土坑土層解説

1. 褐褐色 ロームブロック中量、晩土粒子・炭化粒子微量

第78号土坑土層解説

1. 黑褐色 ローム粒子少量

第79号土坑土層解説

1. 褐褐色 ローム粒子少量

表8 時期不明土坑一覧表

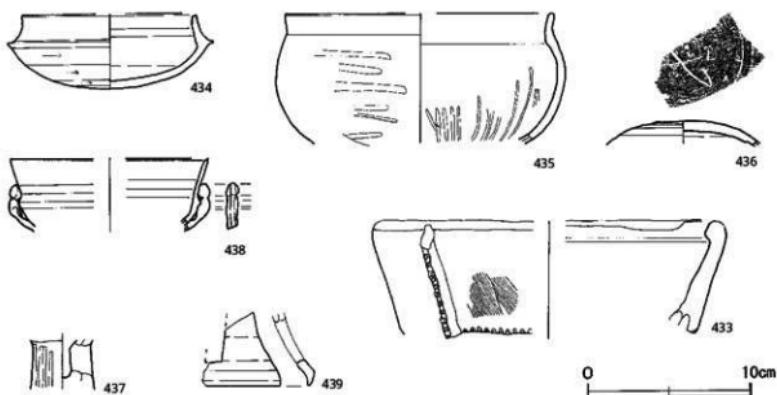
番号	位置	長軸(径)方向	平面形	規 標(m)		深さ(cm)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	重複關係 (古→新)
				長軸(径)	短軸(径)						
1	F 6 a3	-	円形	1.00	0.94	36	縦斜	平坦	自然		
2	F 6 a2	N- 5°- E	楕円形	0.86	0.74	22	縦斜	圓状	自然	土師器 砂	
3	F 5 a9	N- 10°- W	長方形	0.71	0.62	31	外傾	平坦	自然		
4	F 5 b9	-	円形	0.51	0.49	69	外傾	圓状	自然		
5	F 5 b9	N- 19°- E	楕円形	0.39	0.30	22	外傾	圓状	自然		
6	F 5 b9	N- 21°- E	楕円形	0.36	0.28	38	外傾	平坦	自然		
7	F 5 b9	N- 2°- W	楕円形	0.38	0.33	30	外傾	平坦	自然		
8	F 5 b8	N- 15°- E	楕円形	0.42	0.28	47	外傾	平坦	自然		
9	E 6 j1	N- 0°	楕円形	1.23	0.80	12	縦斜	圓状	-		
10	E 5 b8	N- 2°- W	楕円形	0.92	0.71	37	縦斜	圓状	自然	SD 3 →本跡	
11	E 5 j5	N- 13°- W	楕円形	1.12	0.69	36	外傾	平坦	人為		
12	E 4 j0	-	円形	0.40	0.40	68	外傾	平坦	自然		
13	E 4 j9	N- 5°- W	長方形	0.87	0.78	32	外傾	平坦	人為		
14	E 4 i9	-	円形	1.16	1.09	34	縦斜	圓状	人為	土師器	
15	E 4 f9	-	方形	0.97	0.90	26	縦斜	圓状	自然		
16	E 4 g5	N- 70°- W	楕円形	1.86	1.02	74	縦斜	圓状	自然	土師器 土玉	
17	E 5 d8	-	円形	0.84	0.78	26	縦斜	平坦	自然	土師器 滅盡器 銅鏡器 面鏡 品	
18	E 5 d8	N- 80°- E	長方形	1.55	0.63	59	外傾	平坦	人為	土師器	S132 →本跡
19	D 4 d3	N- 22°- W	楕円形	0.81	0.65	43	外傾	平坦	自然		S165 →本跡
20	D 4 d5	N- 66°- E	楕円形	1.60	1.10	45	外傾	平坦	人為	土師器 滅石	S190 →本跡
21	E 4 d5	N- 30°- E	楕円形	2.00	1.08	43	外傾	縦斜	自然		
22	E 4 e5	N- 79°- E	楕円形	0.92	0.70	48	外傾	平坦	自然		S118 →本跡
23	E 4 e6	N- 75°- E	楕円形	0.68	0.56	20	外傾	圓状	人為	須恵器 滅石	S118 →本跡

番号	位置	長軸(往)方向	平面形	規 標 (m)		深さ (cm)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	重複關係 (古→新)
				長軸(往)	短軸(往)						
24	E 4 e7	N - 75° - E	長方形	1.27× 0.72	72	外傾	平坦	自然	土玉	S115→本跡	
25	E 4 e6	N - 17° - W	長方形	1.97× 0.70	91	直立	平坦	自然	土師器 須恵器	S116→本跡	
26	E 4 e8	N - 67° - E	長方形	1.37× 0.94	72	外傾	平坦	自然		S115 - 16→本跡	
28	E 4 d9	N - 45° - E	長方形	3.10× 1.57	52	外傾	平坦	-	縄文土器 弦生土器 土師器	S116→本跡	
29	E 4 b1	N - 45° - E	楕円形	1.18× 0.96	20	緩斜	凹状	人為			
30	E 4 c1	N - 76° - E	楕円形	1.00× 0.76	70	内傾	平坦	人為	土師器 須恵器 土玉 支脚 鉄鍔		
31	D 4 c5	-	[南北長方形] 南北長方形	1.15× (0.61)	45	外傾	平坦	人為	土師器 土玉	S134→本跡	
32	E 5 d8	N - 17° - W	[長方形]	(1.44)× 0.81	64	外傾	平坦	人為		S132→本跡	
33	D 4 d6	-	[方形・ 長方形]	1.58× (0.96)	41	外傾	平坦	人為	土師器	S137→本跡	
34	D 4 b2	N - 81° - E	長方形	1.50× 1.00	74	外傾	平坦	自然	縄文土器 土師器 須恵器 土 師質土器 赤 鉄鍔	S147A→本跡	
36	D 4 e6	N - 60° - E	楕円形	1.10× 0.70	32	外傾	平坦	人為	土師器 須恵器	S137→本跡	
39	D 4 h0	N - 45° - E	楕円形	1.50× 1.20	62	外傾	平坦	人為	土師器 須恵器 滑石片	S125 - 69→本跡	
40	D 4 g4	N - 55° - E	南北長方形	0.76× 0.64	13	外傾	凹状	自然		S121→本跡	
41	E 3 b7	N - 45° - E	楕円形	1.36× 0.80	87	外傾	平坦	自然			
42	E 3 a8	N - 59° - W	楕円形	1.38× 1.02	90	外傾	平坦	人為	縄文土器 土師器 陶磁器		
44	D 3 h2	N - 60° - W	楕円形	0.56× 0.50	22	緩斜	凹状	自然		S173→本跡	
47	D 3 g5	-	方形	2.34× 2.17	20	外傾	平坦	自然	縄文土器 土師器 須恵器 剣 別櫛追足		
48	D 3 g1	-	円形	0.86× 0.80	16	緩斜	平坦	自然			
49	E 4 d8	N - 76° - E	南北長方形	1.60× 1.08	88	外傾	平坦	自然	縄文土器 土師器 須恵器 南 磁器	S127→本跡	
50	E 4 a7	N - 47° - E	楕円形	1.38× 1.16	44	外傾	平坦	人為	縄文土器 土師器	S122 - 23→本跡	
52	E 5 a6	N - 31° - W	[南北長 方形]	(1.00)× (0.65)	55	外傾	平坦	自然		S141→本跡	
54	D 4 h2	N - 89° - E	長方形	1.33× 0.80	55	外傾	平坦	自然	弥生土器 土師器 須恵器	S189→本跡	
57	D 4 i9	N - 57° - E	楕円形	1.36× 1.11	41	外傾	平坦	人為	土師器 土玉	S185→本跡	
58	E 5 b6	N - 40° - E	南北長方形	0.60× 0.48	36	外傾	平坦	自然	土師器 土玉	S141 - 79→本跡	
60	D 4 i7	N - 7° - W	楕円形	1.04× 0.60	6	外傾	平坦	人為	土師器	S129→本跡	
61	C 4 i1	N - 44° - W	楕円形	0.82× 0.53	20	外傾	平坦	自然	土師器		
62	D 4 a1	N - 50° - W	楕円形	0.64× 0.36	18	外傾	平坦	自然	土師器		
63	D 4 g7	N - 74° - E	南北長方形	0.87× 0.49	18	外傾	平坦	人為	土師器		
66	E 4 b3	N - 76° - E	長方形	1.78× 0.67	68	直立	平坦	自然			
68	C 2 g2	N - 65° - E	楕円形	2.41× 2.18	74	外傾	平坦	人為	土師器 須恵器 白玉 織錦繩	S1129→本跡	
69	D 4 e1	N - 81° - E	[長方形]	2.60× (0.50)	85	外傾	平坦	自然		S145→本跡 - SK70	
70	D 4 d1	N - 79° - E	長方形	2.75× 0.75	69	外傾	平坦	自然	土師器 須恵器 土師質土器 陶磁器 瓦 滑石	S145 - 88, SK69→本跡	
72	C 3 d3	-	円形	0.39× 0.38	18	外傾	凹状	人為		S1130→本跡	
76	D 4 d1	N - 81° - E	長方形	2.14× 0.35	58	外傾	平坦	-		S188→本跡	
77	D 4 d1	N - 78° - E	長方形	2.46× 0.44	60	直立	平坦	-		S188→本跡	
78	E 3 a5	N - 76° - E	[楕円形]	1.16× (0.58)	13	外傾	平坦	人為	土師器	S158→本跡	
79	E 3 a5	N - 36° - E	楕円形	1.48× 1.66	22	外傾	平坦	-	土師器	S158→本跡	
80	C 2 j0	N - 29° - E	楕円形	0.38× 0.33	41	外傾	平坦	-			
81	D 2 a0	-	円形	0.35× 0.34	75	外傾	平坦	-			
82	D 2 a0	-	円形	0.29× 0.27	48	外傾	凹状	-			
83	D 2 a0	N - 30° - W	楕円形	0.29× 0.24	44	外傾	平坦	-			
84	D 2 a0	N - 22° - E	楕円形	0.34× 0.28	35	外傾	平坦	-	土師器		
85	D 2 b0	N - 66° - E	楕円形	0.34× 0.22	33	外傾	平坦	-			
86	D 2 b0	N - 30° - E	楕円形	0.30× 0.26	37	外傾	凹状	-			
87	D 2 b0	N - 33° - E	楕円形	0.56× 0.52	76	外傾	凹状	-	土師器		
88	D 3 b1	-	円形	0.26× 0.26	35	外傾	平坦	-			

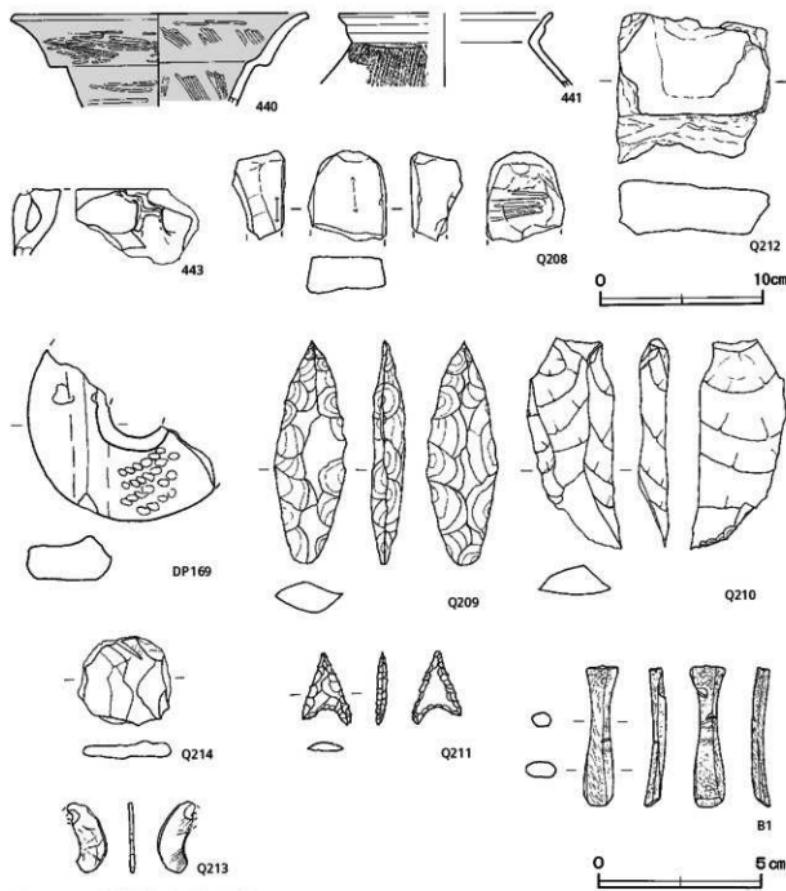
番号	位置	長軸(径)方向	平面形	規 模 (m)		深さ (cm) 基盤(柱)×培塿(柱)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	遺構關係 (古→新)
				横	縦						
89	D 3 b1	N- 67° - E	楕円形	0.36	0.34	38	外傾	皿状	-		
90	D 2 b9	-	円形	0.44	0.42	50	外傾	平坦	-		
91	D 2 b9	N- 47° - W	楕円形	0.36	0.24	34	外傾	平坦	-		
92	D 2 a9	N- 55° - E	楕円形	0.30	0.26	40	外傾	平坦	-		
93	C 2 j9	-	円形	0.30	0.29	34	外傾	平坦	-	土師器	
94	D 2 d7	-	円形	0.41	0.38	58	外傾	皿状	-		
95	D 2 d7	N- 57° - E	楕円形	0.31	0.28	20	傾斜	皿状	-		
96	D 2 c7	-	円形	0.35	0.33	42	外傾	平坦	-	土師器	
97	D 2 c7	-	円形	0.36	0.35	44	外傾	平坦	-		
98	D 2 c7	N- 65° - W	楕円形	0.36	0.33	49	外傾	平坦	-		
99	D 2 c7	-	円形	0.36	0.36	32	外傾	平坦	-	土師器	
100	D 2 c7	-	円形	0.34	0.33	46	外傾	平坦	-		
101	D 2 c7	N- 70° - W	楕円形	0.40	0.35	41	外傾	平坦	-		
102	D 2 d8	N- 14° - W	楕円形	0.39	0.34	50	外傾	平坦	-		
103	D 2 b6	N- 42° - W	楕円形	0.36	0.24	29	外傾	平坦	-		
104	D 2 a6	-	円形	0.44	0.44	62	外傾	皿状	-		
105	D 2 a6	N- 20° - E	長方形	0.34	0.30	42	外傾	平坦	-		
106	D 2 b6	N- 15° - W	楕円形	0.36	0.27	30	外傾	皿状	-		
107	D 2 a9	N- 16° - W	楕円形	0.26	0.21	50	外傾	平坦	-	土師器	
108	C 2 j0	N- 45° - E	楕円形	0.47	0.41	68	外傾	平坦	-		
109	C 2 j0	N- 65° - E	楕円形	0.30	0.27	50	直立	平坦	-		

(3) 遺構外出土遺物 (第328・329図)

遺構に伴わない遺物のうち、特徴的なものを実測図と遺物観察表で記述する。



第328図 遺構外出土遺物実測図(1)



第329図 遺構外出土遺物実測図(2)

遺構外出土遺物観察表(第328・329図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
434	須恵器	环	[108]	4.6	-	長石	灰	普通	面転へラ削り調製	S193 陶瓦	25%
435	土師器	楕	[164]	(8.1)	-	長石・石英・赤色粒子・雲母	明赤褐	普通	口縁部内・外圍横ナデ 体部内・外面ナデ後へラ墨書き	S116 陶土中	30%
436	須恵器	蓋	-	(1.6)	-	長石・白色粒子	暗灰黄	普通	天井部回転へラ削り 天井部へラ墨書き「x」	S112 陶土中	5%
437	土師器	高環	-	(2.9)	-	長石・石英・白色粒子	浅黄褐	普通	外縁へラナデ	表土中	5%
438	須恵器	高环	[125]	(45)	-	長石・白色粒子・黒色粒子	黄灰	普通	把手貼り付け	S191 陶土中	5% PL77
439	須恵器	高环	-	(45)	-	長石	にぶい黄褐	普通	外面自然輪 通孔2か所	S1110 陶土中	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
433	土師器	壺	[205]	(72)	-	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	口縁部外ハケ目後ナデ 隆起貼り付け接着状工具により剥り目	S131 南土中	5%
440	土師器	壺	18.2	(5.7)	-	白色粒子・透明粒子	にぶい褐	普通	口縁部内・外面へラ磨き	S1139 南土中	10%
441	土師器	壺	[132]	(45)	-	長石・石英	暗	普通	口縁部内・外表面ナデ 体部外ハケ目 内面ナデ	S1121 南土中	5%
443	土師質土器	内耳鉢	-	(42)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	内・外表面ナデ	SX2 南土中	5%

番号	種別	径	厚さ	孔径	重量	胎土	手法の特徴ほか	出土位置	備考
DP100	土器片円筒	(66)	1.3	(1.7)	(30.8)	長石・石英・赤色粒子	有孔 両面から穿孔 剥離研磨 隆起 単層織文SL	SX6 南土中	

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q209	尖頭器	69	2.3	1.0	13.6	頁岩	両面押圧剝離	表土	
Q210	剥片	65	2.9	1.0	15.8	頁岩	細長剥片 背面に前段階の剝離面	S195 南土中	
Q211	石器	22	1.5	0.3	0.8	チャート	両面押圧剝離	S165 南土中	
Q208	砾石	(55)	48	3.2	(101.0)	砂岩	筋状石 細面3面	S153 南土中	
Q212	原石	9.3	9.4	3.3	415.4	滑石	剝離痕	表揮	
Q213	勾玉	22	(1.3)	0.2	(0.7)	滑石	全面研磨 一方向からの穿孔	表揮	
Q214	円板	28	2.9	0.5	7.2	滑石	形割削痕	S105 南土中	

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
B1	不明 骨角製品	43	10	0.6	1.7	牛角カ	全面研磨し上部にくびれ作出 頂部平坦 背面やや反り 材質の筋状の溝が通す 角基部付近を切り出しか	S1141 南土中	

第4節 まとめ

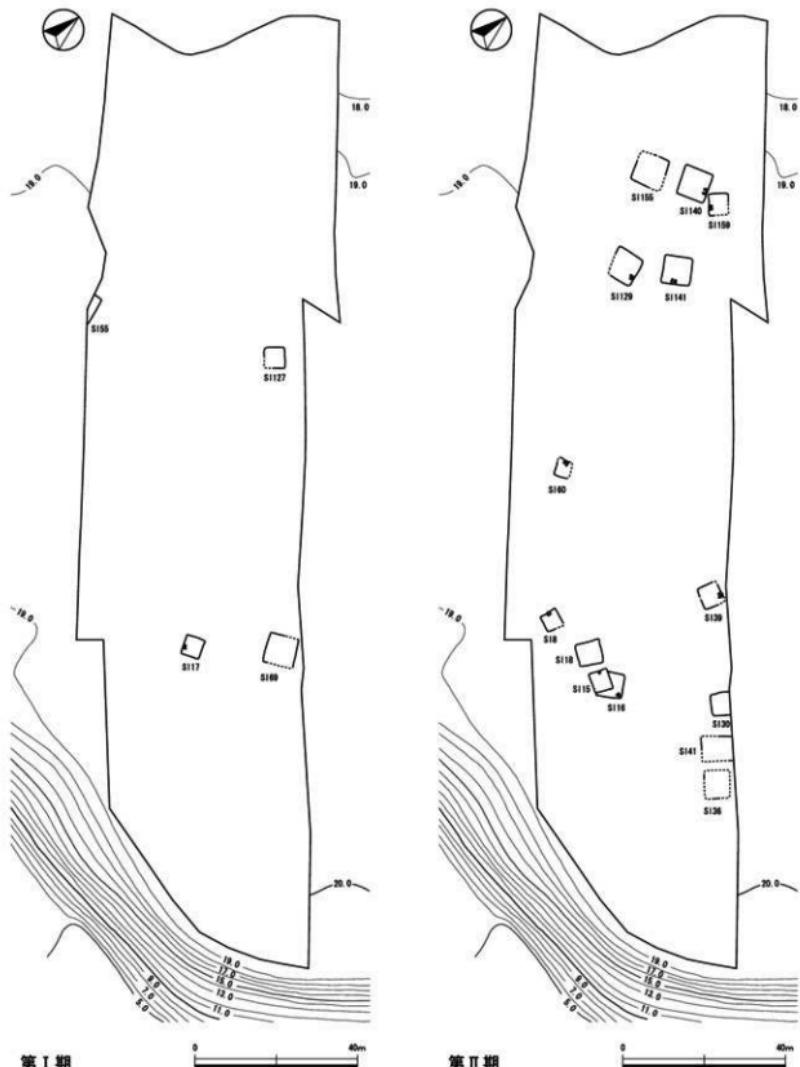
当遺跡からは、弥生時代の住居跡3軒、土坑1基、古墳時代の住居跡146軒、土坑8基、堅穴建物跡6棟、平安時代の住居跡2軒、土坑1基、中世の掘立柱建物跡1棟、時期不明の溝跡19条、土坑90基が確認されている。ここでは、竈の初現である5世紀中葉から6世紀末葉までの集落変遷とともに、住居内施設の特徴や確認された堅穴建物跡もふまえ、周辺地域で確認されている古墳時代中・後期の集落遺跡との比較をおこないたい。なお、竈の付設される方向を4方向とし、N-45°-E-N-45°-Wを北側、N-46°-135°-Eを東側、N-46°-135°-Wを西側、N-136°-E-N-136°-Wを南側として記述する。

1 住居跡の分布と住居内施設

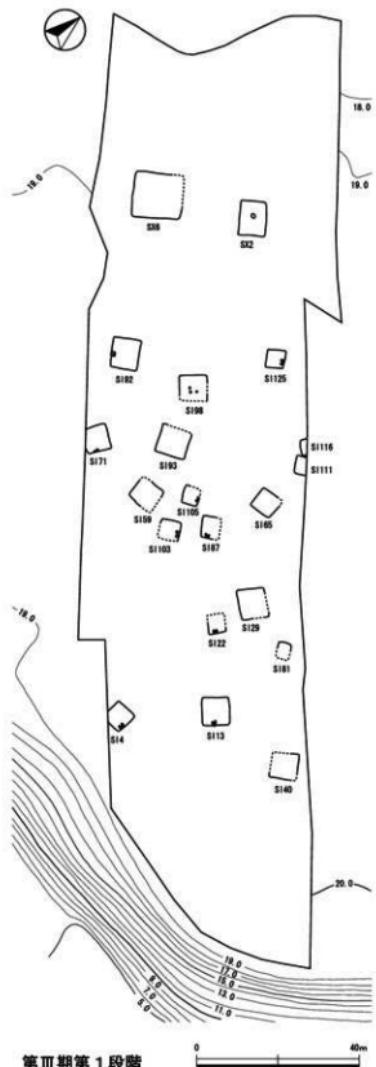
まず、当遺跡における集落変遷と各期における住居内施設の特徴について触れておきたい。なお、時期は第Ⅰ期では須恵器が出土していないため、土師器によって時期を決定している。第Ⅱ期は陶邑編年のTK23型式併行期、第Ⅲ期第1・2段階はTK47型式併行期にあたり、重複関係から1・2段階の細分をしている。第Ⅳ期はMT15型式併行期、第Ⅴ期はTK10型式併行期、第Ⅵ期はTK43型式併行期、第Ⅶ期はTK209型式併行期とする。

○第Ⅰ期（第330図）

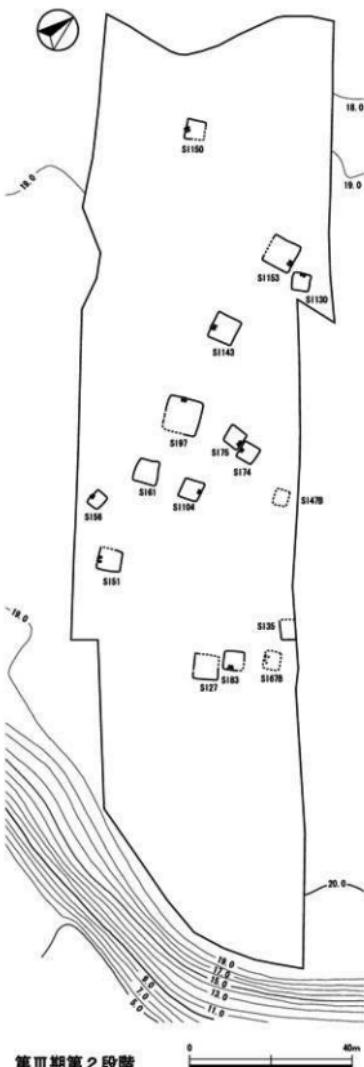
第17・55・69・127号住居跡の4軒が該当し、土器の様相から5世紀中葉に比定できる。竈は、第17号住居跡の1軒のみ確認できた。西側に付設されており、煙道部は壁外まで掘り込まれていない初期竈の様相を呈している。貯蔵穴は、南側に付設されている。住居跡は、調査区の中央部に確認できる。

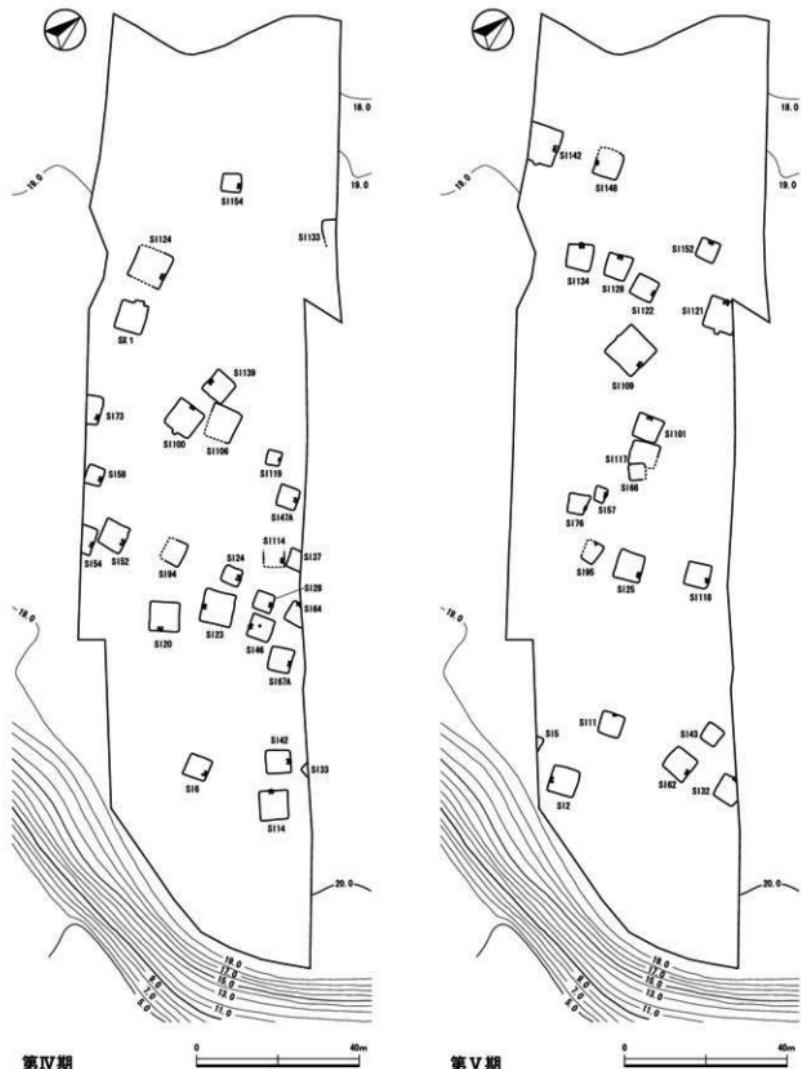


第Ⅰ期
第330図 住居跡分布図(1)



第331図 住居跡分布図(2)





第332図 住居跡分布図(3)

○第Ⅱ期（第330図）

第8・15・16・18・30・36・39・41・60・129・140・141・155・159号住居跡の14軒が該当し、土器の様相から5世紀後葉に比定できる。竈が確認できたのは10軒で、東側が4軒、西側が2軒、南側が2軒、北側が2軒と、東側を意識して付設している傾向がみられる。第16号住居跡は他の住居跡とは違い、東コーナー部に竈が付設されている。出入り口施設は、南側を意識して付設され、貯蔵穴は、南・東側に竈を付設している場合は竈の右側に付設されている。住居跡は、調査区の中央部を空間部として、北西部と南東部にわかれていると推測される。

○第Ⅲ期第1段階（第331図）

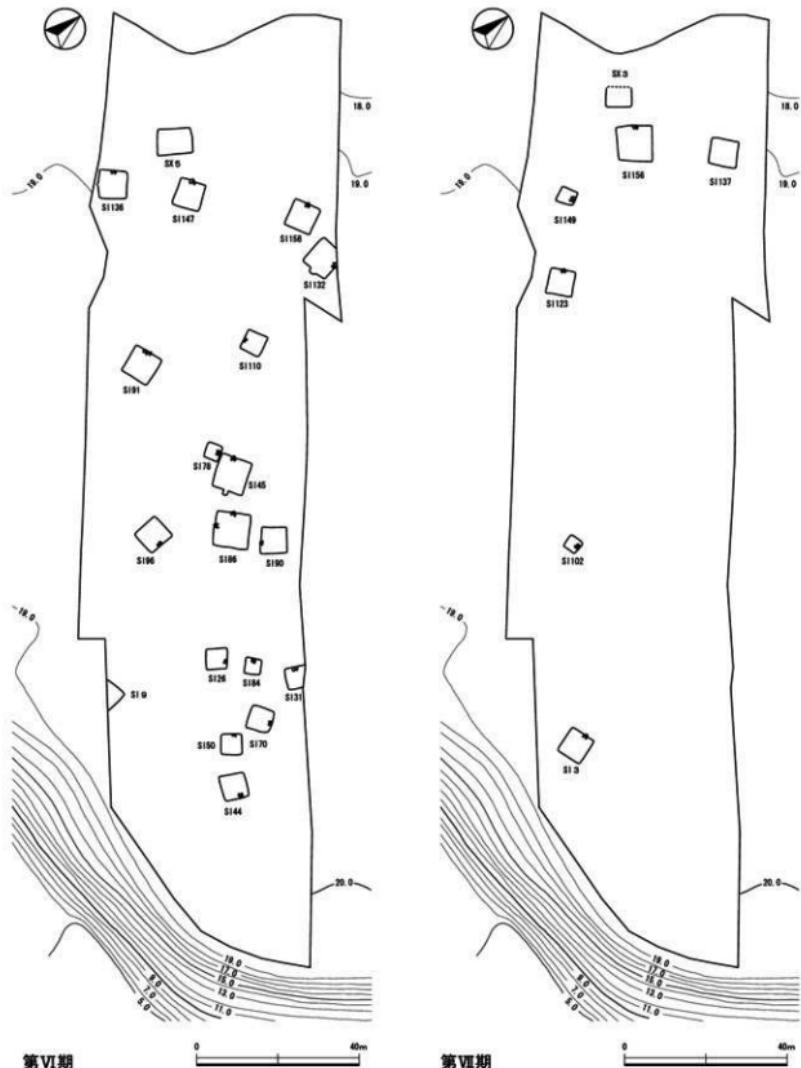
第4・13・22・29・40・59・65・71・81・87・92・93・98・103・105・111・116・125号住居跡の18軒と第2・6号堅穴建物跡の2棟が該当し、土器の様相から5世紀末葉に比定できる。竈は10軒で確認できた。この時期まで炉は残るが、重複により欠損していると考えられるものも含めて、竈が付設されはじめる。炉を有する住居跡は2軒で、竈は東側が8軒、西側が1軒、南側が1軒と、Ⅱ期と同じく東側を意識して付設している傾向がみられる。竈の作り替えが行われている住居跡は、第71・92号住居跡で確認できた。第71号住居跡は、南側から東側、第92号住居跡は西側で同方位へ作り替えられている。貯蔵穴と出入り口施設の付設位置は、ほぼ南側に統一されているが、出入り口施設のみが竈の対面に付設されているものも見られる。住居跡は、調査区の北西部から南東部にかけて拡がっている。

○第Ⅲ期第2段階（第331図）

第27・35・47B・51・56・61・67B・74・75・83・97・104・130・143・150・153号住居跡の16軒が該当し、土器の様相から6世紀初頭に比定できる。竈は13軒で確認できた。この時期には、確認できた範囲では、全ての住居跡で竈が付設されている。竈が付設される方位は、東側が3軒、西側が7軒、北側が2軒、南側が1軒を数える。第Ⅱ期、第Ⅲ期第1段階と違い、西側に付設される軒数が増加し、東側に付設される軒数が減少している。竈を作り替えている住居跡は、第75号住居跡で、西側から南側に作り替えられている。貯蔵穴と出入り口施設は、第51号住居跡を除き南側に規格性を持って付設されている。北側に竈が付設されている第97・130号住居跡では、貯蔵穴が対面の左側に付設されている。南側に竈が付設されている第83号住居跡では、貯蔵穴と出入り口施設が西側に付設されている。住居跡は、調査区の中央部に拡がっている。

○第Ⅳ期（第332図）

第6・14・20・23・24・28・33・37・42・46・47A・52・54・58・64・67A・73・94・100・106・114・119・124・133・139・154号住居跡の26軒と第1号堅穴建物跡の1棟が該当し、土器の様相から6世紀前葉に比定できる。竈は、22軒の住居跡で確認できた。竈が付設される方位は、東側が13軒、西側が4軒、北側が5軒と第Ⅱ期、第Ⅲ期第1段階とほぼ同じ傾向を示し、東側に付設されている住居跡が多数で、西側と北側がほぼ同数である。この時期も東側を意識した竈の付設傾向が窺える。竈の作り替えが行われている住居跡は、第23・100・124・139号住居跡で、第23・100号住居跡は北側で同方位、第124号住居跡は西側から東側、第139号住居跡は北側から西側へ作り替えられている。また、第46号住居跡では、炉と竈が併設されている。貯蔵穴と出入り口施設は、竈が東・西側に付設されている住居跡では、出入り口施設のみが竈の対面にくるものも見られるが、ほぼ南側に規格性を持って付設され、北側に竈が付設されている第42・114号住居では、どちらも貯蔵穴が竈の右側、出入り口施設は南側に付設されている。また、第100号住居跡のような張り出し施設を持つ住居跡が1軒のみ確認できる。調査区の中央部から南東部に密集して拡がっている。



第333図 住居跡分布図(4)

○第V期（第332図）

第2・5・11・25・32・43・57・62・66・76・95・101・109・117・118・121・122・128・134・142・148・152号住居跡の22軒が該当し、時期は土器の様相から6世紀中葉に比定できる。竈は20軒で確認できた。竈が付設された方位は、東側が9軒、西側が3軒、北側が8軒と、東側と北側がほぼ同数である。第V期に比べ、北側へ付設されている住居跡が増え始めている。竈の作り替えは、第109・118・122・128・142号住居跡で確認できた。第109・118は西側から東側、第122号住居跡は北側から東側、第128号住居跡は東側から北側、第142号住居跡は東側で同方位、貯蔵穴と出入り口施設は、ほぼ南側を意識して付設されている。張り出し施設を持つ住居形態は、第121・142号住居跡の2軒が確認できる。住居跡は、第V期とは変わり、調査区の南東部にも拡がっているが、中央部から北西部に住居跡が移動している。特に、調査区北西部の住居跡は大形のもので、南東部に確認できる住居跡は北西部のものと比べ、小規模なものである。重複する住居跡は時期差が殆どみられないことから、極めて近い時期に建てられているものと推測される。

○第VI期（第333図）

第9・26・31・44・45・50・70・78・84・86・90・91・96・110・132・136・147・158号住居跡の18軒と第5号堅穴建物跡の1棟が該当し、時期は土器の様相から6世紀後葉に比定できる。竈は第5号堅穴建物跡を除く住居跡で確認できた。竈が付設されている方位は、東側が5軒、西側が7軒、北側が6軒と東・西・北側とほぼ同数を数える。竈の作り替えは、第86・91・132・136号住居跡で確認できた。第86号住居跡は北側から西側、第91号住居跡は北側で同方位、第132号住居跡は北側から東側、第136号住居跡は南側から西側へ作り替えられている。貯蔵穴は、竈が北側および西側に付設されている住居跡では、出入り口が対面、貯蔵穴が竈の脇に付設されており、東側に竈を付設している住居跡では、貯蔵穴・出入り口施設がともに南側に規格性を持って付設されている。張り出し施設を持つ住居形態は、第45・132号住居跡の2軒が確認できる。住居跡は、まばらながら調査区全域に拡がり、大形の住居跡は第45・86号住居跡である。

○第VII期（第333図）

第3・102・123・137・149・156号住居跡の6軒と第3号堅穴建物跡の1棟が該当し、時期は土器の様相から、6世紀末葉に比定できる。竈は第3号堅穴建物跡を除く住居跡で確認できた。竈が付設される方位は、東側が3軒、西側が1軒、北側が2軒である。この時期になると住居跡が6軒と減少していることから、当時期には集落は衰退していると考えられる。竈の作り替えは、第3号住居跡のみで確認でき、北の同方位に作り替えられている。この時期になると、貯蔵穴は竈の右側に付設され、出入り口施設は、対面に規格性を持って付設されている。住居跡は調査区の中央部を空間部として北西部と南東部に分かれ、第II期と同じような拡がりをみせている。

当遺跡の集落は、5世紀後葉では調査区の中央部に空間をもち、北西部と南東部に分かれて拡がり、5世紀末葉から次第に台地縁辺部にも拡がりはじめる傾向が見られる。竈は、5世紀中葉の早い段階で導入され、5世紀末葉まで炉が並行して使用されているが、竈が主体となっているようである。5世紀末葉になると住居跡は小野川に近い台地縁辺部から全域に拡がり、6世紀初頭になると竈が完全に普及している。集落は6世紀前葉まで同じような拡がりが見られ、6世紀中葉になると縁辺部まで拡がっていた集落が次第に内地へ移動はじめ、6世紀前葉に最盛期を迎える。6世紀中葉から次第に住居軒数が減少し、6世紀末葉には衰退していく傾向が見られる。このことから、集落は5世紀末葉から6世紀前葉にかけて最盛期をむかえ、6世紀中葉から次第に衰退はじめていることがわかる。

竈は、当遺跡の周辺遺跡よりも一番早い段階で導入されている。第II期では東側に付設している住居跡が

多く、第Ⅲ期では、第2段階で西側に竈を付設する住居跡が増加している。北・南側にも若干みられるものの、第Ⅱ・Ⅲ期を通して東および西側を意識して付設されている傾向が強い。第Ⅳ期では東側に付設する住居跡が圧倒的に多く、西側が減少し、北側が若干ながら増加している。第Ⅴ期においても同様な傾向が見られ、VI期になると北側・東側・西側がほぼ同数である。第Ⅶ期になると衰退しているが、VII期と同じような傾向が窺える。

出入り口施設と貯蔵穴は、小野川に臨む南側にはほぼ規格性をもって付設されている。出入り口施設・貯蔵穴を南側に付設し、竈は各方面に付設していた様相がみられる。また、竈の作り替えを行っている住居跡が多く見られ、竈の作り替えが行われると共に、貯蔵穴も同時に付設し直されている。南側に付設されていることに変わりは無いが、西側に竈を作り替える時には、竈に向かって左側、東側に竈を作り替える時には、竈に向かって右側に付設し直している。古い貯蔵穴は、ただ埋め戻されているものもあるが、当遺跡においても大形の住居跡である第109号住居跡の古い貯蔵穴だけは、粘土ブロックと暗褐色土で版築状に埋め戻され、引き続き住居を使用するための床面の沈下に対応しているものと考えられるものもある。

当遺跡の特徴としては、石製品の工房跡とみられる堅穴建物跡以外に、第1号堅穴建物跡が確認できる。当遺構は、住居から工房へ使用用途が変わっているものと推測される。東壁に煙道部の掘り込みだけが確認でき、火床面や竈の構築材である砂粒や粘土ブロックなどは床面で確認できなかった。北西壁に張り出し部が確認でき、その前面で、炉と近接して炭化粒子・粘土塊が確認できたことから、張り出し部との関連性が窺われる。また、粘土塊の周辺から鉄滓が多く出土し、鉄製品を研いだとみられる砥石が出土していることから、鍛冶工房跡の可能性がある。周辺地域での鍛冶工房跡の可能性がある遺構が確認されている遺跡は、幸田遺跡と薬師入遺跡で確認されているが、時期は当遺跡よりも古いものである。

2 周辺遺跡の集落変遷と竈の導入時期

ここでは、小野川・乙戸川流域における堂ノ上遺跡の周辺遺跡と、阿見町南部・牛久市東部における5世紀中葉から6世紀末葉で集落が確認された遺跡の集落変遷と、竈の導入時期・住居内施設の特徴について当遺跡との比較をしていきたい。なお、薬師入遺跡とナギ山遺跡については、『薬師入遺跡2』のまとめにおいてひとつの集落として取り扱われているため、ここでも1つの集落として扱うこととする。

○池平遺跡¹⁾

当該時期の住居跡は、5世紀後半が12軒、6世紀前半が14軒、6世紀後半が10軒である。5世紀中葉から徐々に集落が形成され、5世紀後葉から6世紀前半段階で最盛期を迎えている。5世紀後半から竈が付設され、5世紀後半の竈の付設方向は、北側が4軒で規格性がみられる。6世紀後半の竈の付設方向は、北側が5軒で、貯蔵穴は確認できた3軒とも南側に付設されている。6世紀後半の竈の付設方向は、北側が4軒、西側が2軒である。

○秋平遺跡²⁾

当該時期の住居跡は、17軒確認されている。6世紀前半に集落が形成されはじめ、6世紀後半段階に住居数が増加している。竈は、北側に付設されるといった規格性が見られる。第33号住居跡のみ西に竈が付設されている。貯蔵穴と出入り口施設が確認されている住居跡は少ないが、南側に付設されているものが確認されている。

○二の宮貝塚³⁾

当該時期の住居跡は、5軒確認されている。竈の付設方向は、東側が2軒、西側が2軒、北側が1軒で、出入り口施設は明確ではないが、貯蔵穴は規格性をもって南側に付設されている。

○大日山古墳群⁴⁾

当該時期の住居跡は、5世紀中葉が1軒、5世紀末から6世紀初頭が1軒、6世紀中頃から後半が2軒確認されている。竈は6世紀中頃に付設されているが、5世紀末から6世紀初頭の住居跡は炉のみで、竈は付設されていない。竈の付設方向は、北側が1軒、西側が1軒である。

○恩川遺跡⁵⁾

当該時期の住居跡は、6世紀前葉から6世紀後半の10軒が確認されている。竈は、6世紀前葉では1軒が南側で確認でき、貯蔵穴と出入り口施設は確認されていない。6世紀前半では東側で1軒が確認でき、貯蔵穴は南側で出入り口施設は確認されていない。6世紀中頃から後半にかけての竈の付設方向は、西側が4軒、北側が4軒で、出入り口施設は、東側が1軒、南側が1軒、貯蔵穴は北側に付設されているものが2軒、南側に付設されているものが2軒と方位は様々で、規格性がみられない。出入り口施設は、確認されているもののが少なく、東側が1軒、南側が1軒のみである。

○櫛の台遺跡⁶⁾

当該時期の住居跡は8軒で、5世紀後葉が2軒、6世紀初頭が6軒である。住居内施設は、5世紀後葉の第8号住居跡で馬蹄状の高まりを持つ出入り口施設が確認されている。6世紀初頭の住居跡での竈の付設方向は、東側が1軒・西側が3軒・北側が2軒で、貯蔵穴・出入り口施設は南側で統一されている。出入り口施設には、馬蹄状の高まりが共通して見られ、北側に竈を付設している住居跡では、貯蔵穴が対面の左側にしか付設されないといった共通性が見られる。第4号住居跡では、竈が東側から西側に作り替えられ、貯蔵穴も当遺跡と同じように付設し直している。

○幸田遺跡⁷⁾

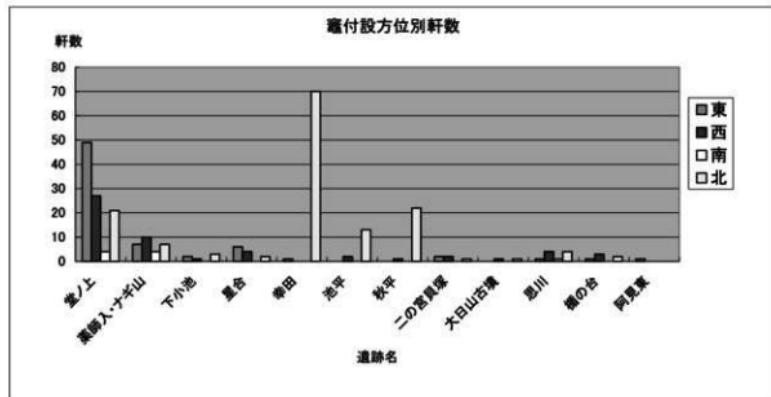
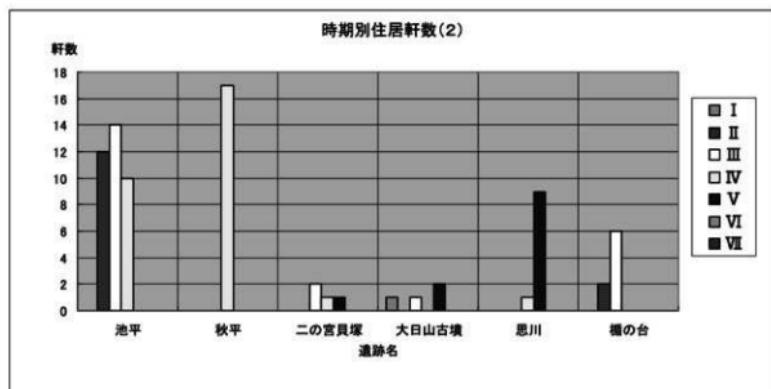
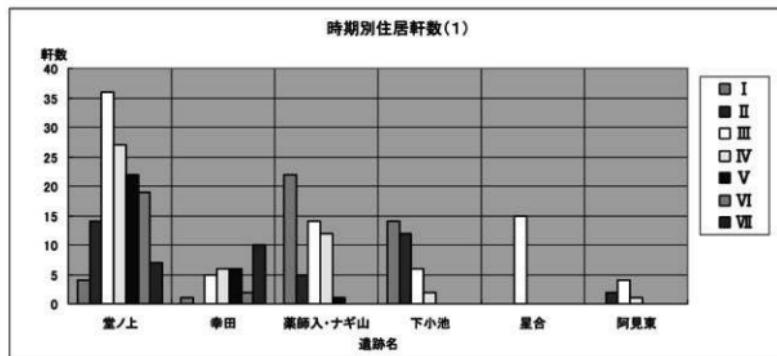
当該時期の住居跡は、61軒が確認されている。竈は6世紀初頭～6世紀前葉に付設されている。竈は北側に付設される住居跡が多く、貯蔵穴が付設されるものと、付設されないものに分かれており、北側の竈の右側もしくは対面中央に付設されている。第96号住居跡だけが東側に竈が付設され、南側に貯蔵穴を付設している。

○星合遺跡⁸⁾

当該時期の住居跡は15軒で、5世紀末葉が13軒、6世紀初頭が2軒である。5世紀末葉の竈は、6軒が東側、4軒が西側に付設されている。貯蔵穴は規格性をもって南側に付設され、出入り口は第4・22号住居跡が西側に確認されている以外は南側に統一されている。この時期まで炉と竈が並行して使用されている。6世紀初頭の住居跡は竈が北側に統一され、貯蔵穴・出入り口施設は変わらず南側に統一されている。第13号住居跡では、竈の作り替えが行われており、西側から北側に作り替えられているが、貯蔵穴は作り替えていない。

○阿見東遺跡⁹⁾

当該時期の住居跡は、10軒である。このうち、竈が確認できるのは第2号住居跡のみである。時期は6世紀前葉で、これ以前の住居跡では竈は付設されていない。竈は東側に付設され、貯蔵穴は、竈に対して右の南側に付設されている。また、遺物は双孔円板と共に上径8.6cm、下径2.8cmの筋錘車の未成品が出土している。当遺跡で出土した大形の筋錘車とほぼ同じ大きさのものである。



○ヤツノ上遺跡¹⁰⁾

当該時期の住居跡は、29軒である。5世紀後葉から6世紀初頭に集落が形成され、竈は6世紀初頭になっても付設されず、貯蔵穴は東側、出入り口施設は南側に付設されている住居跡が多い。5世紀末から6世紀初頭に集落が最盛期を迎えている。

○実穀寺子遺跡¹¹⁾

当該時期の住居跡は、48軒で、5世紀中葉から後葉にかけての集落跡が確認されている。竈は付設されておらず、炉のみの住居跡である。石製品は、勾玉・臼玉・有孔円板・勾玉模造品・剣形模造品が出土している。敲石・砥石が確認されるが、剥片は確認できない。

○下小池遺跡¹²⁾

当該時期の住居跡は34軒で、5世紀中葉が14軒、5世紀後葉が12軒、5世紀末葉が6軒、6世紀前葉が2軒である。5世紀中葉から6世紀初頭にかけて集落が盛榮したのち、平安時代に再び住居が出現するまで断絶している。竈は5世紀末から6世紀初頭に導入され、この時期の竈の付設方向は、北側が2軒、東側が2軒、西側が1軒で、6世紀前葉の竈は北側で壁に接しないものが1軒確認されている。

○薬師入¹³⁾・ナギ山遺跡¹⁴⁾

当該時期の住居跡は54軒で、5世紀中葉が22軒、5世紀後葉が5軒、5世紀末から6世紀初頭が14軒、6世紀前葉が12軒、6世紀中葉が1軒である。竈は5世紀後葉から付設されている。5世紀後葉の竈の付設方向は、東側が3軒で、貯蔵穴と出入り口施設は南側に統一されている。5世紀末から6世紀初頭の竈の付設方向は、北側が3軒、東側が2軒、南側が4軒、西側が3軒で、貯蔵穴と出入り口施設は南側に統一されている。6世紀前葉の竈の付設方向は、北側が4軒、東側が2軒、西側が6軒で、貯蔵穴と出入り口施設は南側に統一されている。6世紀中葉の竈は1軒のみで、西側に付設され、貯蔵穴と出入り口施設は南側に付設されている。竈は北側意識ではなく東および西側に付設されているものが多く、貯蔵穴と出入り口施設は、南側に統一して付設されたといった規格性がみられる。

当遺跡を含めた小野川・乙戸川流域における前述した集落において、竈は当遺跡で確認されている5世紀中葉を初現として導入され始めている。しかし、竈が付設されている住居跡が多く確認されるのは5世紀後葉になつてからである。

星合遺跡では、5世紀末に竈が導入され、東・西側に竈を付設し、出入り口施設と貯蔵穴を南側に付設するといった当遺跡と同じ規格性が見られる。しかし、6世紀初頭になると、北側に竈を付設し、貯蔵穴と出入り口施設は南側に付設するといった形態になり、つくは周辺の遺跡と同様な住居形態を示している。

ヤツノ上遺跡のように6世紀初頭になつても竈が導入されていない集落も確認できる。樋の台遺跡では、6世紀初頭に竈が導入され、北側に竈を付設する住居跡では、貯蔵穴は竈が付設される壁の対面の左側に付設された住居跡以外に、竈の作り替えが行われている住居跡では、貯蔵穴も作り替えられているものも確認されている。

当遺跡と同様の住居形態を示す遺跡としては、ナギ山遺跡があげられる。北側に竈が定着せず、東・西側を意識した付設をおこない、貯蔵穴と出入り口施設が南側を意識して付設するといった規格性を持っていることから、当遺跡との関連性が窺われるものである。

いずれの集落も中期から後期にかけて出現・最盛期をむかえている。その後も集落が続く遺跡もみられるが、ほぼ6世紀前葉に衰退していく傾向がみられる。また、後述するようにそれぞれの遺跡において石製模造品を

多く出土しており、石製模造品を使用した祭祀が盛んに行われていたものとみられる。集落の展開と衰退の時期は、石製品の隆盛時期と重なるといった特徴がみられ、石製模造品祭祀が廃れていく時期と同時に衰退している集落が多く見られる。

また、千葉県房総域（君津・市原市・千葉・印旛・山武・香取地域）における壺の出現は、TK208・TK23型式の時期からで、5世紀後葉に取り入れられ、その後、急速に普及しているものと指摘されている。また、導入期の壺が付設される方位は、全体の45%が東側に付設されている。しかし、君津地域のみが北東方位への設置が最も多いという傾向がある¹⁵⁾。

住居内施設をみると、貯蔵穴が壺に向かって右側に付設されているものが多いことから、東側の壺に対して右側、つまり南側に貯蔵穴が付設されている例が多いなど、導入期における様相は、堂ノ上遺跡と千葉県側と同じ傾向を示している。

3 石製品製作

ここでは、当遺跡で行われていた石製品製作と、小野川・乙戸川流域に見られる工房跡と指摘されている遺跡との関係について考察を行うとともに、県南における石製模造品製作の展開と祭祀形態の違い、材料となる石材の流通について見ていく。

(i) 当遺跡の石製品製作について

当遺跡では、滑石を主体とした製作が行われている。その他の石材としては、グリーンタフ製の管玉と剥片が出土していることから同石材による製作も行われていたものと推測される。その他、瑪瑙製の勾玉、碧玉製とみられる管玉、珪化木製とみられる棗玉が出土しているが、剥片や石核が出土していないため、これらの石材による製作は行われていなかったものと推測される。

石製品の製作工房跡の可能性がある堅穴建物跡は2棟確認されている。時期は、第2号堅穴建物跡が第Ⅲ期第1段階、第3号堅穴建物跡が第Ⅳ期と考えられる。

第2号堅穴建物跡では、敲石とともに南東壁際の下層から床面にかけて滑石片と白玉の完成品・未成品が散在して出土している。特に南東壁際の北寄りに集中して出土していることから、中央部から南東壁際に向かって荒削・形削作業が行われていたと推測される。また、大量の剥片に混じって白玉の未完成品や完成品などが出土していることから、主に白玉の製作を行っていたと考えられる。

第3号堅穴建物跡では、敲石・砥石とともに、劔鍤車の未完成品と双孔円板が出土している。砥石は、筋砥石である。確認できた範囲では、滑石片は確認できなかったが、片付けをしている可能性も推測される。敲石とともに砥石や劔鍤車の形削段階の未完成品が出土している。工作ピットと見られるものは確認できなかったが、敲石・砥石・劔鍤車の未完成品が床面から出土していることから、石製模造品の製作工房跡と考えられる。

5世紀後葉から砥石とともに石製模造品が出土する住居跡が確認され、5世紀末葉の第93号住居跡では、子持勾玉の形削段階のものとともに砥石が出土しているほか、同時期の第125号住居跡からは、滑石の原石が出土している。他の住居跡からも白玉・有孔円板・劍形模造品などの完成品・未完成品が多数出土していることから、5世紀後葉から集落内の石製品製作が行われていたと考えられる。また、ミニチュア土器などの祭祀遺物が出土している。特に第25号住居跡からは焼土と共に管玉が数多く出土し、高杯が多数ともなって焼失した可能性があるので、石製模造品による祭祀行為も盛んに行われていたことが推測される。

5世紀末葉には、石製品工房跡とみられる第2号堅穴建物跡が確認でき、この時期から出土する石製模造品の数が増加している。祭祀行為が盛んに行われている可能性があるが、未完成品も中には含まれている。

5世紀末葉から6世紀初頭になると、砥石を伴って出土する住居跡が37軒中8軒と多い。石製品を研磨したような滑石の粉末は確認できなかったが、第65号住居跡で剣形模造品と研磨されていない有孔円板が多く出土しているといった偏った出土傾向は、仕上げ作業の研磨を各住居で行っていた可能性が考えられる。これは、臼玉や管玉といった製作の難しいものを專業集団である玉作工人が行い、有孔円板や剣形模造品等の一般集落で数多く出土する製作の割合簡単なものは、集落内の特定の住居で室内工業的に製作していたのではないかという指摘⁽⁶⁾と合致する点として興味深い。

また、6世紀代の各住居跡からも臼玉・有孔円板・剣形模造品のそれぞれ未成品とともに小形の砥石が出土する例が多く、工房跡と考えられる第3号竪穴建物跡が6世紀末葉まで機能していたことを考慮すると、当遺跡における石製模造品製作は、5世紀後葉から開始され、6世紀初頭にピークを迎え、集落が衰退しながらも6世紀末葉まで行われていたと推測される。

(2) 小野川・乙戸川流域における石製品製作工房跡と石製模造品の傾向

ここでは、小野川・乙戸川流域で工房跡と指摘されている遺構が確認された遺跡を取り上げ、当遺跡との相違性とともに、石製模造品による祭祀形態の相違性について比較してみたい。

小野川・乙戸川流域において、工房跡の可能性がある遺構が確認された遺跡は、幸田遺跡・ナギ山遺跡・立切遺跡・下小池遺跡・ヤツノ上遺跡が挙げられる。堂ノ上遺跡・幸田遺跡・立切遺跡・ナギ山遺跡を除いた石製品を多数出土する遺跡では、滑石片や未成品は確認されるものの、石核や敲石、砥石などを伴って出土している遺構は確認されず、あくまで可能性があるという程度に留まっている。

○幸田遺跡

5世紀中葉から後葉と考えられる第43号住居跡が玉作工房跡と指摘されている。滑石の石核及び勾玉・管玉・臼玉・剣形模造品の未成品が出土し、臼玉以外の未成品は数点しか確認出来ないことから、主として臼玉の製作をしていたものと考えられている。また、原石は確認されていないものの、成品に至るまでの一貫した工程を追うことが可能な資料となっている。他に6世紀初頭から前葉の第103号住居跡、5世紀末から6世紀初頭の第107号住居跡が工房跡の可能性があるものと指摘されている。

○立切遺跡⁽⁷⁾

古墳時代中期から後期の第6調査区の第7・8号住居跡、第7調査区の第9・17・23号住居跡が玉作工房跡と推定され、多数の原石と共に滑石製の模造品、敲石が出土していることから、荒削作業が行われていたものと考えられている。また、第19号住居跡では研磨前の臼玉の未成品が出土していることから、最終段階の調整も集落内で行われた可能性が高い。未成品としては、臼玉のはか、勾玉模造品・剣形模造品・紡錘車などが出土している。このほかに滑石の石核を出土した住居跡も多く、幸田遺跡と共に中核的な地位を占めていたものと想定される。

○薬師入遺跡

5世紀前葉の第80号住居跡から、臼玉・臼玉未成品・有孔円板・有孔円板未成品・剣形模造品のはか、紡錘車・滑石剥片（荒削品・形割品・剥片）が出土しているが、石製品を製作していた可能性は低いという見解がなされている。

○ナギ山遺跡

5世紀中葉の第9・19・23号住居跡が工房跡と推定されている。原石は出土しないものの、第9号住居跡からは有孔円板・剣形模造品の未成品、第23号住居跡からは臼玉の未成品が荒削・形割の破片と共に出土し、第19号住居跡からも臼玉の未成品が出土していることから、臼玉を中心として各種の石製模造品が一貫して

製作されていたものと考えられる。

○下小池遺跡

5世紀後葉の第57号住居跡が工房跡と指摘されている。43点の臼玉と共に123点の剥片が出土している。臼玉の多くは東壁寄りの床面、剥片の多くが東壁寄りの覆土中層から出土していることから、石製品の工房もしくは近くに工房跡があった可能性が指摘されている。他に、5世紀中葉の第63号住居跡で勾玉未成品・滑石の原石が出土し、5世紀末葉から6世紀初頭の第13号土坑から臼玉と共に直弧文が線刻された紡錘車が出土している。5世紀後葉の第35号土坑からは臼玉・有孔円板・剣形模造品のほか、剥片が多数出土していることから、工房に関わる施設であった可能性があると指摘されている。

○ヤツノ上遺跡

5世紀後葉と考えられる第29号住居跡の床面から臼玉が115点出土し、細片などが確認されることから、工房跡の可能性が指摘されている。石製品では、勾玉・臼玉・紡錘車が出土しているが、剣形模造品は確認されていない。

小野川流域における工房跡の初現は、5世紀中葉にみられる。この時期の工房跡は幸田遺跡とナギ山遺跡で確認されているが、当遺跡の5世紀中葉の遺構からも模造品と砥石が出土していることから、この時期にはそれらの遺跡で製作が行われていたものと考えられる。5世紀後葉になると、下小池・ヤツノ上遺跡で工房跡が出現し、5世紀末から6世紀初頭に立切遺跡で出現する。これらの工房跡では、臼玉の製作を主体としながら、紡錘車・勾玉模造品・有孔円板・剣形模造品といった各種の石製品の製作が行われていたものと考えられる。しかし、阿見町南部・牛久市東部のナギ山・下小池・ヤツノ遺跡では稻敷地域とは違い、剣形模造品の出土は少ない。

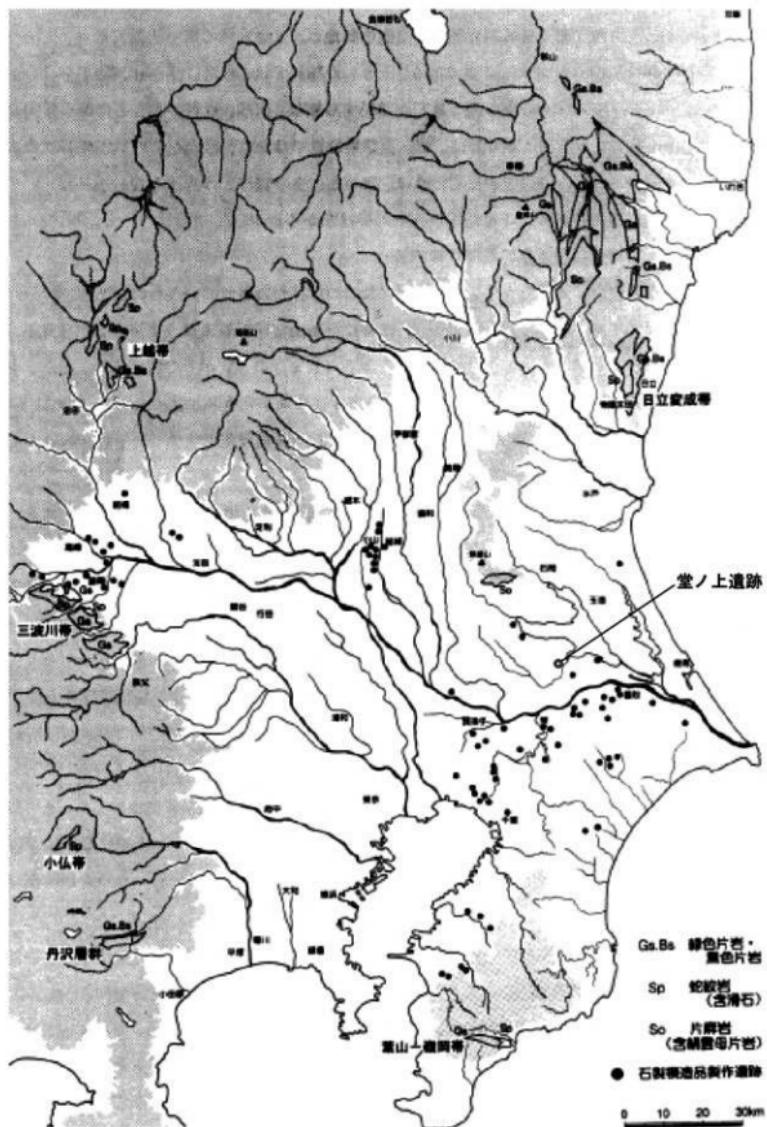
当遺跡を含めた幸田・立切・桑山の台遺跡が稻敷市周辺の石製模造品製作の拠点的集落として機能していたものと考えられ、ナギ山・下小池・ヤツノ遺跡が阿見町南部・牛久市東部地域における石製模造品製作の拠点的集落として機能していたものと推測される。

阿見町南部・牛久市東部地域における石製模造品の歴期は、その出土数の比率から、中期にあることが指摘されている¹⁸⁾。阿見町南部・牛久市東部における石製品の出土の割合は、臼玉の出土数が多く、次いで有孔円板が多いが、剣形模造品・勾玉模造品の割合が少ない。

この点をふまえて祭祀形態をみると、当地域では勾玉・臼玉・有孔円板・剉形模造品と全ての種類が出土しているが、臼玉の出土割合が少なく、勾玉模造品・有孔円板・剉形模造品の出土数が多い。この事からも、祭祀行為の主体となっていた石製品は、勾玉模造品・有孔円板・剉形模造品ということが推測される。

阿見町南部・牛久市東部地域では、剉形模造品が少数で、臼玉・有孔円板の出土傾向が高いことが指摘¹⁹⁾されている。牛久市北部地域では、同じく臼玉の出土数が多いが、剉形模造品の出土が少ない、有孔円板の割合が高い、勾玉模造品の割合が低いといった違いが見られる。

それぞれの地域ごとに模造品の出土数に偏りが見られることは、地域毎に祭祀形態が異なっていたものとみられる。稻敷市周辺は拠点となっている堂ノ上・幸田・立切遺跡で行い、阿見町南部・牛久市東部は、拠点となっているナギ山・下小池・ヤツノ上遺跡で行うといった地域の祭祀形態とともにあって石製品の製作を行っていたものと推測される。需要・供給という面で見ると、古墳時代における豪族の支配圏の関係を含め、これらの製作遺跡の供給範囲がどの範囲まで及んでいたかということも視野にいなければならぬが、明確な判断はしがたい。また、自己生産・自己消費・未成品による祭祀行為の側面も考慮しなければならない。



第334図 石材産出地と石製模造品製作遺跡（註22文献より改変掲載）

これらの事象から、小野川・乙戸川流域の石製模造品の製作遺跡が、白玉を主体とした製作を行っていた背景には、白玉主体の祭祀行為であったことが関わっているものと思われる。阿見町南部・牛久市東部地域に見られる石製模造品を多く出土する遺跡を見ても、白玉を主体とした出土傾向が強い。しかし、稲敷地域の各遺跡で出土する白玉の出土傾向は低く、勾玉模造品や有孔円板、劍形模造品の出土傾向が高いことから、堂ノ上・幸田・立切遺跡で製作された白玉は、消費地へ供給されていたという側面が考えられる。また、当遺跡では、子持勾玉の未成品と完成品が出土し、瑪瑙製の勾玉・碧玉製とみられる大形の管玉が出土しているほか、鈎鍤車の出土数も多く、直弧文・同心円文・鋸歯文などの線刻された鈎鍤車や、実用的に使用されていたものとは考えにくい大形の鈎鍤車が第5号竪穴建物跡から出土していることから、他の遺跡にみられる製作工房跡とは違った特徴を示す模造品の製作が行われている。

(3) 県南における石製品の製作と滑石石材の流通

これまで、当遺跡における石製模造品の製作工房と小野川・乙戸川流域に見られる工房跡の石製模造品に関して述べてきた。ここで石製模造品の材料となる滑石の流通に関してふれていきたい。

小野川流域における石製模造品の製作は、5世紀中葉から当遺跡・幸田遺跡・ナギ山遺跡で開始され、5世紀後葉になると、下小池・ヤツノ上遺跡、5世紀末から6世紀初頭に立切遺跡で製作がみられる。5世紀中葉から石製模造品の工房跡が展開されていることは、前期に生産が開始された鳥山遺跡の終焉と共に工房跡が増加する傾向があるという指摘²⁰⁾と一致している。

この時期に工房跡が展開されはじめた背景には、畿内政権の東国経営の一端として、この時期に群馬からの石材供給と、下総からの生産集団の配置が実施されている²¹⁾という見解とも一致しており、ナギ山遺跡で出土した滑石が三波帶で採取された石材であることが判明していることから、政治的背景が大きく関わっていることは間違いないと推測される。

これらの工房跡は、特に稲敷市周辺と千葉県との県境に集中して分布している。茨城で滑石が産出する地域は、常陸太田市周辺の「日立変成帯」で、原石産地から離れており、模造品の消費地に近いところに製作の場をおいているものと考えられる。南岸の下総台地側では、玉作・石製模造品の工房跡が点在し、旧香取の海を中心に広い範囲で生産が行われ、原石となる滑石は、石棺材として使用された雲母片岩の分布や石枕の分布と重複していることから、利根川を基幹とした河川交通が想定され、生産地域のほとんどが、旧利根川・旧鬼怒川水系に連絡する小河川沿いに営まれていることが多く、旧利根川水系から、旧鬼怒川水系へは陸路の運搬が想定されている²²⁾。

製作遺跡内で未完成品と敲石・砥石などが出土地ながら滑石の原石が確認できない遺跡があるという点は、石材のある間は生産を続け、生産量を維持するために、少しでも成形可能な剥片であれば、すべて利用するようになり、成形の異形化・仕上げの省略・破損もしくは未完成品の流通の事態を招く²³⁾という指摘と一致し、当遺跡からも、有孔円板を利用して勾玉を製作している例が確認できる。

当遺跡では、珪化木製の震玉も出土している。珪化木で製作された震玉は、千葉県南羽鳥遺跡²⁴⁾でも出土している。南羽鳥遺跡の震玉は、6世紀前葉のもので、当遺跡で出土した第5号住居跡も6世紀前葉と同時期のものである。珪化木の剥片は、第74号住居跡の覆土中から5点の剥片が出土していることから、これらの石材もしくは完成品が搬入されている可能性が高い。また、グリーンタフで作られた管玉や、剥片が出土しているが、グリーンタフ自体も当遺跡周辺で採取できるような石材ではなく、周辺地域で産出する場所は、北関東地域と丹沢山地である。主な場所は茨城県北部の大子・山方地域（久慈川・那珂川水系）、栃木県東部の鳥山・茂木地域、栃木県西部の塙原地域（那珂川水系）、宇都宮・日光地域（鬼怒川水系）、群馬県北部の赤谷川・

四万川流域、太田市付近の八王子丘陵（利根川水系）、並びに、神奈川県西部の丹沢山地、大磯地域（相模川・酒匂川水系）があげられる⁵⁵⁾。当遺跡のグリーンタフがどこから運ばれてきたか明確な判断はできないが、これらのうちのいずれかの地域から搬入されていたものと考えられる。

5世紀末葉から6世紀前葉にかけて工房跡と考えられる遺構が確認された集落で住居数が減少・消滅する傾向の背景には、常陸に前線基地を経営した畿内政権の東国経営の北進に特に常陸の石製品の生産者を同行した、という指摘⁵⁶⁾と一致していることからこののような事象が関係している可能性がある。

4 終わりに

堂ノ上遺跡は、幸田遺跡・立切遺跡と共に白玉を主体とした石製模造品の製作を行っているが、白玉の製作を行いながら、白玉の出土が少ないとすることは供給元としての性格が強いことが窺われる。石製品においても、子持勾玉の未完成品が出土するなど、他の製作遺跡とは様相が異なっている。また、ガラス小玉や碧玉製の管玉が出土していることは、この地域における中心的集落であった可能性は極めて高い。土器も、湖西・猿投・陶邑窯で焼かれたものと推測される須恵器が多く出土し、ナギ山遺跡で出土した滑石が三波帯のものであるということから、滑石などの石材と共に須恵器も水運で搬入されている可能性が考えられる。

工房跡の出現と共に竈も周辺の遺跡よりもいち早く導入され、他遺跡では6世紀初頭に竈が北側へ定着していくのに対し、当遺跡の竈は北側に定着することなく、各時代を通して東・西側を意識して付設され、一貫して貯蔵穴と出入り口施設は南側に付設するなど集落内の規格性がうかがえる。注目すべき点は、5世紀中葉の工房跡が確認されている当遺跡とナギ山遺跡では、竈の付設位置が東・西側に付設される傾向があることや、貯蔵穴と出入り口施設が南側に規格性をもって付設されるといった共通点が多いことである。

また、小野川・乙戸川流域における石製品の製作工房を含めた集落群は、石製模造品祭祀が隆盛し始める時期に形成され始め、その祭祀行為が廃れていくとのほぼ同じく集落が衰退していく傾向が見てとれる。この背景には、前述した畿内政権の東国経営も関係していると考えられる。当遺跡は6世紀末葉まで製作が行われているが、他の遺跡では例外なく、6世紀後葉になると住居数が減少している。

祭祀で使われている石製模造品の面でも、当地域と阿見町南部・牛久市東部での違いが見られ、牛久市北部とも違う祭祀形態がとられている様相がみられた。石製模造品祭祀の形態の違いは、白玉を主体とし、牛久市北部では見られない剣形模造品が阿見南部・牛久市東部で少ないながらも出土するといったことから、3つの地域性が窺えるものと推測される。当遺跡では、白玉の製作が行われていたものと考えられるが、稲敷地域では剣形模造品・勾玉・有孔円板の出土傾向が高く、白玉の出土傾向が他の模造品よりも少ない。このことは、稲敷地域で作られた白玉を消費地に供給していたと想定できる。

小野川・乙戸川という水運が容易なこの地に、当遺跡を含め、5世紀中葉から後葉にかけて石製模造品の工房跡が確認されている遺跡が多く、竈の導入時期と重なることから、竈の導入が石製模造品の製作と密接に関わっていたことが推測される。5世紀中葉に畿内政権の東国経営の開始による群馬県からの石材供給・下総からの石製模造品の生産集団の配置という指摘⁵⁷⁾の面で一致する点は注目される。

註

- 1) 大賀健・平田満男・小林園子『秋平遺跡・池平遺跡・中佐倉貝塚』佐倉地区遺跡発掘調査会 1999年7月
- 2) 註1に同じ
- 3) 鈴木美治『一般県道新川江戸崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 二の宮貝塚 大日山古墳群 忍川遺跡』『茨城県教育財团文化財調査報告書』第65集 1991年3月

- 4) 註3に同じ
- 5) 註3に同じ
- 6) 間宮正光『高野浩之『種の台古墳群 第2・3次発掘調査報告書』江戸崎町教育委員会 2001年3月
- 7) 間宮正光『幸田遺跡・幸田台遺跡 東台跡造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』幸田台遺跡発掘調査会 東村教育委員会 1995年3月
- 8) 矢ノ倉正男『寺門千勝「阿見東部工事地内埋蔵文化財調査報告書 星合遺跡 中ノ台遺跡」』茨城県教育財团文化財調査報告書第137集 1997年3月
- 9) 藤原均『阿見東遺跡第1地点調査報告書』阿見町教育委員会 1992年5月
- 10) 小高五十二『牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(1)ヤツノ上遺跡』茨城県教育財团文化財調査報告書第81集 1993年3月
- 11) 浅野和久『荒川本郷地区特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 実穀古墳群・実穀寺子遺跡1』茨城県教育財团文化財調査報告書第144集 1999年3月
- 12) 小竹茂美『鶴志田祐一・浦和敏郎「下小池遺跡 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書」』茨城県教育財团文化財調査報告書第210集 2004年3月
- 13) 柳引英樹『小林悟「薬師入遺跡2 阿見古原土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」』茨城県教育財团文化財調査報告書第296集 2008年3月
- 14) 栗田功『ナギ山遺跡2(仮称) 阿見東ICランプB区間整備事業地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財团文化財調査報告書第277集 2007年3月
- 15) 小林清隆『房総における薬師入塚の様相-薬師と貯蔵穴 その2-』『千葉県文化財センター研究紀要』24 2005年3月
- 16) 裕村宣行『茨城県の概要』『古墳時代の祭祀・祭祀関係の遺跡と遺物-』第2分冊 東日本埋蔵文化財研究会 1993年3月
- 17) 河野辰男『河野通義 玉井輝男「立切遺跡発掘調査報告書」』茨城県東村・桜川村 1988年12月
- 18) 石川義信『縄引英樹「県南地域における古墳時代の滑石製模造品について-下小池遺跡、薬師入遺跡、ナギ山遺跡の出土例から-」』『菟茨波』用井正一・齋藤弘道・佐藤正好先生還暦記念事業実行委員会 2007年2月
- 19) 註18に同じ
- 20) 藤原祐一『滑石の生産と使用をつなぐ視点』『古墳時代の滑石製品-その生産と消費-』第54回埋蔵文化財研究集会事務局 2005年9月
- 21) 註20に同じ
- 22) 註20に同じ
- 藤原祐一『剣形模造品の製作技法-下毛野地域を例にして-』『研究紀要』第4号 財團法人栃木県文化振興事業団 埋蔵文化財センター 1996年3月
- 23) 註20に同じ
- 24) 高橋誠『宇田敦司・小倉和重・松田富美子「南羽鳥遺跡群Ⅲ 成田カントリークラブゴルフ場造成地内埋蔵文化財調査報告書』『財團法人印旛都市文化財センター発掘調査報告書』第145集 1998年12月
- 25) 加藤正信・小林清隆・山口典子「生産遺跡の研究2」『千葉県文化財センター研究紀要』13 1992年3月
- 26) 註20に同じ
- 27) 註20に同じ

参考文献

- ・大川清 大門直樹『島山遺跡』土浦市教育委員会 1988年3月
- ・石川義信『後藤善行「ナギ山遺跡1 柏峯B遺跡 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書」』茨城県教育財团文化財調査報告書第233集 2005年3月
- ・古墳時代研究班(集落グループ)『茨城県内出土の「石製模造品」について』『研究ノート』8号 財團法人茨城県教育財团 1999年6月
- ・古墳時代研究班(集落グループ)『茨城県内出土の「石製模造品」について(2)』『研究ノート』9号 財團法人茨城県教育財团 2000年6月
- ・古墳時代研究班(集落グループ)『茨城県内出土の「石製模造品」について(3)-牛久市北部における石製模造品の動態』『研究ノート』10号 財團法人茨城県教育財团 2001年6月
- ・古墳時代研究班(集落グループ)『茨城県内出土の「石製模造品」について(4)-県内における主な石製模造品の工房跡について』『研究ノート』11号 財團法人茨城県教育財团 2002年6月

付 章

堂ノ上遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

堂ノ上遺跡は、小野川左岸の台地上に位置し、弥生時代や古墳時代中期・後期の住居跡等が検出されている。本報告では、堂ノ上遺跡の焼失家屋から出土した炭化材の樹種同定を実施し、木材利用を明らかにすると共に、出土したガラス製品の蛍光X線分析を実施し、ガラスの由来・混和物に関する情報を得る。

1. 炭化材の樹種同定

(1) 試料

試料は、第24号住居跡から出土した炭化材3点、第55号住居跡から出土した炭化材3点、第93号住居跡から出土した炭化材3点の合計9点である。

(2) 分析方法

炭化材を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東（1982）およびWheeler他（1998）を参考にする。また、各樹種の木材組織については、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）に参考にする。

(3) 結果

樹種同定結果を表1に示す。炭化材は広葉樹3種類（コナラ属コナラ亜属クヌギ節、コナラ属アカガシ亜属、ムクロジ）とイネ科に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) ブナ科

環孔材で、孔圈部は1-2列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと複合放射組織がある。

・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では梢円形、単独で放射方向に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

複合放射組織が観察できなかったが、他に同様の道管配列となる広葉樹材が本州には存在しないことから、アカガシ亜属に同定した。

・ムクロジ (*Sapindus mukorossi* Gaertn.) ムクロジ科ムクロジ属

環孔材で、孔圈部は1-2列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、塊状に複合して配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1-3細胞幅、1-40細胞高。柔組織は周間状～連合翼状、帶状およびターミナル状。

表1. 堂ノ上遺跡の樹種同定結果

遺構	試料番号	樹種
S124	1	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
	2	イネ科
	3	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
S155	4	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
	5	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
	6	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
S193	7	コナラ属アカガシ亜属
	8	ムクロジ
	9	ムクロジ

・イネ科 (Gramineae)

試料は薄く脆いため、電子顕微鏡による観察はできなかった。実体顕微鏡による観察では、横断面で維管束が柔細胞中に散在する不齊中心柱の構造が観察でき、放射組織は認められない。

(4) 考察

炭化材は、住居跡から出土しており、住居構築材などが炭化した可能性がある。第24号住居跡はクスギ節とイネ科、第55号住居跡はクスギ節、第93号住居跡はアカガシ亞属、ムクロジが認められた。イネ科を除いては、重硬で強度が高い材質を有する種類であり、構築材等に強度の高い木材を利用していたことが推定される。一方、イネ科は、屋根材等に利用された蒼材に由来すると考えられる。

確認された樹木のうち、常緑広葉樹のアカガシ亞属は、暖温帶性常緑広葉樹林の主構成種であり、ムクロジはその林縁部等に生育する落葉広葉樹である。一方、クスギ節は、二次林を構成する落葉広葉樹であり、河畔などの湿った場所に比較的よく生育する。アカガシ亞属やムクロジは、茨城県内では沿海地の比較的温暖な地域に生育し、遺跡からの出土例もこうした沿岸地域に多い傾向がある。住居構築材を遠方から搬入するとは考えにくいことから、周間に常緑広葉樹のアカガシ亞属、落葉広葉樹のムクロジ、クスギ節等が生育していたことが推定される。

本遺跡周辺地域では、興津白井遺跡（美浦村）、星合遺跡および実穀寺子遺跡（阿見町）、ヤツノ上遺跡・中久喜遺跡・東山遺跡・馬場遺跡（牛久市）等で古墳時代中期～後期にかけての住居跡出土炭化材について樹種同定が実施されており、クスギ節やコナラ節の多い結果が得られている（パリノ・サーヴェイ株式会社、1993 a, 1993 b, 1995, 1996, 1997, 1999 a, 2000）。一方、霞ヶ浦対岸に位置する木工台遺跡（行方市）では、7世紀代の住居跡出土炭化材にクスギ節、コナラ節、アカガシ亞属、スダジイ、ムクロジ等が確認されており、本遺跡と類似する種類構成が確認されている（1998, 1999 b）。

2. ガラス製品の蛍光X線分析

(1) 試料

試料は、住居跡から出土したガラス製品4点（第25号住居跡G3、第64号住居跡G6、第86号住居跡G7、第91号住居跡G8）である。

(2) 分析方法

蛍光X線分析はサンプリングが困難な文化財の材質調査に広く用いられている手法であるが、ごく表面層を測定対象としているため、出土遺物表面が風化の影響を受けている場合、遺物本来の化学組成を導くことは難しく、本来の化学組成を知るためにには風化層を除去しなければならない。ただし、遺物保存の観点から考えれば、外観上の変化を伴わない本分析法は概略の化学組成を知るために極めて有効な手法となる。

本報告では、非破壊を前提とした材質調査を目的とすることから、試料はクリーニング処理や風化層の除去を行わず、調査に用いる。材質調査に用いた装置はセイコーインスツルメンツ（株）製エネルギー分散型蛍光X線分析装置（SEA2120L）である。なお、本装置は下面照射型の装置であることから、ガラス製品の測定の際には、試料をマイラー膜（2.5 μm）（ケンブレックス製CatNo106）で固定し、測定を実施した。

得られた特性X線スペクトルは元素定性を実施した後、マイラー膜による吸収補正を施し、ノンスタンダードによるFP法（ファンダメンタルバラメーター法）により、酸化物として定量演算を行い、相対含有率（質量%）を算出する。なお、本装置による定量可能元素は11 Naから92 Uの範囲にある元素であり、これら範囲外の元素についてはFP法による定量演算に利用することができないこと、また半定量的に相対含有率を算出

しているが、実際にはどの程度の深さまでX線が進入しているのか不確実な部分もあり（例えば表面の風化層のみから発生した特性X線を検出しているのか、あるいは風化層より内部の新鮮部分の材質も含めた特性X線を検出しているのか）、結果の評価には注意する必要がある。本調査における測定条件の詳細については、表2に示す。

(3) 結果

ガラス製品の蛍光X線定性スペクトルを図1～4、FP法により求めた化学組成を表3に示す。ガラス製品4点の化学組成によれば、これらのガラス製品は主としてSiO₂、Al₂O₃、CaO、Na₂O、K₂Oなどの酸化物によって構成されている。これら酸化物は、対象としたガラスの主要な構成酸化物と考えられるが、本報告では網目形成酸化物であるSiO₂や、網目修飾酸化物であるNa₂O、K₂O、CaO、また、中間酸化物となるAl₂O₃について一応の定量を行っているものの、基本的に表面風化層の除去を行っていないことから、本来の材質を反映した結果とは成り得てないことに注意する必要がある。

一方、他の成分に関しては、Fe₂O₃が3%前後、MnOが0.2%前後含まれるほか、第25号住居跡G3、第64号住居跡G6、第91号住居跡G8の3点においてはCuOが1%以上の濃度で検出されている以外に、SnOやPbOが含まれている。特にCuOが比較的多い第64号住居跡G6ではSnO、PbOが多く含まれる傾向にある。なお、第86号住居跡G7については他のガラス製品と異なり、CuOやPbOは微量含まれる程度であるが、Co₂O₃が検出されている点に特徴がある。

表2. 蛍光X線分析の測定条件

測定装置	SEA 2120L	
筐球ターゲット元	Rh	
コリメータ	φ 10.0mm	
フィルター	なし	
マイラー	ON	
背景気	真空	
駆動電圧 (kV)	15	50
管電流 (μA)	自動設定	自動設定
測定時間 (秒)	300	300
定性元素	Na-Ca	Sc-U

表3. ガラス製品の蛍光X線分析結果（化学組成）

（単位: wt%）

試料名	色	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	Cr ₂ O ₃	MnO
S125 G3	淡緑色	325	-	17.00	67.36	2.72	3.04	0.99	-	0.14
S164 G6	緑色	484	-	13.95	64.18	2.06	1.60	0.96	0.05	0.13
S186 G7	褐色	756	2.84	8.78	69.71	2.76	4.37	0.30	-	0.29
S191 G8	青緑色	0.89	-	16.01	71.89	3.85	2.00	0.62	-	0.29
試料名	色	Fe ₂ O ₃	Co ₂ O ₃	CuO	Rb ₂ O	SrO	ZrO ₂	SnO ₂	BaO	PbO
S125 G3	淡緑色	2.83	-	1.39	-	0.11	0.20	0.08	0.08	0.80
S164 G6	緑色	3.14	-	2.97	-	0.08	0.16	1.02	0.13	4.74
S186 G7	褐色	2.60	0.20	0.17	-	0.11	0.03	-	-	0.19
S191 G8	青緑色	2.64	-	1.16	0.02	0.06	0.15	0.14	0.11	0.17

3. 考察

ガラスは珪酸原料に融剤および着色剤を調合し、溶融・冷却という過程を経て製品となる。ガラス製品における化学組成の違いは原材料や製作技術あるいは製作時期の違いを反映し、当時の交易や流通の解明につながる情報の一つと考えられる。古代ガラスの遺物は大陸と地理的に近い九州地方を中心とした西日本の遺跡に多く見られ、これまでのところ国内においては弥生時代以降の遺跡においてのみ見いだされている。古代ガラスの化学組成に関する分類基準は現在のところ、まだ体系的な基準は設けられていないが、山崎（1990）によれば古代のガラス製品は融剤に主として鉛を用いた鉛ガラスとナトリウム・カリウム等アルカリ元素を用いたアリカリ石灰ガラスに大別される。時代別にみると、弥生時代に出土するガラス製品は鉛ガラス、アルカリ石灰ガラス、またバリウムを多く含む特殊な鉛ガラスである。古墳時代に入ると鉛ガラスの出土が認められず、アルカリ石灰ガラスが主体となる。古墳時代中期後葉になるとアルカリ石灰ガラスの色が多様化し、古墳時代後

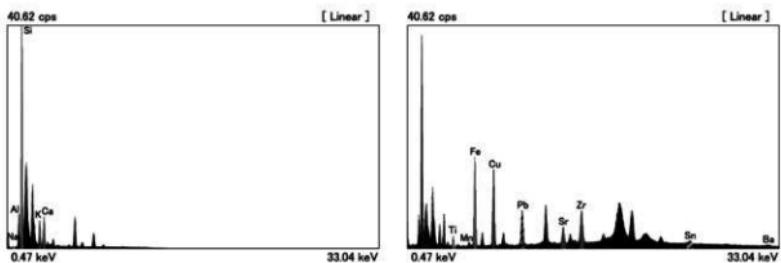


図1 第25号住居跡G3の蛍光X線スペクトル(左:励起電圧15kV、右:50kV)

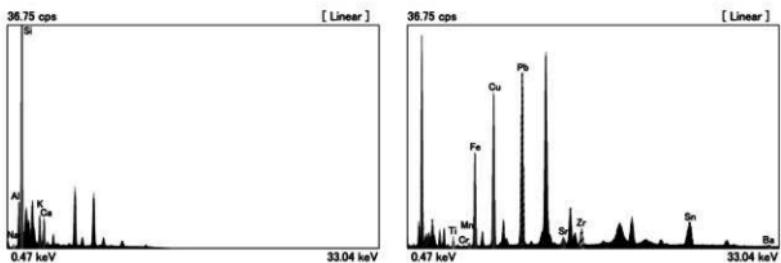


図2 第64号住居跡G6の蛍光X線スペクトル(左:励起電圧15kV、右:50kV)

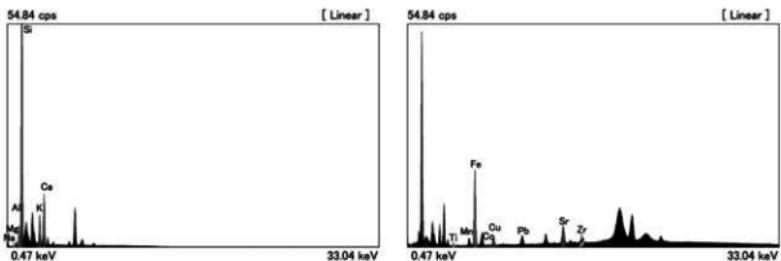


図3 第86号住居跡G7の蛍光X線スペクトル(左:励起電圧15kV、右:50kV)

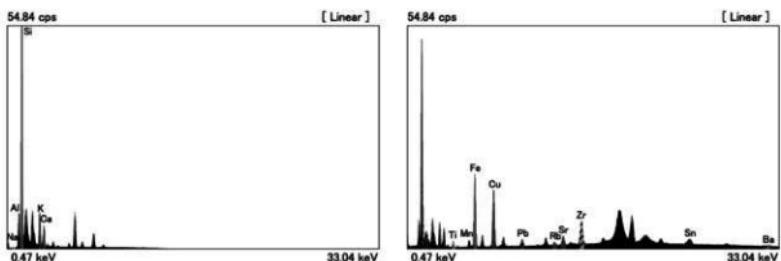


図4 第91号住居跡G8の蛍光X線スペクトル(左:励起電圧15kV、右:50kV)

期からは再び鉛ガラスも出土するようになると報告している。また、近年では肥塚（1995, 1999, 2001）によって詳細な検討がなされており、融剤の種類によってアルカリ珪酸塩ガラス、鉛珪酸塩ガラス、アルカリ鉛珪酸塩ガラスのグループに分類しており、さらにこれらを構成酸化物の種類と量から、アルカリ珪酸塩ガラスを $K_2O - SiO_2$ 系・ $Na_2O - CaO - SiO_2$ 系・ $K_2O - CaO - SiO_2$ 系・ $Na_2O - Al_2O_3 - CaO - SiO_2$ 系・(Na_2O / K_2O) - $CaO - SiO_2$ 系に、鉛珪酸塩ガラスを $PbO - SiO$ 系・ $PbO - BaO - SiO_2$ 系に、アルカリ鉛珪酸塩ガラスを $K_2O - PbO - SiO_2$ 系としている。

今回調査を実施したガラス製品は、いずれも材質的にはアルカリ珪酸塩ガラスに区分される材質と判断される。ただし、前述したように構成酸化物の定量値が半定量的な値であることや、ガラス表面の風化変質による化学組成の変化も無視できないことから、肥塚による詳細な分類にまで細分することは難しい。特に、アルカリ珪酸塩ガラスは鉛を含有するガラスと異なり、表面が風化の影響を受けている場合でも外観上の変化をあまり伴わず、光沢を有することもあることから、遺物表面が風化による侵食をどの程度受けているのか推し量ることが難しく、最終的には内部新鮮面での化学組成の確認をもって判断する必要がある。

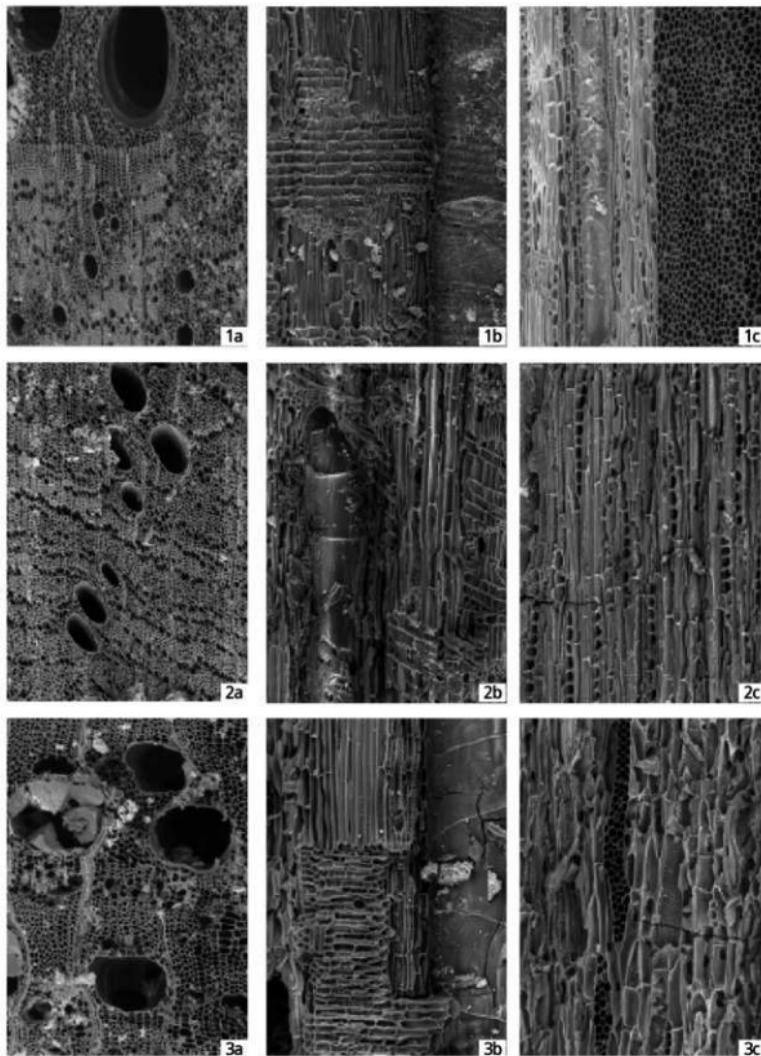
なお、肥塚（1999）はガラスの風化表面と内部新鮮面を調査し、風化による成分変動を検討し、カリガラスでは風化表面で K_2O が減少し、 SiO_2 , Al_2O_3 が増加する傾向が、ソーダ石灰ガラスでは風化表面で Na_2O が減少し、 SiO_2 , Al_2O_3 が増加するほか、 TiO_2 , MnO , Fe_2O_3 , CuO , PbO などの金属酸化物もやや増加する傾向があることを指摘している。このことを踏まえれば、調査対象としたガラス製品はいずれもソーダ石灰ガラス ($Na_2O - Al_2O_3 - CaO - SiO_2$ 系) に分類される可能性の高い材質であると見ることもでき、今後の検証課題として認識しておきたい。

ところで、これらガラス製品の着色因子としては、緑色を基調とする第25号住居跡 G 3, 第64号住居跡 G 6, 第91号住居跡 G 8 の3点では 1% を超える濃度で検出された CuO が主たる因子と考えられる。なお、これらのガラス製品では PbO や SnO_2 も同時に検出されていることから、青銅などの合金が着色剤として利用された可能性も想定される。ただし、銅、錫、鉛の三者の量比が一定しておらず、一般的な青銅とは比率も異なることから、現状では今後の検討課題として捉えておきたい。一方、紺色を基調とする第86号住居跡 G 7 については微量検出された Co_2O_3 が主たる要因と考えられる。なお、コバルトイオンによって着色されたガラスには、 MnO 含有量が多いものと、少ないものとが存在する。 MnO 含有量が多い場合、コバルト原料として中国産のコバルトイオンが用いられていたことに起因との見解が有力であるが、第86号住居跡 G 7 の MnO 含有量はそれほど高い値ではなく、第25号住居跡 G 3, 第64号住居跡 G 6, 第91号住居跡 G 8 の3点と同程度である。中国産のコバルトイオンは別のコバルトイオンが利用されていた可能性も視野に入れておく必要がある。

引用文献

- 林 昭三, 1991, 日本産木材 蘭微鏡写真集, 京都大学木質科学研究所,
伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 I, 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 II, 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 III, 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 IV, 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 V, 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
肥塚隆保, 1995, 古代ガラスの材質、「古代に挑戦する自然科学」, クバプロ, 94-108.
肥塚隆保, 1999, 出土遺物の材質調査—日本で出土した古代ガラスの研究-, 理学電気ジャーナル, 30, 1, 理学電気工業, 33-40.
肥塚隆保, 2001, 古代ガラスの材質と鉛同位体比、同位体・質量分析法を用いた歴史資料の研究、国立歴史民俗博物館研究報告、第86集、財团法人歴史民俗博物館振興会, 233-268.

- バリノ・サーヴェイ株式会社。1993a, ヤツノ上遺跡出土炭化材同定報告について、「牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅰ）」,『茨城県教育財團文化財調査報告』第81集, 299-303。
- バリノ・サーヴェイ株式会社。1993b, 中久喜遺跡から出土した炭化材の種類。「牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅱ）」,『茨城県教育財團文化財調査報告』第86集, 254-257。
- バリノ・サーヴェイ株式会社。1995, 東山遺跡出土の炭化材同定について、「牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅲ）」,『茨城県教育財團文化財調査報告』第101集, 288-289。
- バリノ・サーヴェイ株式会社。1996, 馬場遺跡・行人田遺跡出土の炭化材・炭化種子同定報告について、「牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅳ）」,『茨城県教育財團文化財調査報告』第106集, 261-264。
- バリノ・サーヴェイ株式会社。1997, 第5号住居跡出土炭化材の樹種。「阿見東部工業団地造成工事地内埋蔵文化財調査報告書」,『茨城県教育財團文化財調査報告』第137集, 111-112。
- バリノ・サーヴェイ株式会社。1998, 木工台遺跡から出土した炭化材の樹種。「北浦複合団地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」,『茨城県教育財團文化財調査報告』第140集, 394-398。
- バリノ・サーヴェイ株式会社。1999a, 実穀寺子遺跡から出土した炭化材・種実遺体の種類。「荒川本郷地区特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」,『茨城県教育財團文化財調査報告』第144集, 275-277。
- バリノ・サーヴェイ株式会社。1999b, 木工台遺跡から出土した炭化材の樹種。「北浦複合団地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」,『茨城県教育財團文化財調査報告』第152集, 619-621。
- バリノ・サーヴェイ株式会社。2000, 興津白井遺跡における自然科学分析。「興津白井遺跡－美浦村水処理センター建設に伴う埋蔵文化財の調査－」『美浦村教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告9』, 美浦村教育委員会・美浦村興津白井遺跡調査会, 35-38。
- 島地謙・伊東隆夫。1982, 図説木材組織, 地球社, 176p.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡の特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩(日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*.]
- 山崎一雄。1990, 日本出土のガラスの化学的研究, 古文化財の科学, 思文閣出版, 274-300.



1. コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (SI-55; 試料番号 4)

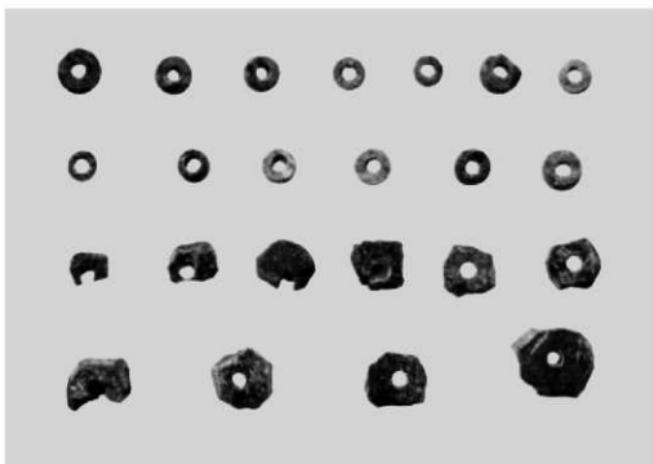
2. コナラ属アカガシ亜属 (SI-93; 試料番号 7)

3. ムクロジ (SI-93; 試料番号 8)

a : 木口 , b : 柾目 , c : 板目

— 200 μ m —
— 200 μ m : b,c

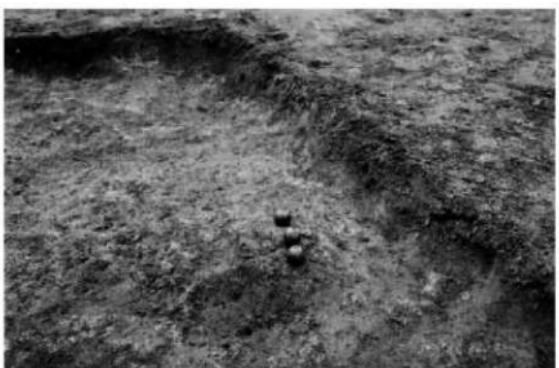
写 真 図 版



第2号豎穴建物跡出土白玉



第 10 号 住 居 跡
完 挖 状 況



第 1 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 況



第 3 号 住 居 跡
完 挖 状 況



第 4 号 住 居 跡
完 挖 状 況



第 5 号 住 居 跡
貯 藏 穴 遺 物 出 土 状 況



第 6 号 住 居 跡
完 挖 状 況



第 8 号 住 居 跡
完 挖 状 況



第 8 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 況



第 8 号 住 居 跡
龐 遺 物 出 土 状 況



第 11 号 住居跡
完掘状況



第 11 号 住居跡
遺物出土状況



第 11 号 住居跡
遺物出土状況

第 13 号 住 居 跡
完 挖 状 況



第 13 号 住 居 跡
完 挖 状 況



第 14 号 住 居 跡
完 挖 状 況





第 16 号 住居跡
完掘状況



第 16 号 住居跡
完掘状況



第 17 号 住居跡
完掘状況

第 17 号 住居跡
窓遺物出土状況



第 20 号 住居跡
完 窓 状 況



第 20 号 住居跡
遺 物 出 土 状 況





第 20 号住居跡
遺物出土状況



第 20 号住居跡
発完掘状況



第 22 号住居跡
遺物出土状況

第 23 号 住居跡
窓 完 挖 状 況



第 24 号 住居跡
窓 完 挖 状 況



第 24 号 住居跡
窓 完 挖 状 況

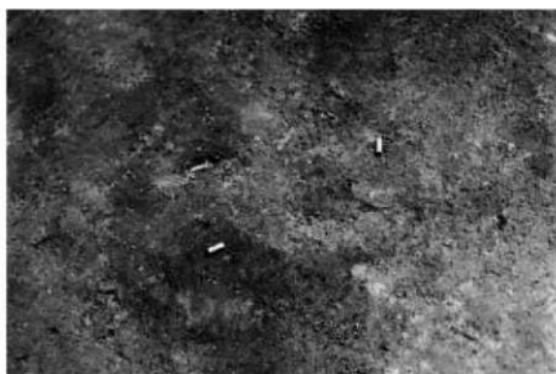




第 24 号住居跡
龕遺物出土狀況



第 25 号住居跡
完掘狀況



第 25 号住居跡
遺物出土狀況



第 27 号 住 居 跡
完 挖 状 況



第 28 号 住 居 跡
完 挖 状 況



第 29 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 況



第 31 号 住 居 蹤
遗 物 出 土 状 况



第 38 号 住 居 蹤
完 挖 状 况



第 39 号 住 居 蹤
完 挖 状 况

第 39 号 住居跡
遺物出土状況



第 39 号 住居跡
遺物出土状況

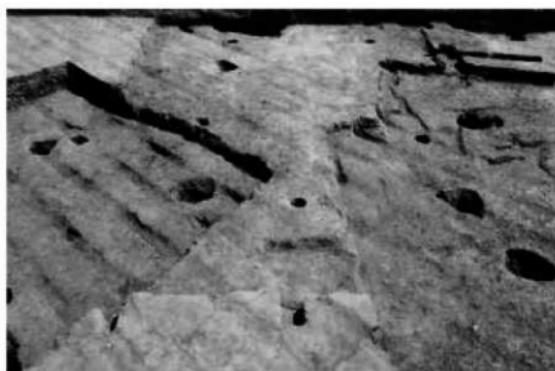


第 39 号 住居跡
遺物出土状況

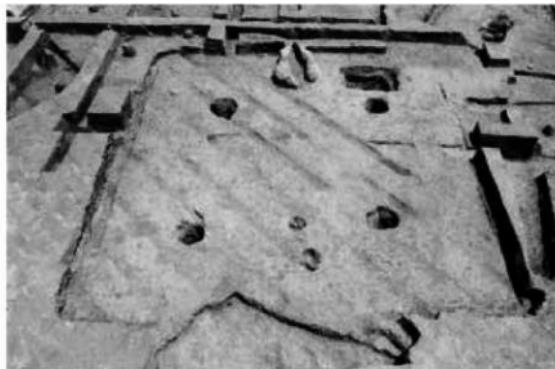




第 39 号住居跡
龐遺物出土狀況



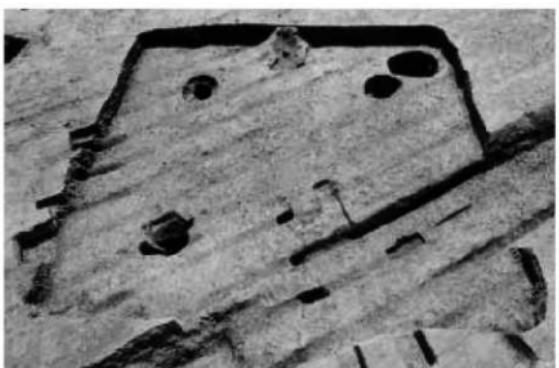
第 41 号住居跡
完掘狀況



第 42 号住居跡
完掘狀況



第 42 号 住 居 跡
遺 物 出 土 狀 況



第 44 号 住 居 跡
完 挖 狀 況



第 45 号 住 居 跡
完 挖 狀 況



第 45 号 住居跡
遺物出土状況



第 45 号 住居跡
遺物出土状況



第 45 号 住居跡
張り出し施設
遺物出土状況

第 46 号 住 居 跡
完 挖 状 況



第 46 号 住 居 跡
竈・炉 完 挖 状 況

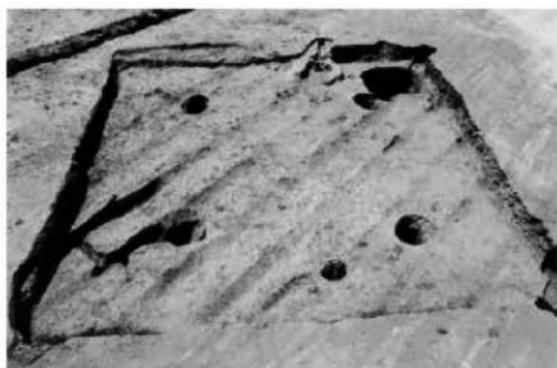


第 47A・47B 号 住 居 跡
完 挖 状 況





第 47A 号 住居跡
遺物出土状況



第 50 号 住居跡
完掘状況

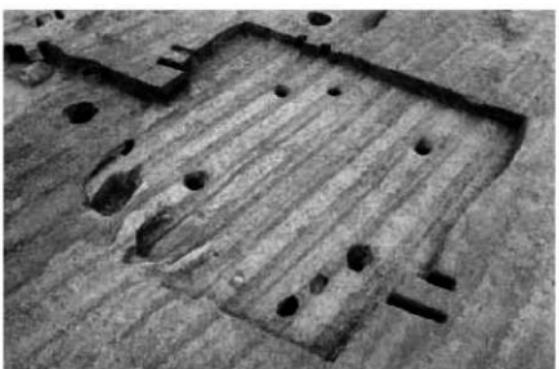


第 50 号 住居跡
完掘状況

第 51 号 住居跡
遺物出土状況



第 52 号 住居跡
完掘状況



第 57 号 住居跡
遺物出土状況





第 60 号住居跡
完掘状況

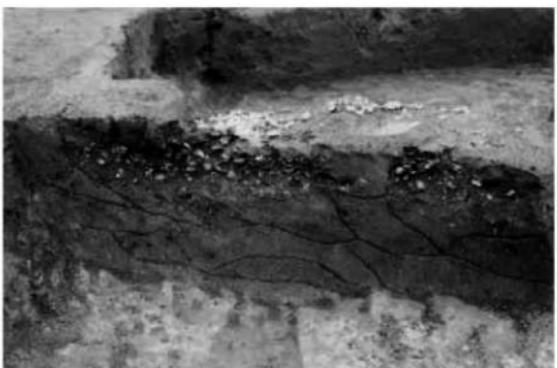


第 66 号住居跡
完掘状況



第 67A 号住居跡
完掘状況

第 69 号 住居跡
貝土層断面



第 70 号 住居跡
完掘状況



第 74 号 住居跡
完掘状況





第 74 号 住居跡
遺物出土状況



第 75 号 住居跡
完掘状況

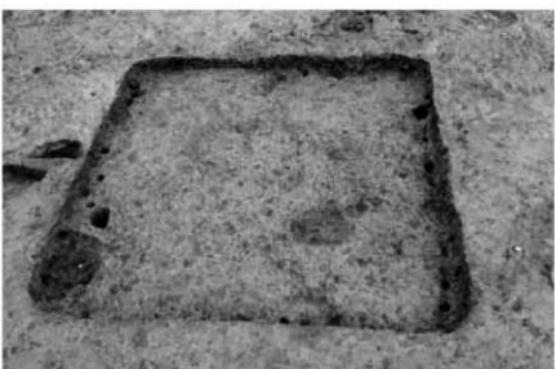


第 78 号 住居跡
完掘状況

第 79 号 住居跡
完掘状況



第 82 号 住居跡
完掘状況



第 83 号 住居跡
完掘状況





第 83 号住居跡
完掘状況



第 84 号住居跡
完掘状況



第 84 号住居跡
遺物出土状況



第 85 号 住 居 跡
完 挖 状 況



第 86 号 住 居 跡
完 挖 状 況



第 87 号 住 居 跡
完 挖 状 況



第 87 号住居跡
龕遺物出土狀況



第 88 号住居跡
完掘狀況



第 90 号住居跡
完掘狀況



第 90 号 住 居 跡
龕 遺 物 出 土 狀 況



第 91 号 住 居 跡
完 整 狀 況



第 91 号 住 居 跡
P 4 遺 物 出 土 狀 況



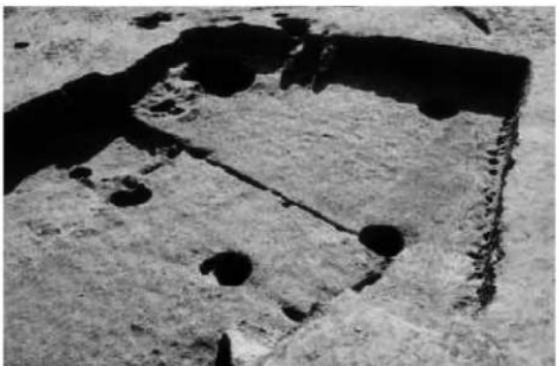
第 91 号住居跡
遺物出土状況



第 91・92号住居跡
遺物出土状況



第 91 号住居跡
甕遺物出土状況



第 92 号 住 居 跡
完 挖 状 況



第 93 号 住 居 距
遺 物 出 土 狀 況



第 93 号 住 居 距
遺 物 出 土 狀 況



第 93 号住居跡
遺物出土状況



第 94 号住居跡
掘方完掘状況



第 96 号住居跡
完掘状況



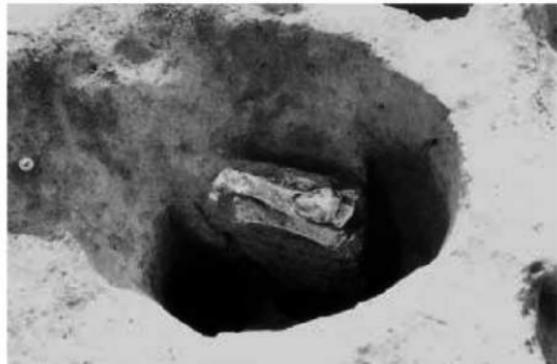
第 96 号 住居跡
遺物出土状況



第 96 号 住居跡
掘り方完掘状況



第 97 号 住居跡
完掘状況



第 97 号住居跡
P 6 遺物出土状況



第 98 号住居跡
完掘状況



第 100 号住居跡
完掘状況



第 100 号 住居跡
遺物 出土 状況



第 104 号 住居跡
完 挖 状 況



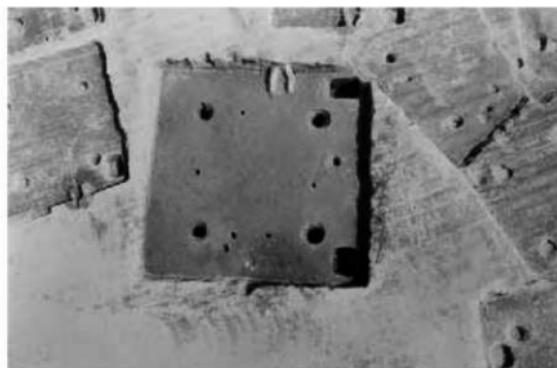
第 106 号 住居跡
完 挖 状 況



第 106 号 住居跡
龕遺物出土狀況



第 109 号 住居跡
完掘狀況



第 109 号 住居跡
完掘狀況



第110・144号住居跡
完掘状況



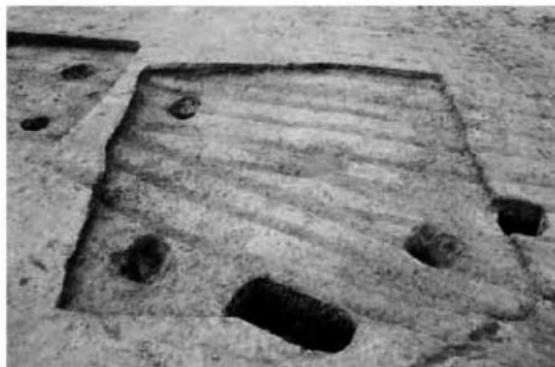
第112号住居跡
遺物出土状況



第114号住居跡
完掘状況



第 114 号 住居跡
罐 遺物 出土 状況



第 115 号 住居跡
完 挖 状 況



第 118 号 住居跡
完 挖 状 況



第 119 号 住居跡
完 挖 状 況



第 121 号 住居跡
完 挖 状 況



第 122 号 住居跡
完 挖 状 況



第 122 号 住居跡
遺物 出土 状況



第 123 号 住居跡
完 挖 状 況



第 123 号 住居跡
完 挖 状 況



第 124 号 住居跡
貯藏穴遺物出土状況



第 125 号 住居跡
完掘状況



第 128 号 住居跡
完掘状況



第 129 号 住居跡
完 挖 状 況



第 129 号 住居跡
遺 物 出 土 状 況



第 129 号 住居跡
龕 遺 物 出 土 状 況



第 139 号 住居跡
完 挖 状 況



第 141 号 住居跡
完 挖 状 況



第 143 号 住居跡
完 挖 状 況



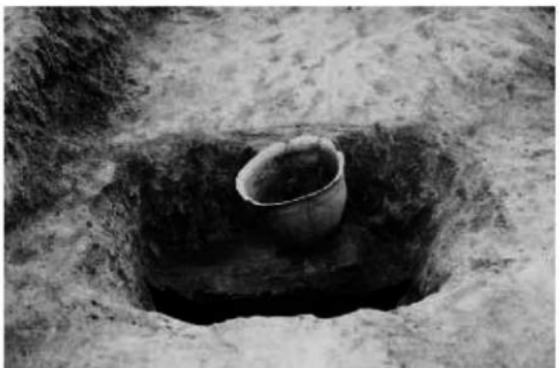
第 149 号 住 居 蹤
完 挖 状 況



第 149 号 住 居 蹤
遗 物 出 土 状 況



第 149 号 住 居 蹤
遗 物 出 土 状 況



第 149 号 住居跡
貯藏穴遺物出土状況



第 150 号 住居跡
完掘状況



第 153 号 住居跡
完掘状況



第 154 号 住居跡
完 挖 状 況



第 154 号 住居跡
遺 物 出 土 状 況



第 155 号 住居跡
完 挖 状 況



第 156 号 住居跡
完 挖 状 況



第 158・159 号 住居跡
完 挖 状 況



第 158 号 住居跡
遺 物 出 土 状 況



第 159 号 住 居 蹤
完 挖 状 況



第 1 号 竖穴 建物 蹤
完 挖 状 況



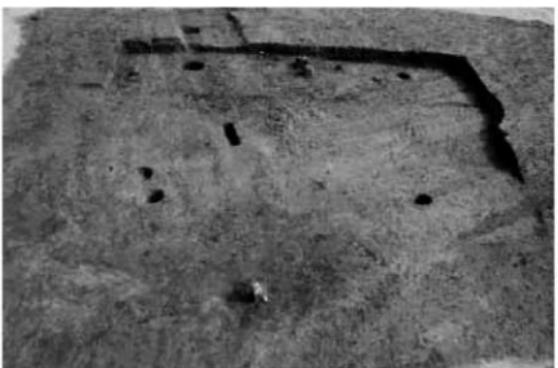
第 1 号 竖穴 建物 蹤
遗 物 出 土 状 況



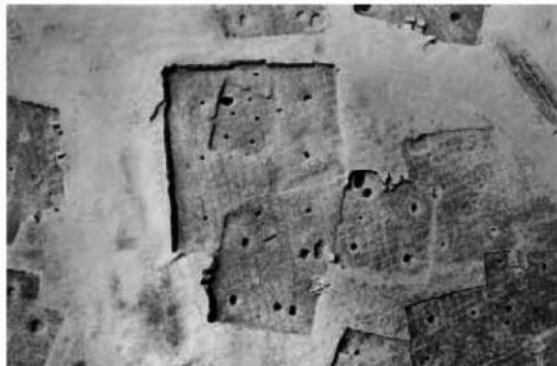
第2号竪穴建物跡
遺物出土状況



第2号竪穴建物跡
遺物出土状況



第3号竪穴建物跡
遺物出土状況



第 6 号 穹穴 建物跡
完 挖 状 況



第 51 号 土 坑
遺 物 出 土 状 況



堂 ノ 上 遺 跡
完 挖 状 況



S15- 18



S12- 4



S14- 16



S15- 17



S15- 19



S13- 11



第2·3·4·5号住居跡出土土器



S111- 27



S114- 36



S113- 32



S119- 26



S118- 22



S117- 41



S118- 24



S116- 20



第17·20号住居跡出土土器



S122- 52



S122- 54



S123- 60



S120- 49



S120- 48



S123- 59



S122- 53



第24・25号住居跡出土土器



S126- 73



S135- 91



S132- 87



S131- 85



S129- 82



S127- 76



S125- 72



S131- 86

第25·26·27·29·31·32·35号住居跡出土土器



第35·39·42号住居跡出土土器



SI42- 105



SI45- 113



SI45- 112



SI45- 110



SI42- 103



SI45- 111



SI47A- 119



SI43- 107



S145- 115



S145- 116



S148- 122



S148- 121



S157- 134



第45·48·57号住居跡出土土器



第50·55·57·59·60·62·64号住居跡出土土器



第60·64·67A·70号住居跡出土土器



S174- 169



S175- 173



S165- 148



S173- 166



S173- 167



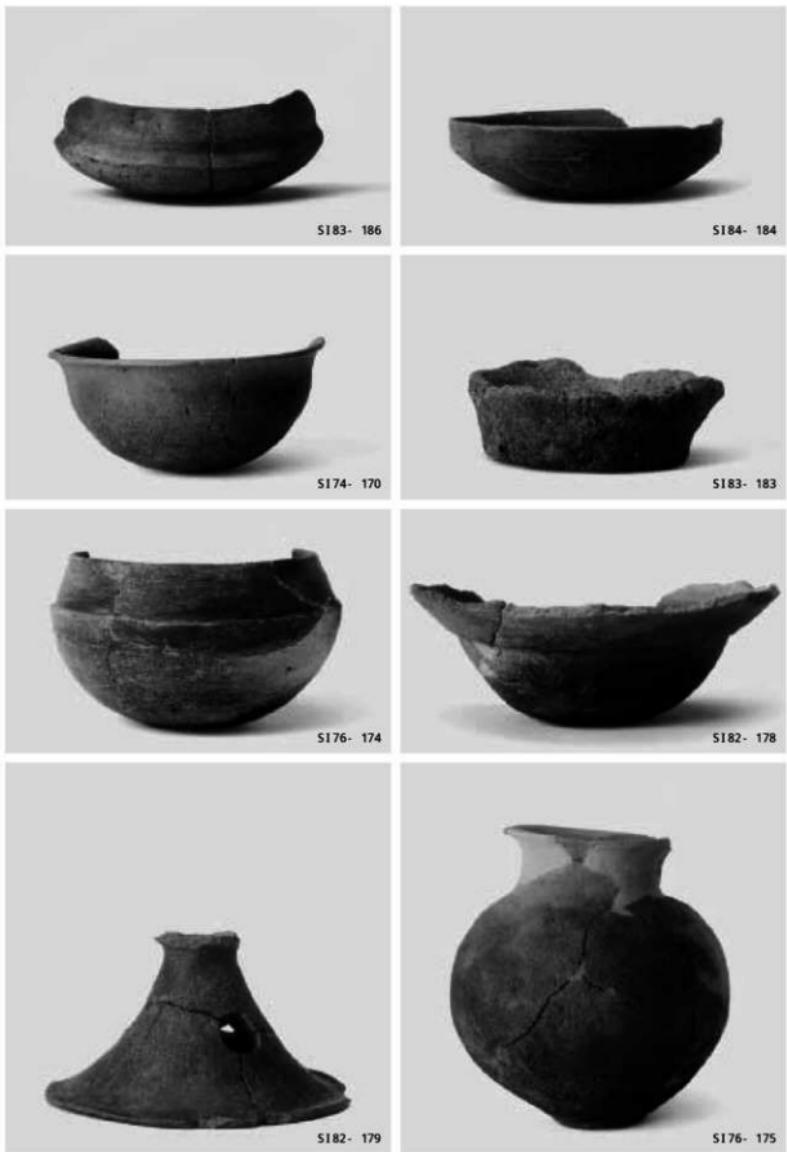
S171- 163



S165- 150



第65·71·73·74·75号住居跡出土土器



第74·76·82·83·84号住居跡出土土器



第83·84·86号住居跡出土土器



第84·87·90·91号住居跡出土土器



第91·92号住居跡出土土器



S192- 228



S193- 235



S1100- 259



S191- 220



S191- 223



S191- 222

第91·92·93·100号住居跡出土土器



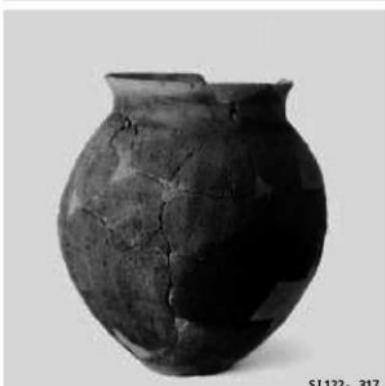
第93·97·98号住居跡出土土器



第98·100·101·104·105·106号住居跡出土土器



第101·103·104·108号住居跡出土土器



第114・118・121・122号住居跡出土土器



第119·121·122·123·124·125·129号住居跡出土土器



第126・127・129・132号住居跡出土土器



SI143- 375



SI140- 357



SI142- 367



SI140- 359



SI140- 360



SI140- 358



SI129- 344



第129·140·142·143号住居跡出土土器



第140·141·142·149·150号住居跡出土土器



第143·149·154号住居跡出土土器



第152·153·155·156·158号住居跡，第6号竪穴建物跡出土土器



SX 6- 398



SX 2- 379



SX 6- 399



SX 2- 378



SX 6- 397



SK 53- 421



SK 43- 420



SK 43- 442



SK 67- 424



SK 53- 427



SK 51- 430



SK 68- 428



SK 51- 431



遺構外- 438

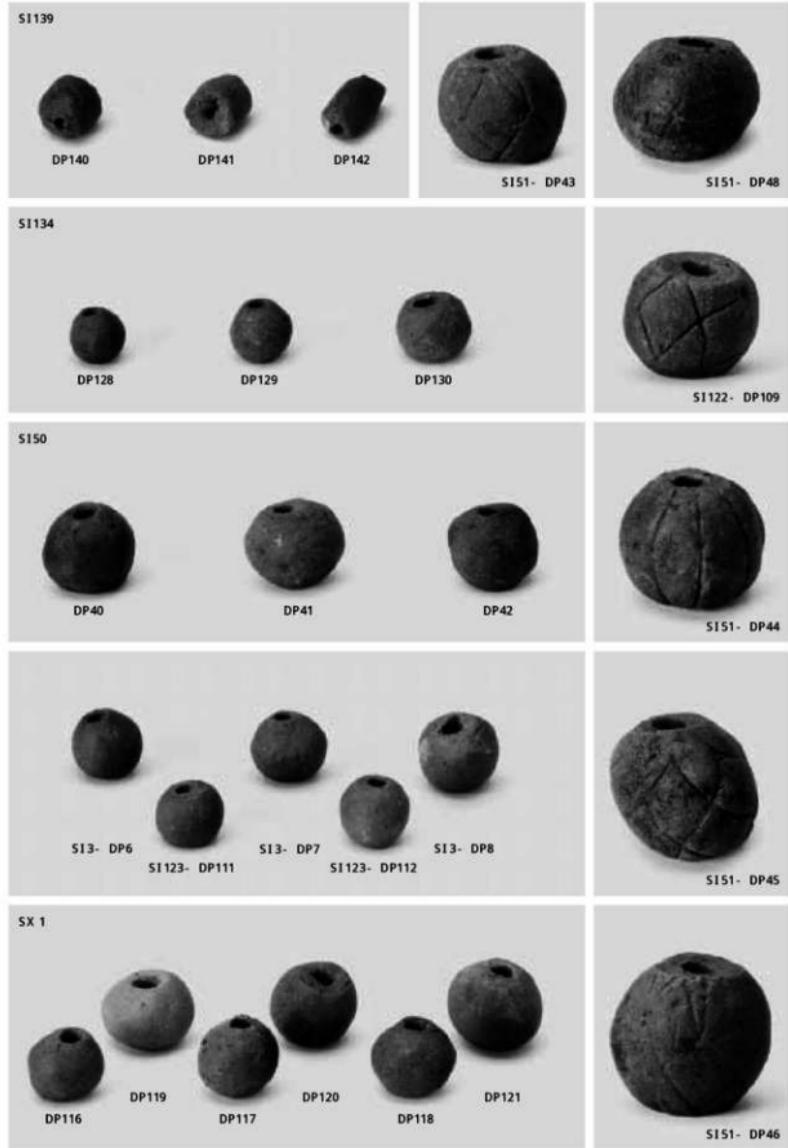


SK 51- 432

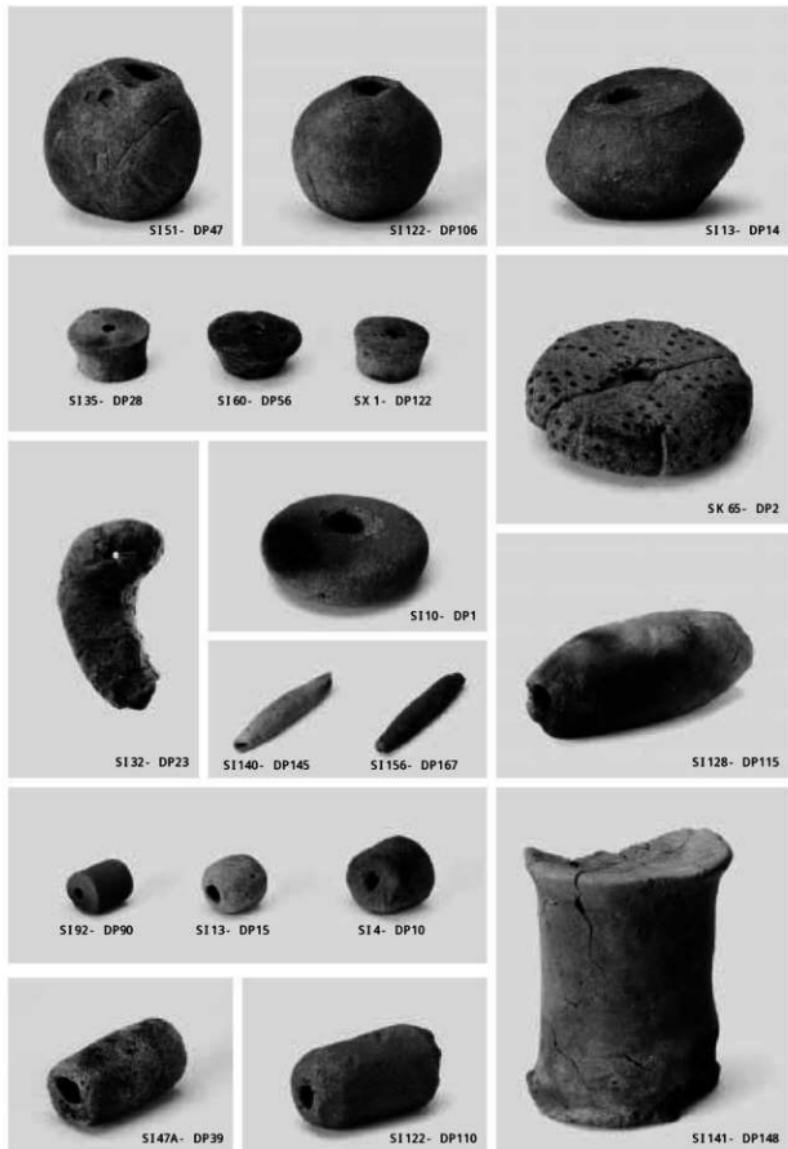


S181- TP16

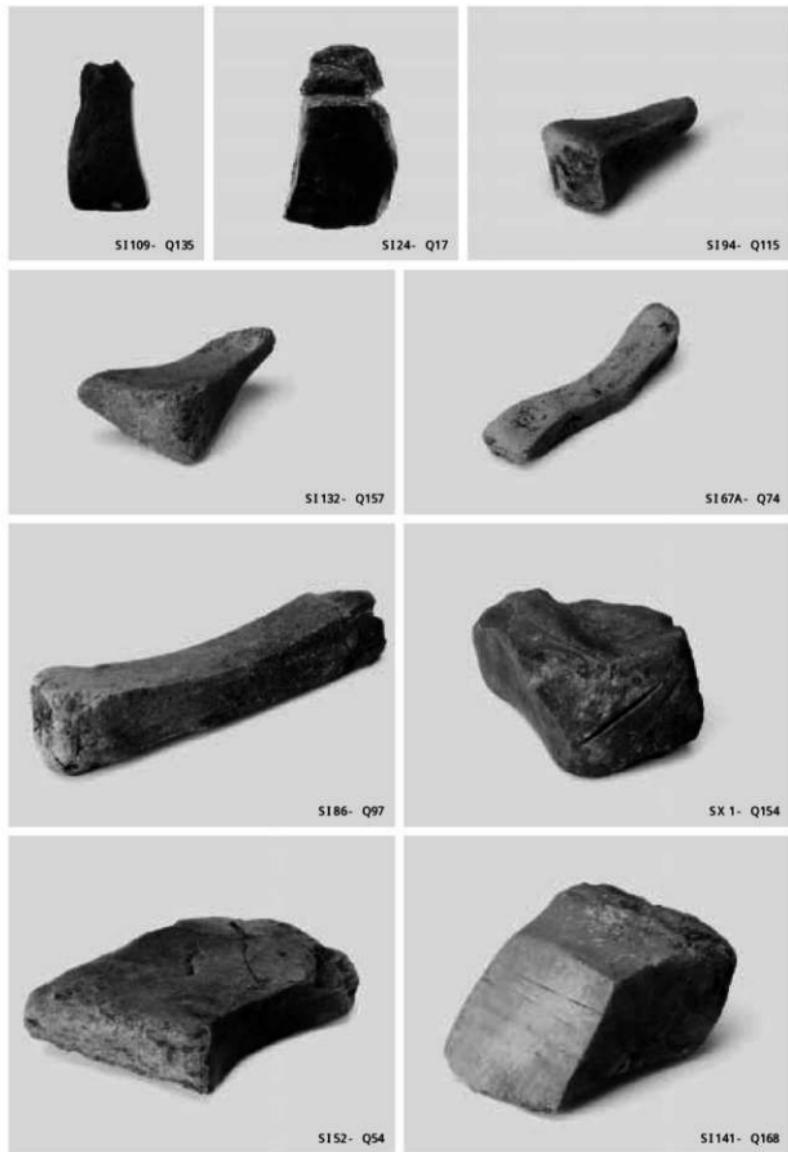
第81号住居跡，第51・53・67・68号土坑，遺構外出土土器



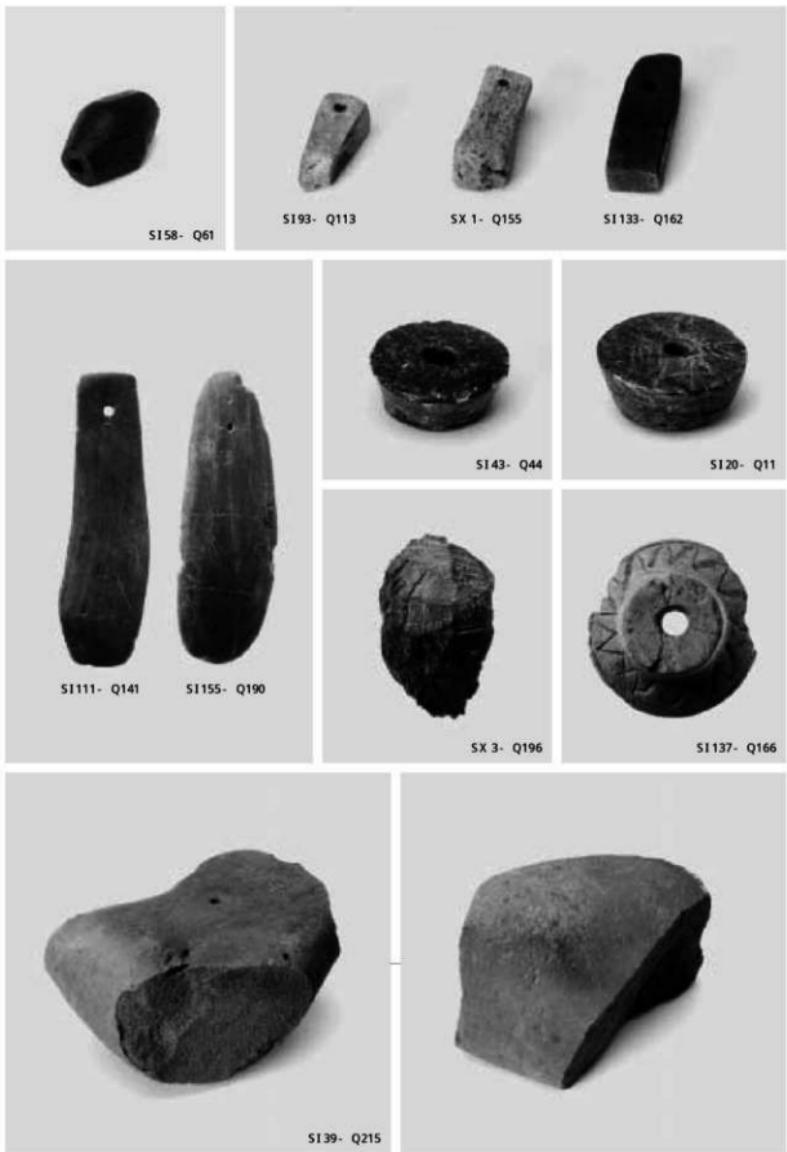
出土土製品



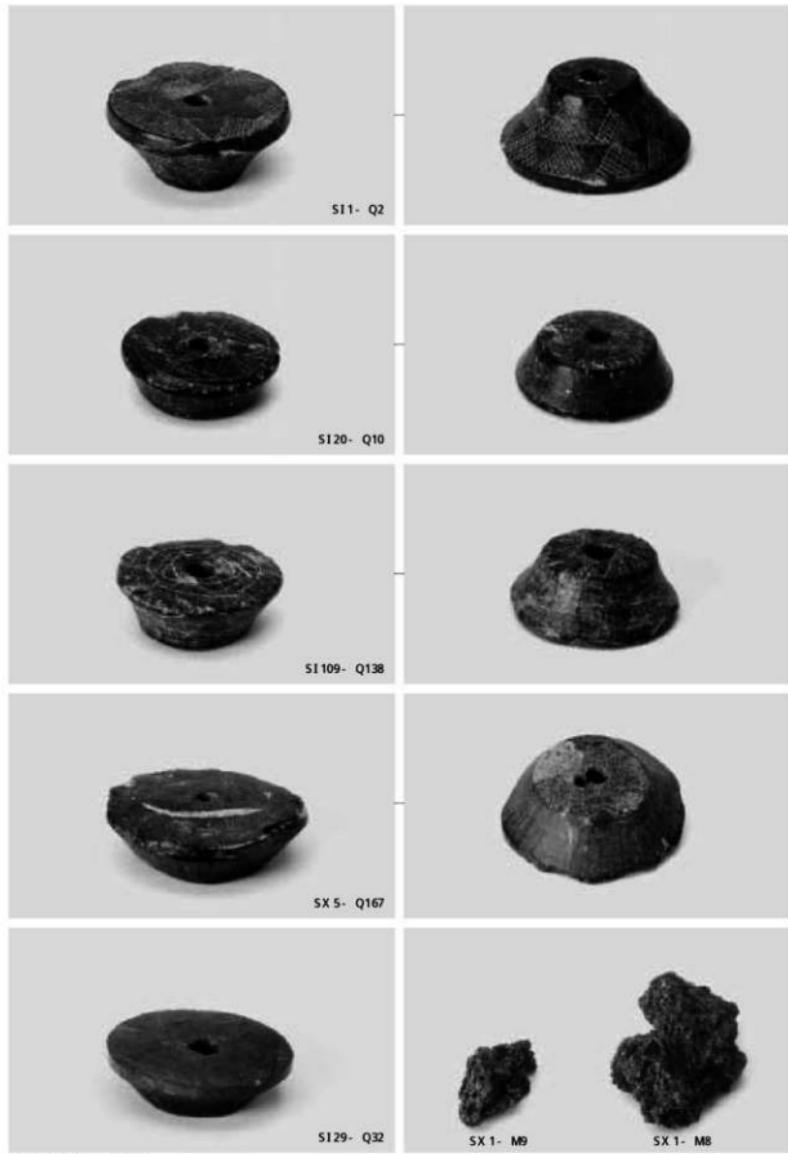
出土土製品



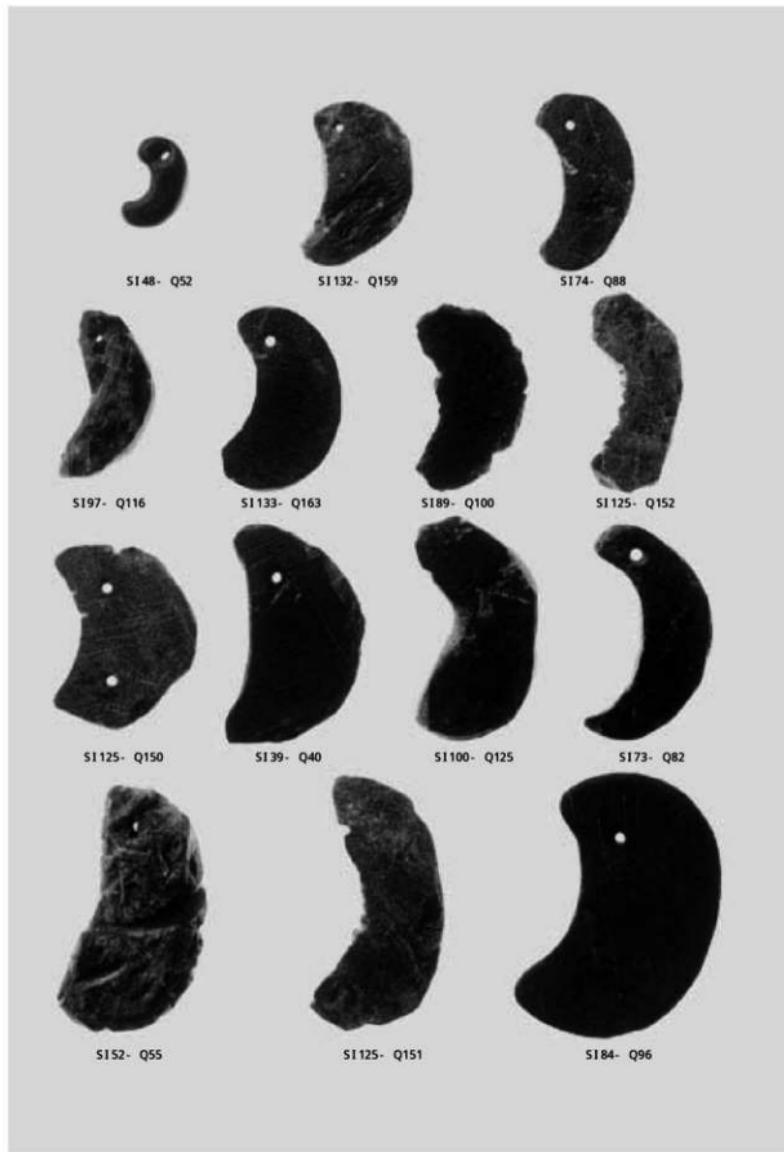
出土石器・石製品



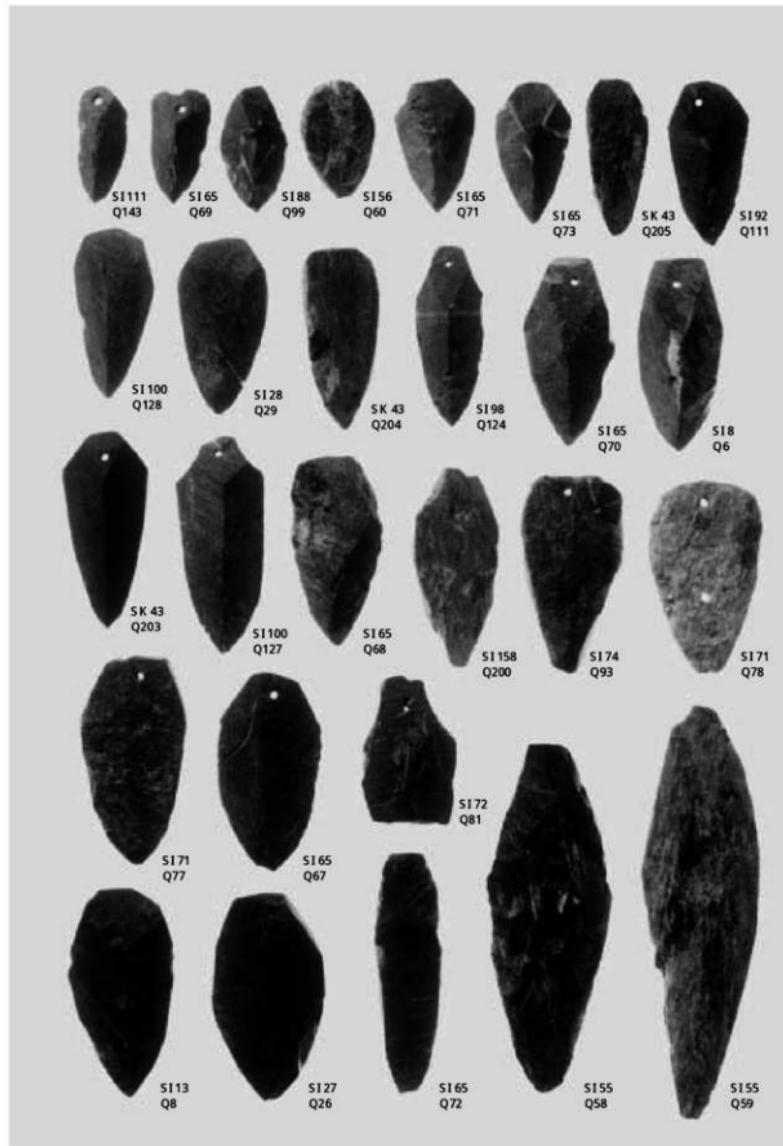
出土石器・石製品



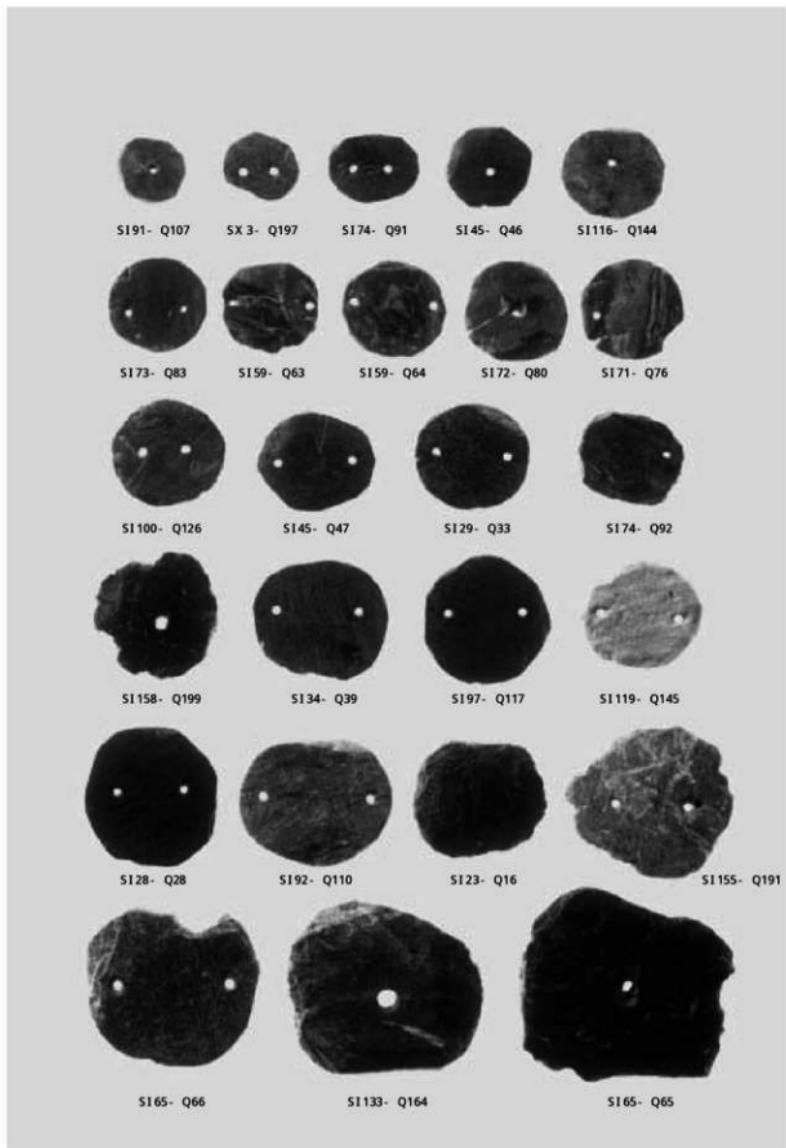
出土石製品・鉄滓



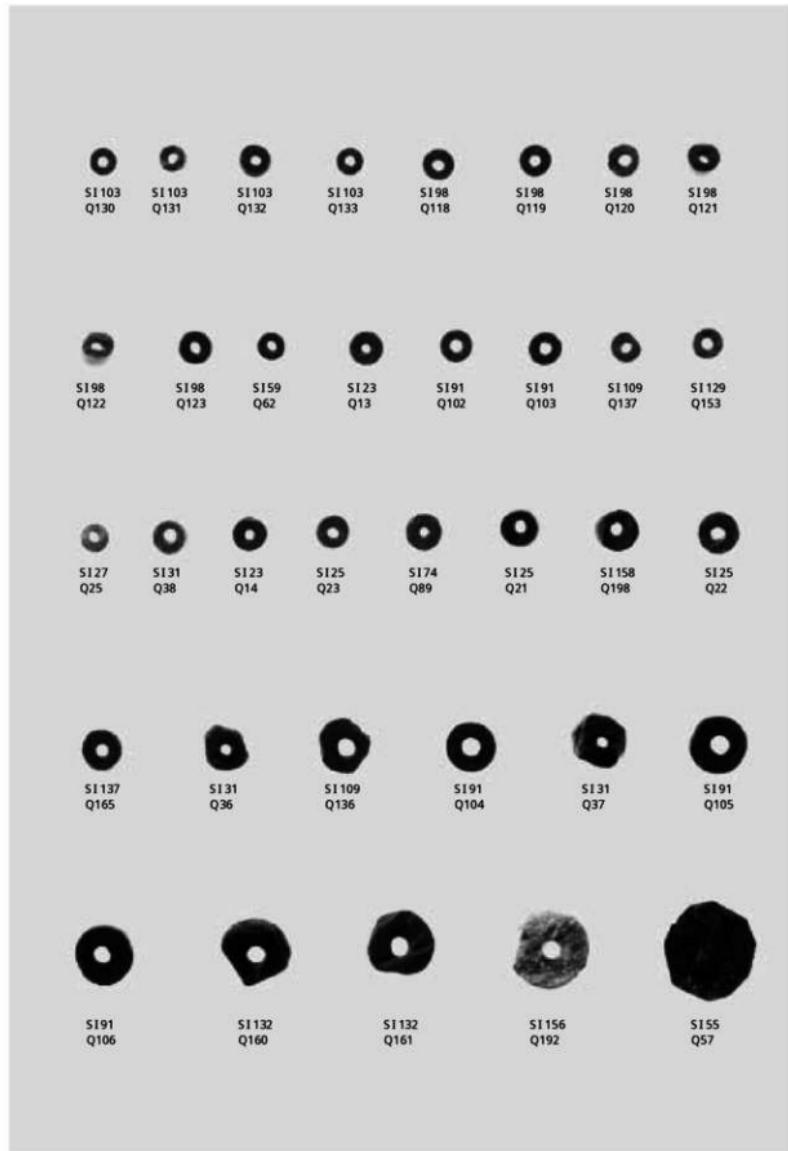
出土石製品



出土石製品



出土石製品



出土石製品



SI29- Q30



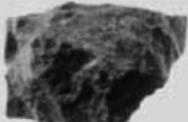
SI29- Q31



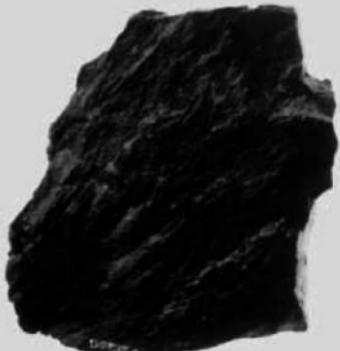
SI72- Q79



SI52- Q53



SI93- Q112

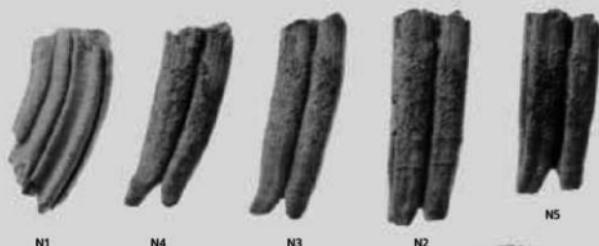


SI125- Q148



SI125- Q149

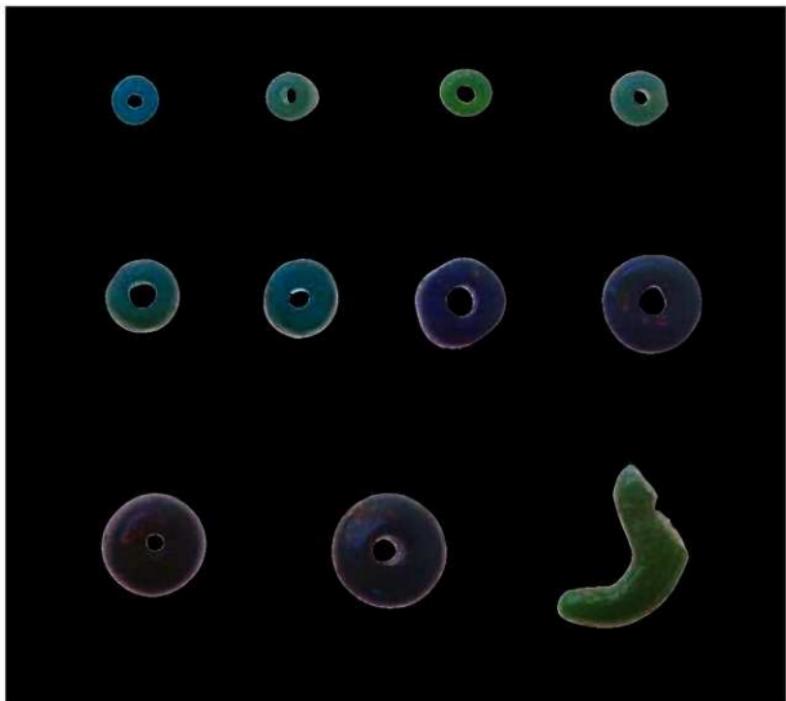
S1110



S197



0 10cm



SI 125- Q18



SI 152- Q188

出土石製品・ガラス製品

抄 錄

茨城県教育財団文化財調査報告第309集

堂ノ上遺跡

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道
新設事業地内埋蔵文化財調査報告書

下巻

平成21（2009）年3月18日 印刷
平成21（2009）年3月23日 発行

発行 財團法人茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター一分館内
TEL 029-225-6587

印刷 衛平電子印刷所
〒970-8024 いわき市平北白土字西ノ内13番地
TEL 0246-23-9051